
Arc-en-ciel ~ なないろのきざはし ~ (赤明ルート)

CENTER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Arc-en-ciel〜なないろのきざし〜（赤明ルート）

【Nコード】

N5144J

【作者名】

CENTER

【あらすじ】

学園の二年生である城崎陽は、友人たちとごく普通の日常を送っていた。

ある日、陽は取り壊し間近の神社で一人の少女と出会う。

少女は言った。「虹を架けてみないかな？」と。

それから二週間。虹は天にかかり、本当の物語が始まる。

虹色の願いと小さな小さな奇跡が紡ぐ物語。

コンセプトは小説でギャルゲ。

個人ルートに入りました。共通ルートからの続編になります。

六月十五日（前書き）

この作品は、Arc-en-ciel（なないろのきざし）（共通ルート）の続きです。

読んでいない方は、先にそちらをご覧ください。

六月十五日

< 6月14日(日) >

< 神社 裏 >

強烈な煌きを最後に、光は唐突に収まった。

【那美】

「陽君、大丈夫だったかな？」

あんなに非常識な状況を起こした張本人のくせに、しれっとそんな事を言ってくる。

いや、張本人だからこそか。

【陽】

「あ、ああ。驚いただけ　　って、那美!？」

【那美】

「どうかした？」

【陽】

「どうかって、お前、その髪……」

【那美】

「髪？」

那美は、自分の髪を一房取って眼前にかざす。

【那美】

「あ、薄くなってる」

【陽】

「『あ』ですむ事態じゃないだろ！」

黒かった髪が、全部灰色になってるんだぞ！？

【那美】

「そんなに心配しないで。力を使って……私を分けてしまったから薄くなっただけだから」

【陽】

「力？ それって、さっきのアレか？ って言うか、何だったんだよ、あれは!？」

夜なのに虹が出来てたり、光ったり、薄くなったり、訳がわからないっての。

【陽】

「ちゃんと説明してくれ！」

【那美】

「……ごめんね。今は、話せないの」

【陽】

「話せないって……それは無いだろ」

これだけ不思議な事を見せられて、はいわかりましたって引き下

がれるか。

【那美】

「……ごめんなさい。でも、これは陽君達に悪い事じゃないの!」

那美が肩を落として目を伏せる。

【那美】

「それしか言えないけど、それは本当だから……」

【陽】

「はあ」

そんなに悲しそうな顔されたら、聞いているこっちが悪者みたいじゃないか。

【陽】

「わかった。お前の言ってる事、信じるよ」

【那美】

「陽君」

【陽】

「『今は』って事は、そのうち話してくれるんだろ?」

【那美】

「うん。いつか、必ず話すよ」

【陽】

「ん、そうしてくれ。それじゃ、帰るよ」

もう門限ぎりぎりだ……早く帰らないとやばい事になる。

【那美】

「あ、ちょっと待って」

【陽】

「どうした？」

【那美】

「うん。あれを見て」

【陽】

「ん？」

空を見上げる。

もう何があっても驚かないから

【陽】

「って、何だあれ!？」

空には、虹の赤色の部分だけが残って浮かんでいる。

どうやってたら虹が1色残るんだよ……

【那美】

「ちょっと、待っててね」

那美が両手を掲げる。

さつきと同じように光が那美と虹を包む。

【陽】

「これは……」

虹が光の中に溶け出す。

そして、その光は、那美の手の中に集まって行った。

【那美】

「うん、これで良いかな」

光を包み込んだ手を開くと、そこにはビー玉大の赤い珠が載っていた。

【那美】

「陽君。これを持って行って」

【陽】

「何なんだ？」

【那美】

「これはね」

< 6月15日(月) >

< 学生寮 213号室 >

【陽】
「『奇跡だよ』 か」

机の上には那美からもらった『奇跡』の珠があった。

これが無かったら昨日の不思議体験は全部夢で片付けられたのに

……

こうして証拠が残ってるんじゃ、受け入れるしかないか。

【陽】
「心から祈れば小さな奇跡を起こせるって言われてもなあ……」

あれだけ現実離れた光景を見せ付けられたんだ。

その効果の真偽について疑いはしないけど。

でも、どのくらいまでが『小さな奇跡』なんだ？

お金が欲しいと祈ったとして、100万円は無理で10万なら貰えるとか、そんな感じか？

どうせなら、その所の基準をはっきりしてもらいたかったな。

【陽】
「ま、いいか」

心から祈るほど切実な願いは、今の所無い訳だし。

俺は、珠を制服の内ポケットに突っ込んで部屋を出た。

<学生寮 食堂>

黄牙を叩き起こして食堂に行くと、食堂の一角にお馴染みのメンバーが揃っていた。

【陽】

「おはよう」

【黄牙】

「おーす」

適当に挨拶を交わして俺達も同じテーブルに着く。

【陽】

「結局集まってるんだな」

【赤明】

「ええ。アルカンシエルって枠が無くなっても、知り合いを見つけたら自然に集まるものよ。城崎君もそうでしょう?」

【陽】

「ああ、そうだな」

アルカンシエルだから集まるじゃなくて、ただ友達だから集まる。

俺達は、アルカンシエルを通じて、そのくらいにはいい関係を築く事ができていたらしい。

【赤明】

「何だか嬉しそうね」

【陽】

「ん、そうか？」

【赤明】

「そんな顔をしてるわよ」

枠が無くなっても、全部が無くなったりはしない。

変わった事はちゃんと残っている。

【陽】

「ああ、そうかもな」

それが、何となく嬉しかった。

<学園 2年教室>

今日も1日の授業が終わり、放課後になった。

【黄牙】

「陽、どっか遊びに行かねえか？」

帰り支度をしていると、鞆を持った黄牙が声をかけて来た。

【陽】

「悪い。ちょっと用があるんだ」

【黄牙】

「あー、そうか」

【陽】

「そういう訳で、また今度な」

【黄牙】

「おう。んじゃーな」

黄牙を見送ってから、携帯を取り出す。

新着メールは無い。

【陽】

「でもま、一応な」

俺は携帯をポケットに戻し、鞆を担いで教室を後にした。

<神社 裏>

【陽】

「ん、やっぱり何もないか……」

俺は、昨日の夜、超常現象に巻き込まれた場所を訪れていた。

頭上にはごく普通の青空が広がっていて、虹の姿など欠片も無い。
那美がいる事を少し期待していたが、その姿も見当たらなかった。
こうしていると、ますます昨日のアレが夢だったんじゃないかと
思えてしまう。

【陽】

「でも、あれは現実だよな」

ポケットから、赤い珠を取り出す。

太陽の光にかざすと、赤い光が目に入った。

見た目はただのビー玉と大して変わり無い。

それでも、これだけがあの出来事を現実と証明する物だった。

【陽】

「はぁ………帰るか」

那美がいないのなら、これ以上いても仕方が無い。

どうもすつきりしないけど、もう帰ろう。

帰ってから黄牙を誘い出して遊びに行こうかなあ。

< 神社 境内 >

【赤明】

「あら、城崎君？」

【陽】

「赤明？」

境内まで戻ると、そこではったり赤明に出くわした。

【陽】

「どうしてここに？」

【赤明】

「那美の事が気になったから、ちょっと来てみたの。あなたは？」

【陽】

「俺も似たような物だ。残念ながら、那美はいなかったぞ」

【赤明】

「そう……来てなかったの」

【陽】

「ん、本人も忙しくなるって言ってたし、仕方ないだろ」

昨日のあれを見た後だと、理由が本当かどうかは怪しいところだが、

俺達の前に姿を見せないって事については本当なんだろう。

それで無いなら、わざわざ解散する必要は無かった筈だ。

【陽】

「もしかして、赤明には連絡があったのか？」

【赤明】

「那美から？ いいえ、無かったわ」

【陽】

「それなら、やっぱり来られないんだろ」

【赤明】

「ええ、そうね。」

「でも、少し待ってみるわ」

【陽】

「待つつて、那美をか？」

【赤明】

「当たり前でしょう。他に誰がいるのよ」

確かに、それはそうだな。

【陽】

「なら、俺も付き合っ方がいいか？」

【赤明】

「私はいいけれど、あなたはもう帰る所だったんじゃないの？」

【陽】

「そのつもりだったけど、気が変わったんだ」

もう帰るつもりだったけど、話し相手がいるならもう少し待ってもいいだろう。

赤明だって、1人で待ってるよりは退屈しないだろうしな。

【赤明】

「そう？」

それじゃあ、少し待ってみましょう」

【陽】

「ああ。上がるか？」

秘密基地を指差す。

【赤明】

「ここでいいわ。那美を見逃したら大変なもの」

【陽】

「ん、それもそうだな。そうするか」

2人並んで、石段に座った。

上から見下ろす形で、石段の前を歩きかう人々に目を凝らす。

学校帰りらしい学生の集団が通り過ぎ、

これから遊びに行くのか、帰っているのかわからないが、子供の群れが走っていく。

買い物に行くらしい主婦や、スーツ姿の男性も見える。

多種多様な人の波。

だが、その中に、俺達の探している姿は見つからない。

まあ、良く考えたら、赤明がいる時に来られても困るんだけどな。

赤明の前で奇跡云々の話をする訳にもいかないし。

あれ？

だったら俺が待つてる意味って無いんじゃないのか？

【陽】

「しまったなあ……………」

【赤明】

「どうかしたの？」

【陽】

「あ、いや、別に」

【陽】

「ところでさ、赤明は那美に何か用があるのか？」

【赤明】

「いいえ、特に用があるわけではないの。ただ、少し話があったかっただけで」

【赤明】

「アルカンシエルの解散の話も随分と急だったでしょう。何だか不完全燃焼……消化不良とでも言うのかしらね」

【陽】

「確かに、突然だったな」

何の前触れも無く、今日で解散、だったもんなあ。

元々あの日で解散するって決めてたのか、

それとも、虹を架けたから解散するって決めたのか。

どっちなんだろ。

【赤明】

「ねえ、覚えてる？」

【陽】

「何を？」

【赤明】

「初めて那美に会った日の帰りの話」

【陽】

「あー、那美が何か抱えてるんじゃないかって話か？」

【赤明】

「そう、それ。那美の抱えてた事情は、これの事だったのかなって」

【陽】
「んー……」

引越してしまうって事情で納得できなくも無いけど、

那美の不思議な力を見た今では、もっと他に何かがあったんじゃないかと思う。

ただ、それを赤明に言うわけにはいかないんだけど。

【陽】

「まあ、そうなんじゃないか。引越して言ったら、結構な大事件だし」

【赤明】

「そうね……」

【赤明】

「私達は、那美の力になってあげられたのかしら？」

ふっと、遠くに目をやりながら赤明が呟く。

その視線の先には、多分、ここにはいない那美の姿があった。

そうか。

赤明は、あの何気ない会話で俺達が那美を助けるって言った事を覚えていて。

そうしてあげられたかどうかが不安で、ここに来たんだ。

橙歌達が騒ぎを起こした時とか、仕方なく世話を焼いてるんだと思っただけ

【陽】

「優しいんだな」

【赤明】

「な、何を言っつよ……」

【陽】

「いや、思った事を言っただけなんだけど」

【赤明】

「もう、からかわないで」

ぷいっとそっぽを向かれる。

そんなつもりは無かったんだけど、それはまあ置いておくか。

【陽】

「そんな心配しなくても、大丈夫だろ」

【赤明】

「え……?」

【陽】

「2週間も散々遊んで、最後に虹まで架けたんだ。」

アルカンシエルが那美の思い出作りだったのなら、完璧だったって」

アルカンシエルってグループが存在したあの2週間。

俺は楽しかったし、那美だって、楽しそうにしていた。

那美の事情が何だったとしても、それは、間違っていないはずだ。

【赤明】

「本当に、そう思うっ？」

【陽】

「ああ、思うよ」

【赤明】

「そう……」

背中から照らしてくる夕日の加減で見えなかったけれど、

【赤明】

「良かった」

赤明はきつと、綺麗に笑っていると、そう思った。

六月十六日

< 6月16日(火) >

< 学園 2年教室 >

午後の最初の英語の授業中。

【陽】

「ふぁ……………」

思わず出てしまった欠伸を教科書で隠す。

さっきから、教師の読み上げる文章がちっとも理解できない。

教科書も理解できないほど頭が悪いわけじゃない、働いてないだけだ。

昼食後の授業って、何でこんなに眠いんだろう…………

【陽】

「……………う……………」

あー、無理だ…………もう…………寝…………

【英語教師】

「……………」

【陽】

「っ！」

ばれた！？

てか、まだ寝て無いつて！

【英語教師】

「新嶋！」

【赤明】

「あ、はいっ」

何だ、赤明だったのか。

って、赤明が注意されるってのも珍しい話だな。

【英語教師】

「外に何か面白い物があるのか？」

【赤明】

「いえ……無いです」

【英語教師】

「なら授業に集中するように」

【赤明】

「はい。すみません」

赤明が素直に頭を下げる。

普段真面目な赤明だけに、それ以上怒られることもなく、授業が再開された。

【英語教師】

「よし、じゃあ続きだが」

.....

.....

.....

授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。

【英語教師】

「では、今日はここまで。」

「明日も授業あるからな。宿題を忘れないように」

【クラス委員長】

「起立ー。礼」

授業が終わると、赤明が俺の席にやって来た。

【赤明】

「城崎君。ノート見せて貰っていい？」

【陽】

「ん、それはいいけど。」

「寝てたのか？ 珍しいな」

赤明は割と生真面目な性格を裏切らず、授業態度はかなり真面目だ。

【赤明】

「寝てたわけじゃないのよ……余所見してただけで」

【陽】

「……余計珍しい気がするんだが」

寝てしまうのなら、まだ仕方無い部分があるけど、余所見とは……
外を見てたらしいけど、

【陽】

「グラウンドで何かあったのか？」

【赤明】

「……何も無いわ。ただ、少し集中力が途切れてしまっただけで」

【陽】

「そっか。それじゃ、これ。」

途中で半分寝てたから、ちょっと読みにくいかもしれないけど」

赤明にノートを渡す。

【赤明】

「取ってないよりはずっとましよ」

赤明はぺらぺらとページをめくって中を確認する。

【赤明】
「十分読めるわ。
借りて行くわね」

【陽】
「ん、わかった。
宿題もあるし、早めに返してくれよ」

【赤明】
「ええ、写したらすぐに返すわ。ありがとう」

赤明はノートを持って自分の席に戻って行った。

.....

.....

.....

その次の数学の時間、

何となく赤明を眺めていると、赤明は何度か窓から外を見下ろしていた。

やっぱり、外に何かあるのか？

俺も、窓の外を見ようとしたが、俺の席からはグラウンドは見えなかった。

< 学生寮 213号室 >

夕食を食べた後、部屋でくつろぐ。

んー、何か忘れてるような気がするんだけどなあ……

何かやるべき事があった筈なんだけど、何だっけ。

そんな事を考えていると、携帯が着信音を鳴らした。

【陽】

「ん、メールか」

差出人は赤明だった。

メールを開く。

From: 新嶋 赤明

Subject: ノート

写し終わったのだけど、これから
返しに行っても大丈夫かしら？

あ、これだ。

何か忘れてると思ってたら、宿題を忘れてたのか。

ノート無いと始まらないからな、返信返信っと。

【陽】

「『大丈夫だから、持って来てくれ』と」

これでよし。

.....

.....

.....

返信してしばらく待っていると、部屋に赤明がやって来た。

ノートを2冊と、筆記用具を抱えている。

【赤明】

「こんばんは」

【陽】

「よ、わざわざ悪いな」

【赤明】

「いいのよ。私が借りたんだし。」

それに、少し聞きたい事もあったから」

【陽】

「ん？ 何だ？」

【赤明】

「1ヶ所だけ読めない所があったから、確認してもらいたいの」

【陽】

「ああ、やっぱりあったか」

眠気が最高潮の時とか、何を書いたのかさっぱり覚えてないし。

読めないような字もあるだろうとは思ってたんだ。

【陽】

「ま、入ってくれよ。」

「ここじゃ書けないだろ」

【赤明】

「そうね。お邪魔するわ」

部屋に戻り、いつもお茶会に使っているテーブルの前に座る。

早速赤明が筆記用具を取り出し、ノートを開く。

【赤明】

「ここなんだけど」

赤明の指差した行に目を向ける。

【陽】

「ん……んー……」

まさしくミミズののたくったような字だ。

……何て書いてあるんだ、これ。

【赤明】

「どうしたの、城崎君」

赤明が不思議そうな顔をする。

【赤明】

「難しい顔してるけど……まさか」

【陽】

「悪い、読めない」

情けないと思いつつ、白状した。

途端に、赤明が呆れ顔になる。

【赤明】

「もう、しっかりしなさいよ」

【陽】

「眠かったんだよ。」

大体、赤明だって余所見してたんだから、人の事言えないだろ」

【赤明】

「それはそうだけど……」

赤明が言葉を濁した。

どうも痛い所を突いたらしい。

【赤明】

「まあいいわ。」

「ここ、見てくれる」

赤明が、自分のノートの一部を指差した。

【陽】

「ん？」

赤明の示した所を見てみる。

そこは、ちょうど赤明が読めないと言った部分だ。

【陽】

「書いてるじゃないか」

【赤明】

「前後から推測したのよ。」

「これであってるかしら？」

【陽】

「赤明があつてると思っんならいいんじゃないか」

【赤明】

「英語の成績は同じくらいじゃない」

【陽】

「まあ、そうなんだけど」

ノートに書かれた文章に目を通す。

読んでいると、かなり曖昧ではあるが、記憶が蘇ってきた。

【陽】

「ん、こんな感じだった気がする」

【赤明】

「結局曖昧なのね……」

【陽】

「そう言っちゃって。」

「ちょっと待っててくれ」

もう一度自分のノートを見る。

何て書いてるのか読めない字なのは変わらないが。

【赤明】

「読めないノートを見ても仕方ないじゃない」

【陽】

「いや、あらかじめ何て書いてるかわかってれば読めるんだよ」

2つのノートを照らし合わせて、解読しつつ確認する。

【陽】

「よし、あつてる」

【赤明】

「そう。良かったわ。」

それじゃ、私は帰るわね」

赤明が勉強道具を片付け始める。

さっき来たばかりなのに、もう帰るのか……

【陽】

「赤明」

ほとんど無意識の内に、赤明を呼び止めていた。

【陽】

「折角来たんだし、お茶会でもやらないか？」

【赤明】

「それは構わないけれど、ポットも葉っぱも無いわよ」

あ、そうか。

いつも、お茶は赤明が持って来てたんだっとな。

とは言っても、わざわざ取りに帰ったんじゃ、ここに来たついでのお茶会じゃないしな。

いや、待てよ。

わざわざきちんとお茶を淹れなくてもいいんじゃないか？

【陽】

「冷蔵庫にジュースならあるぞ。

それじゃ駄目か？」

【赤明】

「そうね……」

俺の提案に、赤明は少し考える。

【赤明】

「偶にはそういうのもいいわね。

それじゃ、橙歌に連絡するわ」

赤明が携帯を取り出して、橙歌を呼び出し始める。

【陽】

「俺は黄牙を呼んで来るよ」

隣の部屋にいる奴を呼ぶのに、わざわざ携帯を使う必要も無い。

俺は、黄牙を直接呼びに行く事にして腰を上げた。

.....

【陽】

「ただいま」

【赤明】

「お帰りなさい。」

「あら？ 大陣君は？」

【陽】

「唯鈴ちゃんと電話してたから、誘うのは止めたよ」

【赤明】

「そう。困ったわね」

【陽】

「どうした？」

【赤明】

「橙歌も来られないのよ。
他の用があるらしいわ」

【陽】

「え、そうなのか？」

【赤明】

「ええ、どうする？」

【陽】

「ん、そうだな……」

どうしようかな。

2人でお茶会ってのはどうも寂しいけど、折角やる気になってるのに、今更止めるのもなあ。

悩んでいると、赤明が口を開いた。

【赤明】

「来られないのなら仕方ないわ」

やっぱり中止か……

【赤明】

「2人でやりましょう」

【陽】

「え？」

意外な言葉に、思わず聞き返してしまった。

何となく取り止めになると思っていただけに、マジで意外だ。

【赤明】

「あら、嫌だった？」

【陽】

「いや、そんな事は無いって」

【赤明】

「それじゃ、準備しましょう」

【陽】

「ああ、そつだな」

.....

……

……

準備をして、お茶会を始めた。

始めたんだが……

【陽】

「……………」

【赤明】

「……………」

【陽】

「……………」

わ、話題が無い……っ。

いっつもなら橙歌とか黄牙が最初に何か言って、俺や赤明は専らリアクションだし、

アルカンシエルメンバーの話の時は、話す議題があっただけど、用も無く2人だけで会話するなんて、今までに無い展開だ。

て言うか、そうか、2人きりなんだよな……。

ちょっと人数少なくなるだけでこんなに空気変わるとは思わなかった。

何話したらいいのかわからん……

でも、何か言わないと。

【陽・赤明】

「なあ」

「ねえ」

げ、被った。

【陽】

「な、何だ？」

【赤明】

「あ、いえ、城崎君こそ」

【陽】

「いや、特に話題があつた訳じゃないんだ。だから、赤明が話してくれ」

【赤明】

「私も、同じよ」

【陽】

「ん、そうか……」

2人とも沈黙に耐えかねただけって事か。

【陽】

「……………」

【赤明】

「……………」

そしてまた沈黙。

【陽】

「あー！ー！ もう！」

【赤明】

「な、何？」

グダグダ考えるのは止めだ。

もう素直に話してしまおう。

【陽】

「何と言つか、話題が無いよな」

【赤明】

「そうね。」

いつもは橙歌が五月蠅いくらいに話してくれるんだけど」

【陽】

「そもそも、こういう機会が今まで無かったもんなあ」

【赤明】

「ええ。」

やっぱり、私達は4人でセットだったから」

【陽】

「ん、そうなんだよな」

初めて会った時から、俺は黄牙と友人だったし、赤明と橙歌もそうだった。

だから、それなりに長い付き合いとは言っても、個人としての付き合いはそれほどでもないのかもしれない。

橙歌とセツトの赤明だとか、4人での時の赤明、アルカンシエルの一員の赤明の事は良く知ってる。

でも、俺と1対1の赤明を、俺は良く知らない。

だから、こんな風に会話や対応に困るんだ。

ま、慣れない状況を意識しまくってるってのもあるだろうけど…
…いや、むしろ相乗効果か。

と、そんな事が分かった所で、良く知るためにはやっぱり会話や何かをしないといけないんだよな。

【陽】

「なあ、赤明」

【赤明】

「何？」

【陽】

「お前の趣味って何だ？」

【赤明】

「どうしたの？ 急に」

【陽】

「いや、まあ……」

赤明の事がもっと知りたいからさ、なんて言わない、ってか、言えるか。

適当に誤魔化そう。

【陽】

「いいじゃないか、ほら、話題も無かったし」

【赤明】

「……それもそうね。」

で、私の趣味だったかしら？」

【陽】

「ああ」

【赤明】

「そうね……」。

でも、特に趣味と言えるものは無いかもしれないわ」

【陽】

「無いのかよ……」

話のきっかけにしようと思ったのに、それじゃ困るんだが。

【赤明】

「音楽を聴いたり本を読んだりはするけれど、趣味と言っ程じゃないもの」

【赤明】

「あ、でも、最近ちょっと興味がある事はあるのよね」

【陽】

「何なんだ？」

【赤明】

「お茶よ」

【陽】

「お茶？」

「ってあれか？ 茶道とか？」

いきなり高尚な趣味に走るなあ……

【赤明】

「そうじゃないわよ。」

「ほら、お茶会の時って私がお茶を淹れるでしょう？」

【陽】

「ん……そう言えばそうだな」

これも決めた訳じゃないけど、自然な役割分担で、お茶会でお茶を淹れるのは赤明の役目になっていた。

【赤明】
「だから、美味しい淹れ方とか、お茶の種類とか、少し気になって
いるの」

【陽】
「ああ。それで」

茶道じゃなくって、文字通りにお茶なのか。

でも、気になってるって、そこで終わりか？

【陽】
「調べて実践しないのか？」

【赤明】
「寮の部屋って台所が無いじゃない。
だから、大して出来ない気がするのよ」

【陽】
「なるほど……」

その意見は良くわかる。

部屋の基本設備だと、お湯すら沸かせないんだもんな。

【赤明】
「もう私の話はいいでしょう？
次は、城崎君の番よ」

【陽】
「え、俺も話すのか？」

【赤明】
「あら、私だけに話させるつもりだったの？
それは不公平じゃない？」

それもそうか。

【陽】
「分かったよ。
で、何話せばいいんだ？」

【赤明】
「私が趣味だったのだから、あなたも趣味についてよ」

【陽】
「趣味か……。
そうだなあ……」

あれ？

考えてみると、俺もこれと言った趣味は無い、のか？

たいていは4人のグループかアルカンシエルか黄牙単体のどれかと何かやってるし。

1人の時なんて、赤明が言ってたのと大差無いな。

あえて趣味って言うなら……

【陽】

「みんなと一緒にいる事、なのかなあ」

って、何を言ってるんだか。

こんなの、趣味とは言わないだろ。

【赤明】

「ふふ、城崎君らしいわね」

何を言ってるのよ、とか言われるかと思ったんだが、

予想に反して、赤明はくすくすと笑っている。

【陽】

「何がだよ？」

【赤明】

「だって、私が見た城崎君って、ほとんど誰かと一緒にいるもの」

【陽】

「そ、そうだったか？」

【赤明】

「そうよ」

【陽】

「んー、そうかもなあ」

大体、赤明と会うのなんて学校かお茶会かアルカンシエルの活動
なんだから、誰かがいて当然なんじゃないか

【赤明】

「人を惹きつける不思議な魅力でもあるのかしら？」

【陽】

「いや、それは無いと思うけど」

【赤明】

「それなら、意外に寂しがりなのかしらね」

それはつまり、俺が人恋しくていつつも誰かと一緒にいるって言
いたいのか。

そんな事、あるはず無いだろ……

【陽】

「まさか。変な事言つなよ」

【赤明】

「あら、「ごめんなさい」

【陽】

「ったく……」

【陽】

「俺も答えたんだから、今度は赤明の答える番だな」

【赤明】

「ええ、いいわよ」

【陽】
「ん、じゃあ」

それからしばらくの間、俺達は互いに他愛の無い質問をし合って
過ごした。

.....

.....

.....

【陽】
「1人の時とか、何してるんだ？」

【赤明】
「最初にも言った気がするけれど、音楽を聴いたり本を読んだりね。
後、勉強もするわよ」

【陽】
「勉強ね.....」

何か引つかかるな。

赤明が来る前も同じ様な事考えてた気がするけど.....

【陽】
「あ」

思い出した。

【赤明】

「あっ」

何か伝わる物があつたのか、赤明もはっとして表情を変える。

【陽・赤明】

「「明日の宿題！」」

その為にノートを返してもらったつてのに、何で忘れてたんだ。

【陽】

「うわ、参ったな」

【赤明】

「話し込んでる場合じゃなかったわね……」

【陽】

「正直やる気しないんだけど」

【赤明】

「駄目よ。ちゃんとやらないと」

【陽】

「わかってるけどさあ」

【赤明】

「はぁ……」。

手伝って上げるから、早く終わらせましょ」

【陽】

「え、マジで？」

【赤明】

「橙歌なら手伝いだけど、城崎君なら協力になるかしら？」

【陽】

「そんなのどっちでもいいけど」

【陽】

「よしっ、さっさと片付けるか！」

【赤明】

「急にやる気を出したわね……」

【陽】

「折角赤明が協力してくれるって言うてるからな」

ま、無理にでもテンション上げて行かないと気力が萎えそうなだけなんだけど。

鞆から、教科書と筆箱を取り出して、テーブルの上に置く。

今日の宿題は、1ページ分の英文の和訳だ。

【赤明】

「始めましょうか」

【陽】
「そうするか」

俺達は、手にペンを握って、英文に挑み始めた。

.....

.....

.....

宿題を始めてしばらくした時、俺はある事に気がついた。

赤明は俺の対面に座っているんだが、教科書を見る時に妙に長く手を止めている。

【陽】

「赤明」

【赤明】

「何？」

赤明が、ノートから顔を上げる。

【陽】

「もしかして、教科書見にくいか？」

赤明は教科書を持ってきていなかったから、俺のを2人で見ている。

その教科書を、俺が普通に見てるって事は、赤明の側からは逆さまって事だ。

英文だし、反対からは読みにくいかもしれない。

【赤明】

「どうしてそう思うの？」

【陽】

「教科書見てる時間が長いからだ。

簡単な文章でも結構時間かかってたし」

俺がそう答えると、赤明は少しばつが悪そうな顔で頷いた。

【赤明】

「……そうね。実を言うと、少し読みにくいのよ」

【陽】

「言ってくれば良かったのに」

【赤明】

「少しも読めないわけじゃないから黙っていたのよ。

でも、かえって気を使わせたみたいね」

【陽】

「全くだ。赤明こそ、変に気を使うなよ」

【赤明】

「ええ。そうね、ごめんなさい」

【陽】

「いいよ、別に謝る事でもないだろ。」

で、教科書の方だけど、こっちに移って来るか？」

少し横に移動して、俺の隣にスペースを空ける。

2人なら、テーブルの1辺でも足りるはずだ。

【赤明】

「そうするわ」

赤明が立ち上がって、隣に移動してくる。

【陽】

「これで大丈夫か？」

【赤明】

「ばっちりよ」

【陽】

「それは良かった」

【赤明】

「続きをしましょうか」

【陽】

「そっだな」

.....

.....

.....

【陽】

「うーん」

どうもはかどらない……

理由はわかってる。

赤明だ。

1度変に意識してしまったせいなのか、隣の赤明に気を取られている。
いる。

視線を横に向けると、真剣な顔でノートに向かっている横顔が見えた。

やっぱり、可愛いよな。

そんな風に見る事はあんまり無いけど、文句無しに美少女だと思
う。

【赤明】

「？」

顔を上げた赤明と目が合った。

【赤明】

「手が止まってるわよ。どうしたの？」

【陽】

「あー、いや、別に」

どうしたって言われても、答えられるか。

【赤明】

「何かわからない所でもあるの？」

【陽】

「そう！ そうなんだよ」

丁度良く勘違いしてくれたみたいだな。

このまま誤魔化してしまおう。

【赤明】

「どこ？」

【陽】

「え、ああ、ここだけど」

適当に英文を指差す。

【赤明】

「ここ？ 別に難しくないと思っけど……」

【陽】

「え」

自分で読んでみる。

……見ただけで意味が分かるくらい簡単だった。

どう誤魔化せば　　そうだ。

【陽】

「いや、えーと、ここは簡単なんだけど、前の文と繋がらなくて」

これでどうだ！

【赤明】

「この前？」

そうね、確かに少し難しかったわ」

よし。何とか誤魔化したぞ。

【赤明】

「ノート見せてもらおうわね」

【陽】

「ん、ああ」

赤明が、身を乗り出してノートを覗き込む。

肩に柔らかな体が触れ、目の前一杯に横顔が広がる。

【陽】

「っ」

思わず身を引いてしまった。

【赤明】

「どうしたの？」

赤明が顔だけこっちに向けて聞いてくる。

だから、近いつて！

【陽】

「き、気にしないでくれ」

【赤明】

「そう？ それなら、ここの説明をするけど」

【陽】

「ああ、頼むよ」

【赤明】

「ええ。それじゃ、この単語だけど、

これは、ここに掛かっているのよ。

それで 「

赤明が教科書を指しながら説明を始めるが、イマイチ頭に入っていない感じがした。

どうも、今日の俺は変な感じだ。

この妙な感覚が、たまたま赤明の女の子な所を意識したのを引き

ずっているだけなのか、

それとも別の感情に由来するものなのか。

持て余し気味の気持ちについて考えてみないといけないのかも
しれないと、そう思った。

六月十七日

< 6月17日(水) >

< 学園 学生食堂 >

昼休み、昼食を学食で取る事にして、黄牙と一緒に学食へと向かった。

学食に入ると、すぐ近くに橙歌が立っていた。

【橙歌】

「あ、陽」

向こうも俺達を見つけて、駆け寄って来た。

【橙歌】

「陽達も今日はこっち？」

【陽】

「ん、まあな」

【橙歌】

「そっかあ」

【橙歌】

「ね、それなら一緒に食べない？」

【陽】

「俺はいいけど」

【黄牙】

「俺も構わないぜ」

【陽】

「なら決定だな。」

「橙歌は1人か？」

【橙歌】

「うっん。赤明と一緒になんだ」

そう言った時、タイミング良く赤明が姿を見せた。

【赤明】

「橙歌、おまたせ。」

「つてあら、2人もこっちに来てたのね」

【陽】

「ああ。」

「それで、橙歌に誘われてたんだ」

【赤明】

「そうだったの」

【赤明】

「それはいいけれど、席は探してくれたの？」

【橙歌】

「あ、そうだ。
席を探してるんだった！」

【赤明】
「まだみたいね」

【橙歌】
「赤明、ごめんっ」

【橙歌】
「もう、陽達のせいでやる事忘れてたじゃんか」

【黄牙】
「何で俺らが悪もんみたいになってんだよ！」

【赤明】
「別に良いわよ。
2人分の席しか見つけていなかったら、どうせ探しなおさなきゃならなかったんだから」

【橙歌】
「あ、そっか」

【黄牙】
「ほら見る。
むしろ手間が省けてんじゃねえか」

【橙歌】
「そうだけどさあ、何か黄牙に勝ち誇られるとむかつくなあ」

【黄牙】

「どつという意味だよ」

【橙歌】

「そのまんまの意味だけど？」

【赤明】

「もう、2人とも、下らない事で喧嘩しないで」

2人の会話がヒートアップして来た所で、赤明が口を挟む。

【橙歌】

「だってえ、黄牙が偉そうなんだもん」

【黄牙】

「だから、何でもかんでも俺のせいにするじゃねえよ」

【赤明】

「だから喧嘩しないでって言っているでしょ。席が無くなる前に大陣君達も食券買って来た方が良いわよ」

【陽】

「そつだな。」

ほら黄牙、行くぞ」

少し強引に会話を断ち切って、黄牙を連れ出す。

本当に喧嘩をしてるのなら、後で気ますぐなるだけだが、

黄牙と橙歌の口喧嘩は単なるコミュニケーションで、じゃれてる

みたいなものだ。

むしろ、熱くなってマジで喧嘩になる前に適当に終わらせる方が正しい。

券売機の列に並びながら振り向くと、赤明が何かを橙歌に言っているようだった。

多分、適当に機嫌を取ってるんだろう。

なら、俺は黄牙にフォローでも入れておこな。

わざわざ言葉を交わすまでも無く、すっかり手馴れてしまっている俺と赤明だった。

.....

.....

.....

食券をカウンターで料理に交換して、俺達は空いている席を探し始めた。

とは言っても、学食はそれなりの席数があるから、探すと言っよりは選ぶと言っ感じだ。

【橙歌】

「あそこにしよつよ」

【黄牙】

「いいんじゃないかねえか」

【赤明】

「そうしましょうか」

どこに座ったって差が有るわけでもないし、こだわりも無い。

俺達は適当に目星をつけた一角に座る事にした。

その移動の途中、

【赤明】

「あっ」

短い声を上げて、俺の前を歩いていた赤明が急に立ち止まる。

目の前には誰もいないが、何かにぶつかりそうになって慌てた様に見えた。

急停止してバランスを崩したのか、赤明の体が後ろに傾く。

【陽】

「赤明っ」

【赤明】

「きゃっ」

咄嗟に手を出したが、片手にお盆を持ち直しながらの中途半端な体勢では支え切れなかった。

赤明と一緒に、尻餅をつく。

そして、一瞬遅れて食器が床に落ちる音を立てた。

【陽】

「赤明、大丈夫か？」

【赤明】

「え、ええ」

まだ呆然としたままの返事が返って来る。

赤明は、食器や料理を被っていたが、特に怪我や火傷はしていないみたいだ。

おかずやサラダの葉っぱが制服に付いているが、お茶や味噌汁の器は赤明から少し離れた場所に転がっていた。

【黄牙】

「今のは焦ったぜ……」

黄牙が危ない物を弾き飛ばしてくれたのか。

全部では無いとは言え、あの一瞬で落ちている物を弾くとは。

【陽】

「さすが黄牙」

【黄牙】

「まあな」

黄牙がにやつと笑って、赤明に手を出す。

【黄牙】

「ほら、大丈夫かよ？」

【赤明】

「大丈夫よ。ありがとう」

落ち着きを取り戻した赤明が、黄牙の手を借りて立ち上がる。

【橙歌】

「赤明、大丈夫？」

「どうしたの？」

【赤明】

「ちょっと躓いたの。」

「ごめんなさい。迷惑かけたわね」

【橙歌】

「無事ならいいよ。」

「って、うわ、ドロドロじゃん！」

「早く拭かないとー！」

橙歌が取り出したハンカチで制服の汚れを拭く。

それをぼーっと見ていると、黄牙が俺にも手を出してきた。

【黄牙】

「いつまで座ってんだよ」

【陽】

「ん、サンキユ」

手を借りて立ち上がる。

【赤明】

「城崎君」

【陽】

「ん？」

【赤明】

「ありがとう。助けてくれて」

【陽】

「いや、結果的にはあんまり変わらなかっただろ」

【赤明】

「それでもよ。」

「嬉しかったわ」

【陽】

「そんなもんか？」

【赤明】

「ええ、ありがとう」

視線と言葉が真っ直ぐに俺に向けられる。

【陽】

「あ、ああ」

その微笑みを浮かべた顔を見るのか、素直なお礼の言葉を受け取る事か。

多分、そのどっちもが気恥ずかしくて、俺は微妙に視線を外した。

床が視界に入り、そこは色んな物が散らばってちょっとした惨事になっていた。

【陽】

「うわ……これ片付けないと」

【赤明】

「私が片付けるわ。」

みんなは先に食べていて

【陽】

「いや、お前は先に着替えた方がいいと思うけど」

橙歌がちょっと拭いたとは言え、制服のあちこちに染みができている。

【赤明】

「でも」

【陽】

「いいから、ここは俺たちに任せとけよ。」

なあ？」

【黄牙】

「じゃあねえな」

【橙歌】

「えー、僕も？」

「仕方ないなあ」

かなり嫌そうだったけど、一応手伝ってくれそうだった。

【陽】

「そういうわけだ」

【赤明】

「それじゃあ、お願いするわ」

【黄牙】

「おうよ」

【橙歌】

「これ、貸しにしとくからね」

【陽】

「現金な奴だな……」

【橙歌】

「いいじゃんか。」

片付けなんて元々面白い事でもないんだし」

【赤明】

「わかったわ。

後でちゃんとお礼をするわね」

【橙歌】

「やたっ」

【陽】

「いいのかよ」

【赤明】

「ええ。

それじゃあ、後は」

【陽】

「ん、任せといてくれ」

【赤明】

「よろしくね」

赤明はそう言い残して食堂を出て行った。

【陽】

「それじゃ、片付けるか」

【橙歌】

「おー！」

俺達は、床の掃除をしてから、3人で遅めの昼食を食べて教室に戻った。

その後、赤明が帰って来たのは、午後の授業が始まる直前だった。

<学園 2年教室>

【赤明】

「城崎君、ちょっといい？」

午後の授業の合間、俺の席までやって来た赤明に声をかけられた。

【陽】

「ん、どうした？」

【赤明】

「今日の放課後、暇があるかしら？」

【陽】

「ああ、暇だけど？」

【赤明】

「良かった。」

それなら、ちょっと買い物に付き合っただけがいいの

【陽】

「え、俺にか？」

「何を買っただ？」

赤明にこんな風に誘われるのなんて、初めてだ。

男手が必要な物でも買うのか？

【赤明】

「昨日、お茶に興味があるって話をしたでしょ？
新しいのを買いに行こうと思ってるのよ」

【赤明】

「お茶を買う時は、いつも誰かと相談しながら買ってるから、付き合っただけで欲しくて」

【陽】

「誰かって橙歌だろ？
橙歌と行けばいいんじゃないか？」

お茶会の時のお茶の用意は、赤明と橙歌の分担のはずだ。

【赤明】

「昼休みに、お礼をするって言ったでしょう？
それをちよつと変わったお茶にするつもりなのよ。
本人を連れて行くわけにはいかないじゃない」

【陽】

「なるほどね、それでか」

【赤明】

「嫌なら別にいいのよ。1人で行くから」

【陽】

「嫌じゃないって。」

ちょっと気になっただけだ」

【陽】

「付き合っよ。放課後だな」

【赤明】

「ええ」

【陽】

「今日財布持って来てないから、1回寮に戻るけど、いいか？」

神社に集まった頃は持ち歩くようにしてたんだけど、アルカンシエルが解散した後は止めてたからな。

やっぱり持ち歩いてた方がいいのかもなあ。

【赤明】

「いいわよ。」

寮の前で待ち合わせしよう」

【陽】

「了解だ」

【赤明】

「それじゃ、放課後はよろしくね」

約束をした所でちょうどチャイムが鳴り、赤明は自分の席に戻って行った。

<道路>

寮で財布を取るついでに、着替えをして寮から出る。

赤明は、まだ来てないか。

側の扉に背中を預ける。

それにしても、赤明と2人で買い物か、何かデートみたいだな……

って、何わざわざ意識するような事考えてるんだ！

ただでさえ最近変な感じだったのに。

平常心平常心……

【赤明】

「城崎君」

【陽】

「うわっ！」

いつの間にか、赤明がすぐ隣に立っていた。

驚いた顔をしているのを見ると、かなり大げさに反応してしまっ
たみたいだ。

【赤明】

「ど、どうしたの？」

【陽】

「ん、ちょっと考え事しててさ。
気づかなかったよ」

【赤明】

「急いで来たつもりだったけれど、待たせてしまったのね」

【陽】

「いや、俺も来たばかりだったよ」

うあ、何だこのやり取りは……妙にますますデートっぽいんじゃないのか!?

【赤明】

「それじゃあ、行きましょうか」

【陽】

「そうだな。行くか、買出しに」

そうだ、ただの買出しなんだ。

デートだとか、意識してるんじゃないぞ、俺。

【陽】

「よし、ただの買出しに行くでしょう。そうしよう」

【赤明】

「……城崎君、ちょっと変よ」

【陽】

「そ、そんな事無いぞ。」

「さあ、買出しに出発だ」

【赤明】

「？」

首を傾げる赤明を連れて、俺達は商店街へと出発した。

<商店街>

【陽】

「で、どこに行くんだ？」

商店街にはよく来るけど、お茶を買いに来るのは初めてだ。

どこで売ってるのかもわからない。

【赤明】

「もうすぐよ。」

城崎君も行った事はあるはずよ」

【陽】

「俺はお茶なんか買いに行った事は無いぞ」

【赤明】

「ええ、お茶目的では無いでしょうね」

【陽】

「どついつ事だ？」

【赤明】

「着いたらわかるわよ。」

「さ、行きましょ。」

【陽】

「ん、ああ。」

良くわからないまま、赤明について行く。

商店街を少し歩き、

【赤明】

「ここよ。」

【陽】

「ここお？」

辿り着いたのは、よく知っている雑貨屋だった。

100円ショップの上位版みたいな店で、割と何でも売っている。

俺も、お菓子や文房具を買いに来た事があった。

【陽】

「お茶なんか売ってたか？」

缶とかペットボトルのお茶なら、確かに売ってたけど……

【赤明】
「売ってるわよ」

赤明がさつと店に入っていく。

俺は慌ててその後に続いた。

店に入った赤明は迷い無く足を進め、ある棚の前で立ち止まった。

【陽】
「ここか？」

【赤明】
「ええ」

赤明が頷く。

【陽】
「でも、ここに……」

棚には、インスタントコーヒーやティーバッグ、クリームや砂糖が並んでいる。

【陽】
「思いつきりインスタントなんだが……」

【赤明】
「そつよ。言わなかったかしら？」

【陽】
「聞いてないな」

てつきり、もっとこう、高級な感じなお茶を買ったと思ってた。

【陽】
「お礼って言うには安っぽくないか？」

【赤明】
「仕方ないのよ。
それなりのお茶を淹れるには、それなりの道具が要るの」

【陽】
「今あるヤカンじゃ駄目か」

【赤明】
「鉄分はよくないらしいわよ。
電気ポットのお湯もイマイチだし。
大体、どうしてコンロも無いのにヤカンなのかしら？」

【陽】
「あれは、確か黄牙が持ってきたんだっただな」
家に余ってたとかそんな話だった。

【赤明】
「どつせなら、ティーポットが欲しいわ」

【陽】
「ティーポットってあれか？」

何か、筒みたいな」

【赤明】

「筒？」

ああ、あれはティーサーバーね」

【陽】

「ん？ ティーサーバーって、食堂とかにあるやつじゃないのか？」

【赤明】

「そう言えば、あれも給茶機ティーサーバーね。

ええと、他にも呼び方があったはずだけど……プランジャーポットって言ったかしら？」

あれは、本当はコーヒーを淹れる為の道具よ」

【陽】

「え、そうなのか？」

喫茶店とかで見た事あるけど、紅茶を淹れる為の専用器具じゃなかったのか。

【赤明】

「ええ。」

ティーポットは、要するに急須よ」

【陽】

「へえ。」

それ位なら買ってでもいいんじゃないか？」

物凄く高い物でもないしな。

【赤明】
「それも考えたけど、今回は橙歌へのお礼だから。
橙歌が喜びそうな物の方がいいじゃない」

【陽】
「それで、インスタントのお茶？」

【赤明】
「ティーバッグもそう馬鹿にしたものじゃないのだけれどね。
今回は、色んな種類のお茶が目的よ」

【赤明】
「ちょっと変わった感じの、面白いお茶にしようと思ってるの。
そっちの方が喜びそうでしょう?」

【陽】
「ん、確かに」

橙歌は子供っぽいやつだからなあ。

美味しいお茶より面白いお茶の方が喜ばれそうだ。

【陽】
「なら、面白いのを選ぶとするか」

【赤明】
「ええ。どれがいいと思う?」

【陽】

「そうだな」

棚を眺めてみる。

【陽】

「ダーズリンとかセイロンってのは、確か産地だったか？」

【赤明】

「ええ、あってるわ。」

それで、こっちのアールグレイはフレーバーティー。

ベルガモットの香り付きね」

【陽】

「その辺りは割りと有名だよな。」

面白いってのとはちょっとな」

【赤明】

「そうね。」

橙歌が喜びそうなのは、こっちの方かしら？」

赤明が示した棚には、ティーバッグではなくて、粉にお湯を注ぐタイプのお茶が並んでいる。

【陽】

「アップルティーとか、レモンティーか。確かに」

【赤明】

「粉末のタイプは、ほとんどジュース感覚なのよね」

【陽】

「そうだな。」

「お、キャラメルとかもある」

【赤明】

「このイチゴミルクティーって、どんな味なのかしら？」

「探してみると、案外色々商品がある。」

【陽】

「うーん。悩むなあ……」

【赤明】

「城崎君、これなんかどうかしら？」

【陽】

「ミックスパック？」

【赤明】

「色んな種類が入ってるみたい」

【陽】

「ああ、いい感じだな。」

「それにするか？」

【赤明】

「そうしましょうか」

【陽】

「でも、1つってのも寂しいし、もう1個くらい買わないか？」

【赤明】

「別に構わないけど。
どれにするの?」

【陽】

「ん……じゃあ、そのイチゴミルクティーで」

【赤明】

「あら、これ?」

【陽】

「どうせなら、1つ目とは毛色が違う方がいいだろ?」

【赤明】

「そうね。」

「それじゃあ、買ってくるわね」

【陽】

「ああ」

レジに行って、会計を済ませる。

【赤明】

「お待たせ」

【陽】

「それ、持つよ」

赤明が手に提げているビニール袋を指差す。

【赤明】

「え、別にいいわよ」

そう言われても、女の子にだけ荷物を持たせて自分は手ぶらなんて、俺が酷い人間みたいな気がするんだよ。

【陽】

「手伝いでついてきたんだ。」

荷物持ちくらいはさせてくれよ」

【赤明】

「大丈夫よ。そんなに重くないし」

【陽】

「それはラッキーだな」

赤明の手から袋を取る。

ほんとに軽いな。

【赤明】

「もう、強引ね」

【赤明】

「でも、ありがとう」

【陽】

「どういたしまして。」

じゃ、帰るか」

【赤明】
「ええ」

俺達は、商店街を歩き始めた。

夕方だけに、寄り道している学生や、買い物をしている人でかなり混んでいる。

客を呼ぶ威勢のいい声と、お惣菜の匂いがない交ぜになって漂っていた。

【陽】
「んー、いい匂いがするなあ」

【赤明】
「そうね」

そんな話をしながら歩いていると、

くー、と可愛い音が聞こえた。

隣を見ると、赤明が頬を染めてお腹を押さえていた。

【陽】
「もしかして、腹減ってる？」

【赤明】
「……お昼ご飯を食べる余裕が無かったのよ」

そっぽを向きながら呟く。

着替えとかに手一杯で、昼休みに食べれなかったのか。

【陽】

「よし、何か食べよう」

【赤明】

「え？」

【陽】

「俺も何か食べたかったしさ、いいだろ？」

【赤明】

「……仕方ないわね。」

晩御飯が食べられるくらいにしなさいよ」

【陽】

「わかってるって。橙歌じゃないんだから」

【赤明】

「あら、失礼な事言うのね」

【陽】

「事実だろ。多分だけど」

【赤明】

「……過去にそういう事はあったわ」

やっぱりな。

【陽】

「んじゃ、そうならないように買っとするか」

【赤明】

「そうでしょうか」

.....

俺と赤明は、それぞれの買ってきた物を持って、ベンチに座った。

俺が選んだのは、たこ焼き。

赤明は、コロッケを買ってきていた。

【陽】

「いただきます」

1つ摘んで、口に放り込む。

【陽】

「あつつ！ あふい、はふはふ……」

【赤明】

「そんなに急いで食べるからよ」

【陽】

「あつつ……。美味そうな匂いにやられた……」

【赤明】

「大丈夫？」

【陽】

「ん、大丈夫だ。
やっぱり熱いと美味しいな」

続けてもう一つ食べる。

【陽】

「あむ、熱っ！」

【赤明】

「もう……」

赤明は呆れた顔で、自分のコロッケを齧り始めた。

空腹の赤明の為に提案した間食だったが、赤明が買ったのはコロッケ一つだけだった。

【陽】

「それだけで足りるのか？」

【赤明】

「寮に戻ったら夕食だもの。
間食はこれ位でいいのよ」

【赤明】

「城崎君こそ、よくそんなに食べるわね」

【陽】

「まあ、これくらいならな」

別に大食漢ではないけど、夕食前にたこ焼きを食べるくらいなら大して問題は無い。

【陽】

「ちょっと食べたい気分だったしな」

【赤明】

「たこ焼きを？」

「どうして？」

【陽】

「この前、たこ焼きを唯鈴ちゃんに奢ってあげたんだ」

【赤明】

「唯鈴ちゃんと……。」

「それで？」

【陽】

「その時ちょっと分けてくれたんだけど、どうせならしっかり食べたかったなーと」

【赤明】

「……そう、分けてもらったの。どんな風に？」

【陽】

「どづって、『あーん』って……」

【赤明】

「……ふーん」

【陽】
「あ、赤明？」

何か、らしくない返事なんだけど……

【陽】
「どうかしたのか？」

【赤明】
「どうもしないわよ。
とっっても仲が良いのね」

【陽】
「まあ、兄妹みたいなものだし。
それはお前だって知ってるだろ」

【赤明】
「それ、本気で言ってるの？」

【陽】
「そうだけど？」

赤明は俺の考えを読もうとするかのようにしばらく俺をじっと見ていたが、

やがて、溜息を1つ吐いた。

【赤明】

「……鈍いのね、あなた」

【陽】

「何がだよ？」

赤明の奴、何が言いたいんだ？

【赤明】

「唯鈴ちゃんはあなたの事が好きなのよ。」

『あーん』なんて、気軽にやるものじゃないわ」

【陽】

「ん、そうだな。」

好かれてるのはわかってるよ」

あれだけ行動で示してくれてるのに、気づかないなんて、鈍感ってレベルじゃないぞ。

【赤明】

「え？」

【陽】

「でも、ちょっと年上の人に憧れたりするのってありがちな話だろ？」

『お兄さん』なんて『いいお友達』みたいな物だよ」

【陽】

「それを勘違いするほどおめでたい頭はしてないぞ、俺は」

【赤明】

「……鈍いんじゃないくて、変な持論のせいだったのね」

【陽】

「ん？」

【赤明】

「何でもないわ。」

ほら、早く食べてしまいなさいよ」

【陽】

「あ、そうだな」

いつの間にか赤明はコロッケを食べ終わっていた。

慌てて、残りのたこ焼きに取りかかる。

【陽】

「むぐむぐ……ん？」

視線を感じて顔を上げると、赤明がじっと俺の手元を見ていた。

【陽】

「えーと、欲しいのか？」

【赤明】

「違うわよ」

【赤明】

「でも、そうね……ちょっと貸してくねる？」

【陽】

「は？」

食べたいのならまだわかるけど、借りるって何だよ。

【赤明】

「いいから、ほら、そっちも」

【陽】

「あ、ああ」

何だかよくわからないうちに、たこ焼きのパックと割り箸を取られてしまった。

赤明は、割り箸でたこ焼きを摘み、

【赤明】

「あ、あーん」

そんな言葉と一緒に、それを差し出してきた。

前にもあった状況だけど、唯鈴ちゃんと違うのは、赤明も真っ赤になってるって所だ。

【陽】

「あ、赤明？」

おま、何やってるんだよ」

【赤明】

「こ、これはほら、あれよ。

昼休みのお礼！

城崎君にも助けてもらったのに、買い物にも付き合ってもらったでしょ！」

【陽】

「そ、そうか、お礼か」

うん、お礼なら、仕方ないよな？

【赤明】

「わ、私も恥ずかしいから、早く、して」

消え入りそうな声で赤明が呟く。

ここで固まっても、お互いに恥ずかしいだけだ。

お礼なんだし、受け取らないのも失礼だしな！

【陽】

「じゃ、じゃあ、あー」

【??】

「ああああああっ!!」

突然、悲鳴とも叫び声ともつかない声が響き渡った。

赤明と2人、その声の方向に目を向ける。

【唯鈴】

「お、お兄さん……」

そこには、制服姿の唯鈴ちゃんが目をまん丸にして立っていた。

【陽】

「あ、唯鈴ちゃん……」

別に何も悪い事なんて無いはずなのに、何だろっ、この気まずさは……

【唯鈴】

「……そっか。そうだったんだね。
でも、教えて欲しかったよ」

【陽】

「な、何を……？」

この状況で何を理解したんだ？

【唯鈴】

「とぼけなくてもいいよ。
お兄さんと赤明お姉さん、付き合ってたんだね」

【陽・赤明】

「「ええ!?!」」

ちょっと待て、それはとんでもない勘違いだぞ。

【陽】

「唯鈴ちゃん、俺達はそんな関係じゃ無いよ」

【赤明】

「そ、そうよ」

【唯鈴】

「いいの、気を使わないで。」

お幸せにっ」

【陽】

「だから誤解だっ……っ……って聞けよ!」

唯鈴ちゃんは、勘違いをしたまま走り去ってしまった。

【陽】

「……どうしよう」

【赤明】

「困ったわね……」

赤明と困惑した顔を見合わせていると、

【唯鈴】

「うわぁーん。」

赤明お姉さんにお兄さんを取られちゃったよー!」

【陽】

「ぶっ」

商店街の向こうの方から、唯鈴ちゃんの大声が聞こえた。

そんなとんでもない事を、無差別に吹聴しないでくれ!

【赤明】

「ちょっと説得してくるわ」

赤明がベンチから立ち上がる。

【陽】

「あ、じゃあ俺も」

【赤明】

「いいから、城崎君はここで待ってて」

【陽】

「でも……」

【赤明】

「城崎君の顔を見たら話してる余裕なんて無いかもしれないですよ。私1人の方が良いわよ」

それもそうか。

また変な誤解をされると困るし、ここは赤明に任せた方が良さそうだな。

【陽】

「わかった、頼む」

【赤明】

「ええ。行ってくるわね」

【陽】

「ああ」

赤明が駆け出す。

唯鈴ちゃんの姿は見えないが、幸か不幸か声は聞こえて来るから、多分見つけられるはずだ。

【陽】

「はぁ……」

残っていたたこ焼きを口に運ぶ。

一人で食べたそれは、予想していたほど美味しくなかった。

< ANOTHER VIEW >

唯鈴ちゃんを追いかけて走っていると、前の方に唯鈴ちゃんを見つけた。

がつくりと肩を落として、とぼとぼ歩いている。

感情表現の素直な子なのよね……

城崎君に対する態度も、本当にわかりやすくて。

唯鈴ちゃんが私たちと同じくらいの年、せめて中学生じゃなかったら、きっと陽も意識しないわけにはいかなかったでしょうに。

不憫な話だわ……って、今はそんな事を考えている場合じゃないわね。

【赤明】

「唯鈴ちゃん！ 待って！」

呼びかけると、立ち止まってくるりと振り返る。

【唯鈴】

「あ、赤明お姉さん……」

【赤明】

「唯鈴ちゃん、私の話を聞いて」

私がそう言うと、唯鈴ちゃんは1度大きく深呼吸をした。

【唯鈴】

「……うん。覚悟できたよ」

【赤明】

「せっかく覚悟を決めて貰ったのに悪いんだけど、私と城崎君は別に付き合ってたなんていないのよ」

【唯鈴】

「え？ そうなのっ？」

唯鈴ちゃんの表情がぱつと明るくなる。

けれど、次の瞬間にはまた顔を曇らせてしまった。

【唯鈴】

「でも、デートしてたし……」

デート!??

買出しに付き合っただけのつもりだったのに、他の人が
らはそんな風に見えるの？

【赤明】

「で、デートなんかじゃないわ。ただの買出しよ。

城崎君は、手伝ってくれただけなのよ」

【唯鈴】

「ほんとうに?」

ほんとうに付き合っていないの?」

【赤明】

「本当よ」

良かった、わかってくれそうね。

【唯鈴】

「でも、赤明お姉さんはどうなの?」

【赤明】

「どっつて?」

【唯鈴】

「その、お兄さんの事、好きなの?」

【赤明】

「わ、私!？」

それは、本当に予想外の質問だった。

私が城崎君を好き……？

【赤明】

「どうして、そんな風に思うの?」

【唯鈴】

「だって、赤明お姉さんがお兄さんに食べさせてあげてたから」

そう、唯鈴ちゃんはそこから見てたのね。

【赤明】

「あ、あれは」

単なるお礼……本当にそうなの？

あーん、なんて気軽にやるものじゃないって、自分が言ったばかりだったのに。

普段の私なら、そんな事やらないはずなのに……でも、あの時の私は、それをした。

城崎君にそういう行動ができるのは、親しい友人ゆえの気安さだ
と書いていたけど……

あの時、私は唯鈴ちゃんに嫉妬してたの？

それで、対抗するみたいに、あんな事をしたの？

私と城崎君は付き合っていない。

でも、私の心は、

【赤明】

「私は
」

【??】

「朝緋あさひ様
」

火照ったみたいに熱くなっていた心が、一瞬で冷めた。

いつの間にか、そこにいた。

1人じゃなく、沢山の人が。

商店街を歩き来る人たちは、まるでその人たちがいないように歩いていくけれど、

そこにはその人たちが見えていた。

【唯鈴】

「赤明お姉さん？」

【赤明】

「……私、用事を思い出したわ」

【唯鈴】
「え？」

【赤明】
「さっきのベンチで、城崎君を待たせてるから、先に帰ったって伝えてくれる？」

【唯鈴】
「あ、はい」

【赤明】
「ごめんなさい。またね」

私は、唯鈴ちゃんの返事を聞くなり、その場を逃げ出した。

< ANOTHER VIEW END >

< 商店街 >

【唯鈴】
「お兄さん」

【陽】
「あれ、唯鈴ちゃん？」

ベンチで待っていた俺の所に戻ってきたのは、赤明じゃなくて唯鈴ちゃん1人だった。

【陽】

「赤明は？」

【唯鈴】

「用事を思い出したから、先に帰るって。私、赤明お姉さんを怒らせたのかなあ」

唯鈴ちゃんがしゅんとなる。

【陽】

「喧嘩でもしたのか？」

【唯鈴】

「ううん。」

でも、変な質問したのかも」

【陽】

「何を聞いたんだ？」

【唯鈴】

「それは内緒だよ。」

特にお兄さんには」

【陽】

「ん、そうか」

女の子同士の話ってやつか。

【陽】

「それじゃ、俺も帰るよ」

【唯鈴】

「あ、うん」

唯鈴ちゃんが残念そうに頷く。

【陽】

「またな」

【唯鈴】

「うん。またね、お兄さん」

手を振る唯鈴ちゃんと別れて、俺は寮へと向かった。

< 学生寮 213号室 >

【陽】

「あ、しまった」

床の上に放り出されているビニール袋から、ティーバッグの箱が見えているのに気が付いた。

赤明に渡しに行こうと思ったのに、すっかり忘れてたな……

時計を見ると、午後の11時を回っていた。

女子階に持って行くには遅すぎるな。

取り合えずメールで預かってるって言っとっつ。

.....

お、返事が来た。

From: 新嶋 赤明

Subject: Re: 無題

荷物は明日取りに行くわ。

それと、今日は、先に帰ってしまった、ごめんなさい。

ま、そうだろうな。

明日まで預かっておくとするか。

それにしても、用事は終わってたんだし、そんなに気にしなくてもいいのに。

まあ、ちよっとは残念だったけど……

返信するか。

『別に俺は気にしてないよ』と。

.....

返事が来たか。

From: 新嶋 赤明

Subject: Re: Re: Re: Re: 無題

ありがとう。

それじゃ、お休みなさい。

そうだな。俺もそろそろ寝るか。

『おやすみ』と。

六月十八日

< 6月18日(木) >
< 学園 2年教室 >

【教師】

「新嶋さん、聞いてますか？」

【赤明】

「は、はいっ」

【教師】

「余所見をしないで、ちゃんと聞いていて下さいね」

【赤明】

「はい……すみません」

赤明の奴、また注意されてるのか。

前も他所見してたけど、最近結構注意されてるんだよな。

どうしたんだろ？

……

授業が終わると、赤明が俺の席にやって来た。

【赤明】

「城崎君。お願いがあるんだけど」

【陽】

「ノートか？」

【赤明】

「……わかる？」

【陽】

「まあ、注意されてたからな」

【陽】

「ほら、ノート」

赤明にノートを渡す。

【赤明】

「ありがとう」

【陽】

「それにしても、最近妙に余所見してるみたいだけど、どうかしたのか？」

【赤明】

「……どうって事はないのよ」

【陽】

「そっかぁ？」

【赤明】
「ええ」

【陽】
「ならいいけどな……」

実際何かあるような気がするんだけどなあ。

ま、余所見してるくらいなら、そんなに気にしなくてもいいか。

【陽】
「困ってるなら、話してくれよ。
力になるから」

【赤明】
「大丈夫よ」

【赤明】
「あ、次の授業の準備をしないと。
それじゃあ」

【陽】
「ん、ああ」

<学園 廊下>

放課後になり、俺は黄牙と一緒に帰っていた。

【黄牙】

「あー、今日も疲れたなあ」

【陽】

「お前、疲れるほど真面目に授業受けてないだろ」

【黄牙】

「学校で1日過ごしたら、それだけで疲れんだよ」

【陽】

「気持ちはわかるけどな」

そんな話をしながら靴箱に向かっていくと、

【緑璃】

「あ、陽君と黄牙君！ おーい」

先輩が手を振りながら駆け寄ってきた。

【陽】

「先輩。今帰りですか？」

【緑璃】

「うん、そうだよ。」

陽君達も？」

【陽】

「はい、そうですねです」

【緑璃】

「それじゃあ、私も一緒しちゃっていい？」

【陽】

「いいですよ。」

「いいよな？」

【黄牙】

「おう。構わねえぜ」

【緑璃】

「じゃあ、靴を替えてくるね」

【陽】

「はい」

<通学路>

緑璃先輩を加えた3人で、寮への道を辿る。

【緑璃】

「あ、そう言えば」

他愛の無い話をしていた先輩が、ふと何かを思い出したように咳いた。

【緑璃】

「赤明ちゃんって、今日具合悪いの？」

【陽】

「え？ 赤明が？」

黄牙と顔を見合わせる。

【黄牙】

「元気そうだった、よなあ？」

【陽】

「ああ」

同じクラスの俺らが気づかなかつたのに、先輩がそんな風に思うなんて、

【陽】

「何かあったんですか？」

【緑璃】

「えっとね、お昼休みに3階で赤明ちゃんを見かけたの」

3階。先輩のクラスのある階だ。

何でそんな所に赤明がいたんだろ。

【緑璃】

「その時にね、何だか様子が変わったから」

【陽】

「変って、どんな風だったんですか？」

【緑璃】

「うーん、あれはふらふらしてた、でいいのかなあ？」

【黄牙】

「どうだったんだよ？」

【緑璃】

「きよろきよろもしてたし……。
誰かを探してたのかなあ？」

【緑璃】

「あ、もしかしたら、逃げてたのかも」

【黄牙】

「逃げるって、何からだよ？」

【緑璃】

「それは、わからないけど。
それに、逃げてたって決まってもないよ？」

【陽】

「んー、はっきりしないなあ」

探してたとか逃げてたとか、具合が悪いと繋がって無いし。

どうも、行動が良くわからなかったから、先輩の中では具合が悪い事にされてたっぴいな。

【緑璃】

「ごめんね、よく分からない事言って」

【陽】

「いえ、貴重な情報ですよ」

【緑璃】

「え、そうなの？」

【陽】

「実は、俺も最近赤明がちょっと変だとは思ってたんで」

授業中だけじゃなくて、他の所でもか。

やっぱり、何かあるのは間違いないと思っていいのか。

【黄牙】

「そうなのか？」

【陽】

「ほら、最近よく注意されてるだろ」

【黄牙】

「そう言や、そんな気もするな」

【陽】

「お前、授業中寝てて気づいてなかったんだろ」

【黄牙】

「ははっ、まあな」

【緑璃】

「こーら。」

授業はちゃんと聞かないと、ダメ、だよ」

【黄牙】

「わ、わかったよ」

【陽】

「ま、黄牙の授業態度はさておき」

【陽】

「これからも、赤明の事で何か気づいたら教えて下さい」

【緑璃】

「うん、わかったよ」

【陽】

「はい。よろしく願います」

【緑璃】

「お姉さんにお任せ、だよ」

先輩は力強く頷いてくれた。

でも、人任せになんてしておけない。俺も調べてみるか。

先輩みたいに赤明の姿を見た人がいるかもしれないし、聞き込み
だな。

赤明と仲が良いって言えば、やっぱり橙歌だよな。

よし、早速橙歌に話を聞きに行くか。

<学生寮 廊下>

早速なんて勢い込んだのに、橙歌を捕まえられたのは、夕食の後
やっとだった。

橙歌と話すだけなら簡単だったけど、赤明と一緒に話が聞けな
ったからだ。

【陽】

「橙歌、来たぞ」

303号室。

橙歌の部屋の扉を叩く。

【橙歌】

「今行くー」

部屋の中から足音が近づいて、扉が開いた。

【橙歌】

「やっほー。いらっしやい」

橙歌に導かれて部屋に入る。

【橙歌】

「適当に座ってね」

橙歌がベッドの上に飛び乗りながら言う。

【陽】

「ん、わかった」

橙歌の勉強机から椅子を引っ張り出して、そこに座った。

【橙歌】

「で、どうしたのさ？」

僕と2人で話したいなんて」

【陽】

「ああ。」

赤明の話なんだけど」

【橙歌】

「赤明の？」

赤明がどうかしたの？」

【陽】

「どうかしたと言うか、どうかしてないかと思って」

【橙歌】

「は、何それ？」

【陽】

「ん、だからさ、橙歌は最近の赤明が変だと思わないかって事だ」

【橙歌】

「うーん、そう言われると最近ちょっと変かも」

【陽】

「どんな所だ？」

【橙歌】

「授業中に怒られたりとか」

それは俺も知ってるんだよ。

【陽】

「他には？」

【橙歌】

「他にかあ……。」

あ、あんまり僕が怒られない」

【陽】

「何だ、授業態度を改めたのか？」

【橙歌】

「先生の話してどつするのさ。」

赤明に怒られないんだよ」

【陽】

「ああ、そっち」

【橙歌】

「僕がそんな真面目になるわけないじゃん」

【陽】

「それはそれでどうかと思うけどな」

まあ、この際橙歌の事は置いておくとして、これは割りと重要な情報かもしれない。

赤明が橙歌にする注意は、生活態度を指摘するような物が多い。

それが減ったって事は、赤明が別の事に気を取られてるって可能性が考えられる。

それだけで判断するのは早計だけど、先輩のきよろきよろしてたって証言もあるしな。

【陽】

「でだ、その原因に何か心当たりはあるか？」

【橙歌】

「そんなの僕が知るわけ無いじゃん」

【陽】

「あっさり言うなあ。

心配じゃないのか？」

【橙歌】

「僕としては怒られなくてラッキーって感じだけど」

【橙歌】

「大体、これってそんな心配しなきゃいけない事？」

【陽】

「ん……どうだろうなあ」

確かにちよっと変だとは思っけど、とりあえずは普通に過ごして
るし……

本人も何でもなさそうに言ってるんだよな。

【陽】

「それでもないかもしれないけど、何か気になるんだよ」

【橙歌】

「ふーん、そなんだ」

【陽】

「そういう訳だからさ、橙歌もちよっと気にしといてくれよ」

【橙歌】

「りょーかい。」

赤明が変だと、僕も調子狂うもんね」

【陽】

「お前の調子が狂う前に解決したいもんだな」

【橙歌】

「頑張ろうね」

【陽】

「ああ。」

「じゃ、俺は帰るよ」

【橙歌】

「うん。ばいばい」

【陽】

「じゃあな」

<学生寮 廊下>

部屋に帰っていると、部屋の前に赤明が立っていた。

【陽】

「あれ、赤明？」

【赤明】

「あ、お帰りなさい。」

「どこに行ったの？」

【陽】

「ん、ちょっとな……」

【陽】

「それより、どうしたんだ？」

【赤明】

「忘れたの？」

【陽】

「え、何かあったか？」

【赤明】

「お茶を取りに行くって言ったでしょ」

【陽】

「ああ、そう言えば」

【赤明】

「それと、これ。昼間のノート」

そっちは学校で良かったんだけど、持って来てくれたのか。

【陽】

「ん」

赤明からノートを受け取る。

【陽】

「ちょっと待っていてくれ。」

お茶を取ってくる」

【赤明】

「ええ」

赤明を置いて部屋に戻り、お茶の入った袋を持ち出す。

【陽】

「ほら」

【赤明】

「ありがとう」

【陽】

「今思ったんだけど、どうせお茶会で使うなら、
それまで置いておいて良かったんじゃないか？」

【赤明】

「お茶会で使うならそうだけど、
先に橙歌と2人で飲もうと思って」

【陽】

「2人でお茶会か？」

【赤明】

「あら、意外とやってるのよ。
最近では、アルカンシエルの女の子達とかでも」

【陽】

「そうだったのか」

全然知らなかった。

【赤明】

「これから橙歌とお茶会なの。」

もっ行くわね」

【陽】

「ああ……、赤明」

【赤明】

「何？」

【陽】

「ん、いや、何でもない」

最近の事について聞こうと思ったけれど、止めた。

多分話してもらえないだろうし、もっと情報が集まっただけからにしよう。

【赤明】

「そう？」

【陽】

「ああ。」

ほら、橙歌の所に行くんだろ？」

【赤明】

「ええ。それじゃあ」

【陽】

「また明日」

赤明が階段に消えるのを見送って、俺は部屋に戻った。

< ANOTHER VIEW >
< 学生寮 303号室 >

城崎君から荷物を受け取った後、私はお茶の用意をして、橙歌の部屋を訪れた。

ポットやカップの準備をして、新しいお茶を取り出す。

【橙歌】

「ね、赤明。それって、もしかして新しいやつ？」

机の上に置くと、目ざとく見つけて橙歌が飛びついた。

【赤明】

「そうよ」

【橙歌】

「どうしたの？」

いつもは今あるのが無くならないと新しいのは買わないのに」

【赤明】

「あら、そうだったかしら？」

【橙歌】

「そうじゃなか。」

僕が美味しそうなの見つけても、いっつも買ってもらえないんだもん」

橙歌が不満顔で頬を膨らませる。

そんな、母親にねだる子供みたいな事を言われても困るのだけ
れど……

【赤明】

「そうだったかもしれないわね。

でも、今日のは特別よ。

橙歌のために買ってきたんだから」

【橙歌】

「だから、どうしてさ？」

【赤明】

「昨日のお昼休みに約束したでしょ。お礼をするって」

【橙歌】

「あ！

そっか。それで買ってきてくれたんだ」

【赤明】

「そつよ。忘れてたのね」

【橙歌】

「まあねー」

もう、それならわざわざ買いに行かなくてもよかったわね。

【赤明】

「それで、どれが飲みたい？」

【橙歌】

「うーん、どちらにしようかなあ」

橙歌が、2つのパッケージを見比べる。

【橙歌】

「うわ、こっちのやつ、4種類も入ってるじゃん！」

【赤明】

「得した気分でしょ？」

【橙歌】

「余計悩むじゃんかあ。うー」

【赤明】

「1杯しか飲んだらいけないのでもないのだし、適当に選べばいいじゃない」

【橙歌】

「なら、こっちのにする」

橙歌はフルーツティーのミックスパックを選んで、封を開けた。

【橙歌】

「アップル、レモン、ピーチ、ローズヒップかあ」

【橙歌】

「赤明赤明、ローズヒップって何？」

【赤明】

「えっと、薔薇の実の事じゃなかったかしら？」

【橙歌】

「え、薔薇って実ができるの!？」

【赤明】

「できるわよ。」

まさか、薔薇は花だけだと思ってたの？」

【橙歌】

「え、そんなことないよ。あはは……」

この反応は、思ってたわね。

見栄張らなくてもいいのに。

変な所で意地っ張りなんだから。

【赤明】

「ちなみに、さくらんぼは桜の実よ」

【橙歌】

「ええっ!」

【橙歌】

「も、もちろん知ってるけどさ」

【赤明】

「そつ？ ならいいのよ。」

お茶を淹れるわね。ローズヒップでいいの？」

【橙歌】

「う、うん」

【赤明】

「わかったわ」

お茶を淹れ、と言っても、粉末にお湯を注ぐだけだけど、それを橙歌に差し出す。

橙歌はカップを受け取ると、彼女の定位置に腰を下ろした。

【赤明】

「橙歌。」

いつも言ってるけど、ベッドの上でお茶を飲むのは止めなさい。

お茶の染みは取りにくいのよ」

【橙歌】

「大丈夫だって。こぼさなきゃいいんでしょ」

【赤明】

「もう……」

橙歌に言う事を聞かせるのは諦めて、私も自分のお茶を淹れましようか。

私は、レモンティーにしようかしら。

【橙歌】

「いただきまーす」

【赤明】

「どうぞ」

カップに口をつけて、1啜り。

【橙歌】

「うーん。薔薇っぽい、味がする？」

【赤明】

「無理しないの。」

薔薇の味なんて、知らないでしょう」

【橙歌】

「うん、確かに。」

でも、いい匂いがするよ」

【橙歌】

「これが薔薇の匂いなのかな？」

【赤明】

「多分そうでしょうね」

【橙歌】

「じゃあ、この味が薔薇って事？」

【赤明】

「それはどうかしらね。」

人間は、匂いを感じると、それっぽい味を感じてしまうから」

【橙歌】

「え、何それ？」

【赤明】

「そうね……無果汁なのに、果物の味ってジュースとかがそうね。香料が入ってるだけなのに、ちゃんと味がするよ。うな気がするでしょ？」

【橙歌】

「えー、そうだったんだ。

ほとんど詐欺じゃん」

【赤明】

「全部が全部ってわけじゃないと思うけれど」

【橙歌】

「何かズルされてる感じだあ。

やだなー」

【赤明】

「いいじゃない。

そんな事を気にしなくたって、美味しければ美味しいで」

【橙歌】

「そうなんだけどさあ」

不貞腐れたまま、またお茶を飲む。

ちょっとした雑学のもりだったのに、意外と気にするわね。

って、あら、例え話だったのに、どうしてこのお茶の事みたいになってるのかしら？

パッケージの裏側の原材料を確認してみる。

【赤明】

「橙歌、それにはちゃんとローズヒップが入ってるわよ」

【橙歌】

「え、ホント？」

【赤明】

「本当よ。」

「見てみる？」

【橙歌】

「うん。見る見る」

【赤明】

「はい、どうぞ」

パッケージを渡してあげる。

【橙歌】

「えーと、あ、ホントだ！」

【赤明】

「ね？」

【橙歌】

「入ってたんだ。
んー、美味し」

【赤明】

「くすっ」

入ってるって教えてあげただけで、この変わり様。

本当に、単純と言っか、素直と言っか……

【橙歌】

「何で笑うのさ」

【赤明】

「何でもないわ」

【赤明】

「それより、今度はこっちのイチゴミルクティーを飲んでみる？
ちゃんとイチゴも入ってるわよ」

【橙歌】

「うんっ」

……

【橙歌】

「あ、そういえばさ」

何杯目かのお茶を淹れた時、橙歌がふと思い出したみたいに呟いた。

【赤明】

「何？」

【橙歌】

「さっき、陽が来てたんだけど」

【赤明】

「城崎君が？」

その名前を聞いた時、心の中に小さな波が立つのがわかった。

さっき部屋に居なかったのは、橙歌の所に行ってたからなのね。

それだったら、誤魔化さないで教えてくれたらよかったのに。

橙歌と2人で内緒の話をするなんて……

って、もう。これじゃ、何だか私が嫉妬してるみたいじゃない。

【橙歌】

「それでね、陽が言ってたんだけど」

【赤明】

「ちよっと、橙歌。

私に話していいの？」

【橙歌】

「いいんじゃない？
秘密って言われなかったし」

【赤明】
「そうなの」

2人だけの話じゃなかったのかしら……良かった。

【橙歌】

「ね、赤明さ、最近何か悩み事とかあるの？」

【赤明】

「え……」

どうして？

一緒にいる時間が多い分、橙歌には気づかれないように気をつけてたのに……

【赤明】

「どうして、そう思うの？」

【橙歌】

「だから、陽が言ってたんだってば。
何か、妙に心配してたよ」

【赤明】

「城崎君が……」

確かに、最近城崎君には迷惑をかけてるって思っていたけれど、

まさか、それで私の事を心配してくれてたなんて。

……どうしたのかしら、私、すごく嬉しい。

私、もしかしたら、

【橙歌】

「赤明？

聞いている？」

【赤明】

「あ、ええ。

どうかしたの？」

【橙歌】

「どうって、だから、何かあるのって聞いているんじゃない」

【赤明】

「あ、そうだったわね」

橙歌も、私が何かを隠している事に気づいたのかしら。

真剣な瞳。

私を心配してくれているのが、伝わってくる。

でも

【赤明】

「何でもないのよ。
城崎君って割と心配性なのね」

【橙歌】

「なーんだ。そうなんだ」

【赤明】

「ええ」

これは、話せない。

だって、これは異質な事だってわかっているから。

話したいって思う。

わかって欲しいの。

でも、もし話しても、理解されなかったら？

あの時みたいに、共有できると期待した想いを、裏切られるくらいなら。

【陽】

『困ってるなら、話してくれよ。
力になるから』

諦めたはずなのに、1人で抱えるしかないと、学んだのに。

それなのに、私の弱い部分が、求めてしまう。期待する。

城崎君……。

私は、あなたに頼っていいの？

< ANOTHER VIEW END >

六月十九日

< 6月19日(金) >

< 学園 廊下 >

【教師】

「それじゃ、気をつけて帰るんだぞ」

はあ、やっと1日終わったか。

今日は何をしようかなあ。

【教師】

「ああ、そつだ」

って、まだ何かあるのかよ。

顔を向けると、教師とばっちり視線が合った。

あ、嫌な予感が……

【教師】

「城崎。悪いが、この後ちょっと手伝ってくれ」

【陽】

「はあ」

……やっぱり。

.....

.....

.....

【陽】

「よっと」

抱えていた段ボール箱を職員室の前の廊下に下ろす。

「まったく、帰ろうとした所で捕まるなんて、ついてない。」

【陽】

「これで全部ですか？」

【教師】

「おお、助かったぞ。ありがとうな」

【陽】

「いえ、それじゃあ、俺はこれで」

【教師】

「ご苦労様」

【陽】

「おめでとう」

「すっかり遅くなったな.....」

鞆を取って、さっさと帰ろう。

<学園 2年教室>

教室に入る。

【陽】

「ん？」

もう無人だと思っていた教室に、まだ、1人の姿があった。

【陽】

「赤明？」

赤明は、俺が教室に入ってきた事にも気がついていない様子で、窓の外を眺めている。

【陽】

「赤明。赤明！」

【赤明】

「え？」

近づいて呼びかけると、ようやく気がついて振り向いてくれた。

【赤明】

「城崎君？ どうしたの、こんな時間に」

【陽】
「ん、先生に捕まって教材運ばされてたんだ。赤明こそ、何してたんだ？」

一瞬俺を待っていてくれたのかとも思ったが、今までの話からすると、それは無いみたいだ。

【赤明】
「少し見ていただけのつもりだったんだけど、ね」

【陽】
「へえ」

俺も、窓に近づいて外を見る。

グラウンドでは、運動部の部員達が走り回っていたが、特に物珍しいものは無い。

【陽】
「赤明って、スポーツ観戦とか好きなのか？」

【赤明】
「そついう訳じゃないけれど……」

そこで言葉を切って、再び窓の外に視線を戻す。

【赤明】
「城崎君は、あそこに何が見える？」

【陽】

「何って……」

グラウンドをじっくりと見てみる。

だが、そこにあるのはいつも通りの風景だった。

【陽】

「ただ、部活してるのが見えるだけだけど」

【赤明】

「そう……」

静かな声で、赤明が呟いた。

俺がそう答えるのは予想通りで、でもそれが残念だ。

そんな風に諦観と悲しみが混じりあった声だった。

【陽】

「赤明……」

赤明には、あそこに何が見えていて、

【陽】

「あそこには、何があるんだ？」

俺に、一体何を見て欲しかったんだろう？

【赤明】

「……ただ、部活をしている人がいるだけよ」

赤明は、窓の外に目を向けたまま、そう答えた。

【陽】

「それは……」

多分、それは嘘だ。

でも、俺はそう言う事が出来なかった。

俺の目には、そこで部活をしている生徒しか見えない。

だから、赤明の言葉は正しいはずなんだ。

俺がいくら、赤明には何かが見えているはずだと思っても、

赤明が、俺と同じモノが見えていると言っている以上、俺には何も言えなかった。

【赤明】

「ごめんなさい」

【陽】

「何で、赤明が謝るんだよ」

赤明に、そんな悲しそうな顔をさせている俺が謝らなくちゃいけないはずなのに。

【赤明】

「城崎君がすごく困った顔をしてるからよ」

【陽】

「……それは」

【赤明】

「さ、帰りましょ。もう、部活も終わりそつよ」

いつの間にかグラウンドの人影は少なくなっていた。

【陽】

「ん、そうだな……」

このまま話していても、俺が赤明にかける事のできる言葉は無くて、

俺は、そう答えるしかなかった。

<学園 校門>

帰り支度はもうとっくに済んでいて、鞆を持つだけでよかった。

肩を並べて、無言のまま校門を抜ける。

【赤明】

「ねえ、城崎君」

通り過ぎたばかりのグラウンドを振り返りながら、赤明が言った。

【赤明】

「前世とか、生まれ変わりとか、そういう物ってあると思っ…」

【陽】

「え」

突然の言葉だったのと、

その内容が内容だったせいで、まともな反応を返す事が出来なかった。

でも、その一瞬の間が、俺がそんな物を信じていない事を十分に語ってしまった。

正確に言うなら、真面目に考えた事が無かったただけなのだが、完全に肯定できないという意味では同じだ。

【赤明】

「変な事聞いて、ごめんなさい」

また、諦めたような悲しそうな笑みで、赤明が笑う。

【赤明】

「それじゃあ、私、先に帰るわ。またね」

【陽】

「赤明！」

走り去っていく赤明の背中に、俺の言葉が虚しく響く。

赤明は、一度も足を止めないまま、寮に消えて行った。

【陽】

「くそっ！」

自分自身に、思わず悪態を吐く。

もっとまじな対応があったらだろうに、何をやってるんだ、俺は。

あの言葉は、赤明が俺に出してくれた小さな手がかりで、

そして、諦めたような顔をした赤明が、それでも求めてくれていた証だった。

でも、俺は、その手がかりを、

赤明が恐る恐る差し出してくれた手を、掴み損ねてしまった。

【陽】

「いや……まだまだ」

赤明は、『またね』って言ってくれた。

ただの挨拶だったかもしれないけど、それでも、まだ途切れちゃいない。

まだ、終わってないんだ。

でも、今のままじゃ、きっと俺は同じ事を繰り返してしまっ。

俺は、どうすればいいんだ……

<学生寮 食堂>

【陽】

「はぁ……」

寮に帰ってからも考え続けていたが、どうすればいいのか、いいアイデアは思いつかない。

そもそも、情報が少なすぎるんだよ。

わからない事が多すぎて、対策の方向性すら定まらない。

赤明に聞けたら早いんだけど……多分話してはくれないだろうな。

やっぱり、放課後のあの時がチャンスだったのに……

【黄牙】

「陽、食わねえのか？」

【陽】

「ん、ああ……」

ふと気がつくと、前に座っている黄牙が訝しげな視線を向けて来ていた。

晩飯の途中だったんだった。

【黄牙】

「食わねえなら、俺が食っちまっぞ」

【陽】

「いや、食べるって」

取り合えず、食事を再開する。

それにしても、赤明の事はどうすればいいんだろうなあ。

【陽】

「うーん」

【黄牙】

「何だよ、そんな難しい顔しやがって。

飯が不味くなるじゃねえか」

【陽】

「ああ、悪い。」

「ちよっと考え事してて」

【黄牙】

「何かあったのか？」

【陽】

「ん、まあな……」

一人で考えてても埒が明かないし、こいつに相談してみるか。

キーワードは、やっぱり前世、だよな。

それっぽい話を振るか。

【陽】

「なあ、黄牙」

【黄牙】

「んだよ？」

【陽】

「お前、お化けとか妖怪とか信じる方か？」

【黄牙】

「ああ？」

急に何だよ？」

【陽】

「いいから、答えろよ」

【黄牙】

「そうだな。」

俺は自分の目に見えねえ物は信じねえぞ」

へえ、そういう考え方なのか。

【陽】

「じゃあ、宇宙人はどうだ？」

【黄牙】

「見た事ねえって意味じゃ同じレベルだな」

確かに。

【陽】

「それじゃ……前世ってのはどうだ？」

【黄牙】

「前世ね……あるのかもしれないな」

【陽】

「え、何で？」

【黄牙】

「だってよ、TVの番組とか本とかあるだろ。」

無いってんなら、それが嘘ってことじゃねえか」

【陽】

「あー、なるほど……」

スピリチュアル系って言うんだっけな。

芸能人とかが大真面目に診断されてる番組とか確かにあるな。

ま、TVが嘘か本当かわからない事を言うのは良くある事なんだけど。

【黄牙】

「ま、俺は信じてねえけどよ。」

それがどうかしたのか？」

【陽】

「いや、上手く説明はできないんだけどな。

前世について真面目に悩むって、どんな状況だと思う？」

【黄牙】

「なんだそりゃ？」

あれか、ナントカ宗教？」

【陽】

「宗教ねえ……」

その発想は無かったな。

赤明が妙な宗教にはまってる可能性か……

でもなあ、どうも赤明と怪しげな宗教ってのが結びつかないし、

ああ言うのは、当の本人はそれを信じる事で幸せになるものだよな？

【陽】

「やっぱ、この線は無いか」

【黄牙】

「何1人で納得してんだよ」

【陽】

「何でもないよ。」

変な事言っただな。忘れてくれ」

【黄牙】

「まあ、いいけどよ」

役に立ちそうな話は無かったな。

だとすると、何なんだろう。

<学生寮 213号室>

部屋で悩んでいると、ノックの音が聞こえた。

誰かが来たのか？

【陽】

「はい？」

部屋の扉を開ける。

【緑璃】

「くんばんはー」

【橙歌】

「やっほー」

【紫苑】

「お邪魔します」

【藍叉】
『また来た』

【湖珠】
「来たんだよ」

緑璃先輩を筆頭に、アルカンシエルのメンバーが続いていた。

【陽】
「えっと、お茶会か？」

そんな話は聞いてないんだけど。

もしかして、悩んでる間に連絡が回ってたのか？

【緑璃】
「違うよお。」

ほら、赤明ちゃんがないでしょ」

言われてみると、確かに赤明がない。

【陽】
「じゃあ、一体どうしたんですか？」

【緑璃】
「今日は、相談に来たんだよ。
ほら、赤明ちゃんの」

【陽】

「ああ」

先輩に赤明の事を気にしておいて欲しいって言ったの、覚えててくれたのか。

それで、こんなに集めて相談に来てくれるなんて、いい人だなあ。

【陽】

「それじゃあ、取り合えず入って下さい」

【緑璃】

「うん」

.....

ぞろぞろと部屋の中に移動する。

いつものテーブルを囲んで、何となく決まってきた定位置にそれぞれが座った。

【陽】

「あれ、そう言えば、黄牙は？」

【藍叉】

『電話してた』

【陽】

「そうか」

また唯鈴ちゃんかな。

そうだろうな……

【紫苑】

「声はかけておきましたから、電話が終わったら来ると思いますよ」

【陽】

「ん、そうか。」

「じゃあ、本題に入るか」

【紫苑】

「その事なんですけど、私は詳しく知らないんですが」

【藍叉】

『私も 呼ばれたばかり』

【湖珠】

「私もだよ」

【陽】

「あれ、そうなのか？」

【橙歌】

「集めたのは先輩だけ」

【陽】

「先輩、説明はしなかったんですか？」

【緑璃】

「うん。集まってからでいいかなって思って」

【陽】

「それじゃ、説明からですね。
俺からしましょうか？」

【緑璃】

「うん、お願いしちゃうね」

【陽】

「わかりました」

先輩に頷いてから、みんなの方に向き直る。

【陽】

「えーと、赤明についてるのはわかってると思うけど」

【陽】

「最近、どうも赤明が変な感じがするんだ」

【紫苑】

「変って、どんな風にですか？」

【陽】

「授業中に余所見してて注意されまくったりとかだな」

【湖珠】

「あ、確かに最近良く怒られてるんだよ。ねー？」

【藍叉】

『ヤー』

湖珠と藍叉が頷く。この2人はクラスメイトだからな、気づいてたか。

【紫苑】

「それだけなんですか？」

【陽】

「いや、先輩が挙動不審な赤明を目撃してる」

【緑璃】

「3階をきよろきよろふらふらうって歩いてたんだよ」

【紫苑】

「そうですか……。」

それは、確かに妙ですね」

【陽】

「だろ？」

で、俺と橙歌、それに先輩でちょっと心配してたんだ」

【橙歌】

「1番心配してたのは陽だけだね」

【陽】

「混ぜっ返すなよ」

赤明の事を心配するのなんて当たり前だろ。

大事な仲間なんだから。

……仲間だから、でいいんだよね？

【橙歌】

「陽？

何ぼーっとしてるのさ」

【陽】

「あ、悪い」

【陽】

「えーとだ、まあ、それについて相談するのが今回の目的だ」

【藍叉】

『私にももっと早く相談して欲しかった』

【藍叉】

『水くさい』

【緑璃】

「ごめんね。」

でも、私達が話をしたのも昨日からだから」

【藍叉】

「……………」

【藍叉】

『ならいい』

【湖珠】

「よかったね。仲間外れじゃなかったんだよ」

藍叉がこくり、と頷いた。

【陽】

「そういう訳で、先輩以外にも赤明の奇行を目撃したって奴はいないか？」

【緑璃】

「き、奇行って……」

先輩が苦笑いを浮かべる。

もうちょっとましな言い方があったか。

【藍叉】

『私 見てない』

【湖珠】

「私も見てないんだよ」

【紫苑】

「私も先輩方と同じです」

【陽】

「ん、そうか」

3人とも見てないのか。

何か1つくらい出てくるかと期待してたんだけど、そう上手くは

いかないか。

【橙歌】

「やっぱり、考えすぎじゃない？」

授業中に余所見する事くらいよくあるって」

【緑璃】

「じゃあ、私が見たのは？」

【橙歌】

「偶々じゃないかな」

【陽】

「そつは思えないけどな」

特に、俺は何かを聞きかけたんだし。

【橙歌】

「だって、他に何も出てこないじゃん。

今日も見張ってたけど、普通だったし」

【陽】

「ん、でもなあ……」

どうする、今日の放課後の事を話すか？

でも、内容が内容だし、俺自身が意味をわかってない事を言うのもなあ。

【紫苑】

「あの」

【陽】

「何かあるのか？」

この際だ、どんな意見でも歓迎だぞ。

【紫苑】

「もしかして、新嶋先輩は、意図的に隠しているんじゃないでしょうか」

【緑璃】

「わざと私達には普通に振舞って見せてるってこと？」

【紫苑】

「はい。」

九走先輩が新嶋先輩を見かけたのは偶然ですよね？」

【緑璃】

「うん、そうだよ」

【緑璃】

「あつ、あの時、赤明ちゃんは私がいるのに気づいてなかったよ！」

【藍叉】

『授業中は？』

【橙歌】

「だよね。」

授業中に見せてるんじゃない、意味無いもん」

【紫苑】

「あ、そうですね……」

【陽】

「いや、そうでもないんじゃないか？」

【橙歌】

「どうしてね」

【陽】

「逆に考えるんだよ。授業に集中できないくらいの何かがあるんだ」

【湖珠】

「そっか。授業中は絶対クラスにいくちゃいけないから」

【緑璃】

「せめて、その他の場所では見られないようにしてる？」

【陽】

「そうです」

【橙歌】

「ああっ！」

突然、橙歌が大声を上げた。

【陽】

「ど、どうした？」

【橙歌】

「僕、今日のお昼も夜も、用事があるからって一緒にご飯食べられなかったんだ」

【陽】

「それを早く言えよ！」

そういう情報が欲しかったんだよ！

【橙歌】

「ごめんごめん」

【陽】

「はぁ……」

【紫苑】

「でも、これで先輩の考えが正しい可能性が上がりましたね」

【陽】

「俺のって言うか、紫苑のだよ」

【緑璃】

「凄いよ、紫苑ちゃん」

【紫苑】

「いえ、そんな……」

先輩に撫でられて、紫苑が照れる。

【藍叉】

『赤明は どうして 隠してるの?』

【陽】

「それだよな」

【陽】

「普通に考えれば、俺達に知られたくないからだろうけど」

【緑璃】

「知られたくない理由も色々あるよね」

【陽】

「そうですね」

【緑璃】

「単純に隠したいのかもしれないし、

私達が知ると、何か迷惑がかかる事なのかも」

【橙歌】

「赤明、何隠してるんだろ……」

【湖珠】

「怪しげな組織の取引を目撃したとかはどうなんだよ?」

【紫苑】

「無いですね」

【湖珠】

「そんなにさっくり切らなくてもいいと思っただよ……」

まあ、そんな漫画みたいな事は流石になあ。

確かに、那美の不思議な力は見たけど……

だからって突飛な事を考えてたんじゃ、話にならない。

【藍叉】

『ストーリーカーは？』

【陽】

「ストーリーカーか……」

かなり現実的な話になったな。

しかも、ありえない話じゃない。

赤明は可愛いし、不埒な思いを抱く奴がいたっておかしくは無い。

先輩のきよろきよろしてたって話も、その相手を警戒してたと思えば頷ける。

くそ、誰だ、赤明を狙ってる奴は。

【緑璃】

「あの、陽君？

まだストーリーカーって決まったわけじゃないからね」

【陽】

「はあ、わかっていますけど？」

なぜか、みんなの視線が集中していた。

俺、何かしたか？

【湖珠】

「城崎君、すごい怖い顔してたんだよ」

【陽】

「え、マジで？」

【紫苑】

「犯人を見つけたら睨み殺しそうな勢いでしたよ」

【藍叉】

『ぶっちゃけ 怖かった』

【陽】

「そ、そうか？」

顔を触ってみる。

……わからんな。

【橙歌】

「赤明も変だけど、最近の陽も同じくらい変だと思うよ、僕は」

【陽】

「……失礼な」

俺は変じゃない。

全くいつも通りだ。

【陽】

「話を戻そう」

【陽】

「ストーカーはありそうではあるけど、
それなら俺達に相談するべきだと思っただよな」

誰かと一緒に行動するだけで、相手を牽制できるだろうし、

ストーカーの1人くらい、アルカンシエルの力を合わせれば捕まえる自信がある。

俺たちにまで隠しておくメリットが全く見つからない。

赤明なら、これくらいの事は計算できるはずだ。

【藍叉】

『相手が凄い大物』

【緑璃】

「例えば誰？」

【藍叉】

『理事長？』

【緑璃】

「それは、いくらなんでもないと思うなあ」

そもそも、うちの理事長って普段から学園にいるんだろうか……。

【藍叉】

『なら 犯人は誰?』

【陽】

「いや、ストーカーもまだ確定じゃないから」

と言っか、むしろ違っと思っ。

ストーカーなら、あそこで、あんな事を言っ必要なんて無かつたはずだ。

『前世』に『生まれ変わり』か。

赤明は、一体何が言いたかつたんだろう。

【紫苑】

「結局、どうしたって推測の域を出られないんですよね」

【橙歌】

「だよねえ……」

新しい意見も出なくなり、難しい顔を突き合わせていると、扉が叩かれた。

【陽】

「ん、誰だろ」

【橙歌】

「もしかして、赤明？」

【陽】

「え、やばっ」

今赤明が来るのは非常に拙い。

話していた内容は誤魔化せばいいとしても、

ほぼフルメンバーが揃っているのに呼ばれなかったと知れば、いい気はしないだろう。

【緑璃】

「か、隠れよ！」

【陽】

「ちょ、先輩!？」

何言ってるんですか！

って、こら、お前らも隠れ始めるな！

大慌ての俺たちを他所に、もう1度扉がノックされる。

あ、しまった。鍵かけてない！

そして、ゆっくりと扉が開かれ、

【黄牙】

「何やってんだ、お前ら？」

部屋のあちこちに明らかにバレバレの隠れ方をした女子メンバーを見て、黄牙が不思議そうに呟いた。

.....

【黄牙】

「あっはははっははっ！」

「んだよ、それであんなになってたのか」

取り合えず、座り直し、事情を聞いた黄牙は盛大に爆笑してくれた。

【橙歌】

「うるさいっ」

【藍叉】

『あんな紛らわしい登場をする方が悪い』

【陽】

「まあまあ。」

「電話は終わったのか？」

【黄牙】

「おう」

【陽】

「やっぱり、唯鈴ちゃんか？」

【黄牙】

「まあな」

【橙歌】

「このシスコン」

ぼそつと橙歌が呟く。

散々笑われた仕返しらしい。

【黄牙】

「違っつ。」

俺は妹思いなんだよ！」

【陽】

「それはわかってるって……」

【黄牙】

「って、そっだ。お前もお前だ」

【陽】

「な、何だよ？」

急に矛先がこっちに向いたな。

【黄牙】

「お前、赤明と付き合ってるらしいじゃねえか」

【陽】

「は？」

【黄牙】

「商店街でデートしてたって、唯鈴に聞いたぞ」

【陽】

「んなつ」

唯鈴ちゃん、何て事を言うんだ！

赤明が誤解を解いたんじゃないのか？

【橙歌・緑璃・紫苑・湖珠】

「ええーーーーー！！！」

【藍叉】

「本当に？」

【陽】

「違う違う！」

あれは買出しを手伝ってただけだ！」

【陽】

「橙歌はそのお茶飲んだはずだろ！」

【橙歌】

「あ、何だ、あれかあ」

【陽】

「そつだよー！」

【陽】

「まったく、ちゃんと付き合っていないって説明したはずなのに……」

【黄牙】

「んだよ、唯鈴が悪いって言うのか？」

【陽】

「そこまでは言わないけど……」

【黄牙】

「でもよ、実際の所はどうなんだ？」

【陽】

「実際も何も、付き合っていないのに」

【黄牙】

「そうじゃねえよ。」

「あー、もう、なんつつうかな」

黄牙は何かをぶつぶつ呟く。

そんなに言いにくい事なのか？

【陽】

「何が言いたいんだよ？」

【黄牙】

「だから、お前は、赤明の事を好きなのかって聞いてんだよ……」

【陽】

「……は？」

好き？

俺が、赤明を？

好きって、あれだろ、愛とか恋とかのあれ。

赤明を

【陽】

「ああ、そっか」

そうなんだ。

どうして、こんな事に今まで気がつかなかったんだろう。

2人だけになった時に、妙に意識してしまったのも、

赤明の事ばかり、心配して見ていたのも、

こんなに必死になって、赤明の事を考えてるのも、

全部、そうだからじゃないか。

【陽】

「好き、なんだ」

【みんな】

「！！！！」

何だよ、黄牙に言われるまで気づかないなんて、

これじゃ、赤明に鈍感って言われても仕方ないな。

【陽】

「って、みんな、どうしたんだ？」

気がつくと、なんか、凄い凝視されていた。

特に、女子メンバーは顔を赤くしている。

【黄牙】

「大胆な奴……」

え……まさか……

【陽】

「口に出してた？」

【黄牙】

「ばっちりな」

後悔する間もなく、黄色い悲鳴に部屋が満たされた。

【緑璃】

「き、聞いた？」

【橙歌】

「うんうんっ」

【湖珠】

「城崎君って、城崎君ってー！ー！」

【藍叉】

『びっくりした』

【紫苑】

「そうですね。それで……」

……正直、この後の騒ぎは思い出したくもない。

<学生寮 213号室>

女子メンバーが帰った後、部屋には黄牙だけが残っていた。

冷蔵庫からジュースを取り出し、2つのグラスに注ぐ。

話しすぎて、喉が渴いていた。

【黄牙】

「気分的には、酒なんだがなあ」

【陽】

「気が向いたら買っとくよ」

【黄牙】

「んじゃ、気分だけ出して乾杯するか」

【陽】

「ん、そうだな」

2人でグラスを掲げる。

【黄牙】

「陽の恋に？」

黄牙がにやつと笑う。

まだからかわれるのか……

【陽】

「……もうそれでいいよ。乾杯」

グラスを軽くぶつけると、澄んだ音が響いた。

【陽】

「……ありがとな」

【黄牙】

「何がだよ？」

【陽】

「お前のおかげで、自分の気持ちに気づけたからな」

【黄牙】

「気にすんなよ。」

俺が言わなくても、その内気づいてたと思うぜ」

【陽】

「そうかねえ……」

【黄牙】

「そうさ」

ちびちびとジュースを飲む。

確かに、酒が欲しい気分なのかもしれない。

【陽】

「……悪かったな」

【黄牙】

「何がだよ？」

【陽】

「唯鈴ちゃんの事」

【黄牙】

「はっ、唯鈴がいるのに他の女に惚れるような奴にはやっぱり任せとけねえよ」

【陽】

「そうか」

【黄牙】

「おっ」

【陽】

「……………」

【黄牙】

「……………」

【陽】

「……………」

【黄牙】

「お前になら、任せられると思ったんだけどな」

【陽】

「大事な妹だよ。あの子は」

【黄牙】

「……………じゃあねえな、それで我慢しとくか」

【陽】

「ん、サンキュ」

【黄牙】

「陽」

【陽】

「ん？」

【黄牙】

「頑張れよ」

【陽】

「ああ……」

それからしばらく、俺たちは無言でグラスを傾けていた。

< ANOTHER VIEW >

< 学生寮 階段 >

【緑璃】

「それにしても、びっくりしたなあ」

【橙歌】

「うん……」

【紫苑】

「そうですね」

【橙歌】

「いきなり、『好き、なんだ』だもんね」

【藍叉】

『本当に びっくりした』

【緑璃】

「でも、ドキドキしちゃった。

告白されるのって、あんな感じなのかな？」

【紫苑】

「九走先輩は、男性に人気がありそうですね、された経験は無いんですか？」

【緑璃】

「ゼロじゃないけど、あんなに真剣に告白された事はないよ」

【橙歌】

「陽のあんな顔、初めて見たよ。」

「ああ、赤明の事好きなんだって、すっごく伝わって来た」

【藍叉】

『赤明が 羨ましい』

【湖珠】

「え、アイちゃんって、もしかして」

【藍叉】

『や そうじゃない』

【藍叉】

『あんなに真剣に想って貰えるのっていいなって思うから』

【湖珠】

「それなら、私がアイちゃんの事を想ってるんだよ」

【藍叉】

『今は男の子の話』

【湖珠】

「ガン！」

友情が愛情に負けたんだよ……」

【緑璃】

「あはは……。」

でも、あの2人が上手く行くといいな」

【橙歌】

「そっだね」

【紫苑】

「何となくですけど、先輩なら大丈夫な気がします」

【緑璃】

「うん、私もだよ。」

でも、私たちも頑張ってフォローしようね」

【みんな】

「はいっ(うんっ)(ヤー)」

< ANOTHER VIEW END >

六月二十日

< 6月20日(土) >

< 学生寮 213号室 >

今日は休日。

時間はたっぷりあって、赤明の為に何かするのに持ってこいだ。

なのに、俺は朝から部屋で唸っていた。

【陽】

「どうすればいいんだろ……」

赤明に会いに行こうかとも思ったけど、自分の心を自覚してしま
った今、無性に恥ずかしい。

取り合えず、この気持ちが落ち着くまでは自重しよう。

今顔を合わせたら、絶対まともな対応ができない気がするからな。

それに、アルカンシエルメンバーと話すのもなあ……

すっかり、好きな事を白状してしまったし。

【陽】

「うっあああああ」

もだえてしまった。

思い出すだけで恥ずかしいっ。

でも、騒がれはしたけど、馬鹿にされたり笑われたりはしなかったんだよな。

いい奴らだ。

そんな事を考えていると、部屋に誰かがやって来た。

【陽】

「誰だ？」

【黄牙】

「俺だ」

【陽】

「詐欺じゃないんだから……」

そりゃ声でわかるけど。

扉を開ける。

【陽】

「何か用か？」

【黄牙】

「今日暇だろ？」

どっか出かけようぜ」

【陽】

「ん……」

確かに暇ではあるけど、

【陽】

「悪いけど、そういう気分じゃないんだ」

【黄牙】

「んだよ、まーた赤明の事考えてたのか？」

【陽】

「ああ」

【黄牙】

「お前が心配する気持ちもわかるけどよ、
部屋でじーっと考えてたっていい考えなんて浮かばねえぜ」

【黄牙】

「ちょっとリフレッシュしたらどうだ？」

【陽】

「そつだなあ」

それも一理あるか。

現に、今日は朝から無駄に時間を過ごしてたんだし。

【陽】

「よし、出かけるか」

【黄牙】

「そう来ねえとな」

【陽】

「もうすぐ昼だけど、今から行くか？」

【黄牙】

「おう、たまには外で飯にしようぜ」

【陽】

「ん、そうするか」

【黄牙】

「昼飯はお前の奢りでな」

【陽】

「何でだよ？」

【黄牙】

「連れ出してやった親友に感謝を示すところだろうが」

【陽】

「俺を励ましてくれるんじゃないのかよ……」

【黄牙】

「仕方ねえな。割り勘にするか」

【陽】

「はいはい、どうもありがとう」

【陽】

「じゃ、準備するから、ちょっと待っていてくれ」

俺は、出かける準備を整えて、黄牙と一緒に寮を出発した。

<商店街>

ファーストフードで適当に昼食を済ませて、店の外に出る。

【陽】

「さて、どこに行く？」

【黄牙】

「ゲーセンでも行くか？」

【陽】

「ま、そもそもそれくらいしか無いんだよな」

ゲーセンじゃないなら、本屋くらいか。

【陽】

「じゃ、行くか」

【黄牙】

「そうだな」

.....

.....

.....

ゲームセンターで幾つかのゲームを楽しんだ後、

俺たちは、なぜか店先のクレインゲームの前にいた。

黄牙が、やたらと真剣な顔でクレインゲームの筐体に向かってい
る。

あ、落ちた。

【黄牙】

「うあ、くそっ」

悪態を吐いて、新しく100円玉を取り出す。

【陽】

「なあ、もう止めないか？」

いくら使ったと思ってるんだよ」

【黄牙】

「2000円も使ったのに、何も取れねえんじや、虚しいだろうが
」！」

【陽】

「見事にクレーンゲームの罠に嵌ってるな……」

あ、また落ちた。

【黄牙】

「そろそろ取れそうな気がすんだけどなあ」

それで取れないからクレーンゲームは貯金箱なんて呼ばれるんだよ。

【陽】

「唯鈴ちゃんのお土産が欲しいなら、どこかで買えばいいだろ」

【黄牙】

「高えだろうが」

【陽】

「多分、ここで粘って取るよりは安く上がると思っけど」

【陽】

「てかさ、男2人でぬいぐるみのクレーンゲームってかなり恥ずかしいんだが」

さっきから、なんとなく見られてる気がするのよ、多分気のせいじゃないはずだ。

【黄牙】

「んなもん気にすんなよ」

【陽】

「するって……」

あ、また落とした。

【黄牙】

「くっそ、もう1回だ！」

「って、100円がもうねえ」

よし、流石にこれで終わりか。

まったく、いつのまにか夕方になってるし。

【陽】

「それじゃ、そろそろ」

【黄牙】

「じゃあねえな。両替してくるか」

【陽】

「って、まだやるのかよ！」

【黄牙】

「取れるまで諦めねえぞ、俺は！」

【陽】

「ええー」

黄牙は、両替の為にゲーセンの中に入って行った。

【陽】

「やれやれ……」

クレーンゲームの筐体に背中を預け、商店街を行きかう人々に視線を向けた。

【陽】

「あれ？」

その人の波の中を、赤明が歩いていた。

まさか、こんな所で遭遇するとは思わなかったな。

普通に話せばいいんだ。

大丈夫だよな……よし。

【陽】

「おい、赤明」

意を決して、声をかける。

【陽】

「あれ？」

赤明は、目の前を急ぎ足で素通りして行ってしまった。

聞こえなかったのか？

【陽】

「あか」

もう1度呼びかけようとした時、赤明が急に走り出した。

時々周りを見ながら、人を掻き分けて走って行く。

まるで、何かから逃げてるみたいだ。

先輩が見たのは、これか！

【黄牙】

「うし、今度こそ取るぞ」

店の中から、黄牙が戻って来る。

【陽】

「黄牙。俺ちよつと行く所ができた」

【黄牙】

「ああ？」

【陽】

「悪い、またな！」

返事を待たずに、俺は赤明を追って走り出した。

【黄牙】

「……な、何なんだ？」

<神社 石段>

【陽】
「赤明ー！」

確か、こっちの方に来たと思うんだけど……

どこに行ったんだ？

周りを見回す。

【陽】
「あ、いた　　って、ええっ！？」

赤明は、神社へと続く石段の、その横の部分を上っていた。

所々に木の生えた結構な斜面を、階段でも上っているみたいにと
んどんと上って行く。

あいつ、何でわざわざあんな所を上ってるんだ？

【陽】
「赤明っ。ちょっと待てよ！」

赤明の後を追いかけて、斜面を登る。

1歩、2歩、

【陽】
「うわっ」

雑草で足が滑り、慌てて近くの立ち木にしがみ付く。

おいおい、赤明はこんな所をすいすい上がってたって言うのかよ。

何か、コツでもあるのか？

再び、斜面を登り始める。

が、数歩も行かないうちにまた転びそうになった。

【陽】

「ああ、もつっ」

階段の方が早いか。

数歩横に動いて、階段に出る。

最初からこうすればよかった……

見上げると、赤明はもうかなり上まで上ってしまっている。

俺は、足を速めて、階段を駆け上がる。

【陽】

「赤明！ 赤明！」

ほぼ横に並んだところで赤明を呼ぶ。

【赤明】

「え、城崎君!？」

今度は俺の声に気づいた赤明がこちらを見る。

そして、俺の足元を見て、驚きの表情を浮かべた。

【赤明】

「そっちが、階段!？」

【陽】

「は?」

何を当たり前な事を言ってるんだ?

気になる発言だったけど、それを深く考えている時間は無かった。

【赤明】

「あっ」

赤明が急にバランスを崩して倒れ込む。

やばいっ。これじゃ、下手したら1番下まで転がり落ちる!

【陽】

「赤明っ」

石段を飛び出して、赤明の腕を掴む。

【陽】

「っ!」

くそ、こんな足場じゃ、支えられないっ。

【陽】

「うわあっ」

赤明に引きずられて、地面に倒れる。

【陽】

「っ!」

赤明の腕を引き寄せて、その体を腕の中に抱き込む。

どん、と背中から衝撃が襲ってきて、息が漏れる。

逆さまに映った視界が、回転する。

【赤明】

「きゃあああああっ」

【陽】

「っ っのっ」

がむしゃらに伸ばした手に、何かが触れた。

必死にそれにしがみ付く。

視界が1回転して、止まった。

全身がずきずきする……。

【陽】

「……ああー、死ぬかと思った。

赤明、大丈夫か？」

【赤明】

「え、ええ……」

【陽】

「ん、それはよかつ」

【赤明】

「あ」

腕の中で、俺を見上げる赤明と目が合った。

全身に、赤明の体の柔らかさを感じる。

【陽】

「あ、赤明……」

【赤明】

「城崎君、その、手を」

真っ赤になった赤明が、腕の中で懇願する。

【陽】

「あ、ああ、悪いっ」

思いつきり抱きしめていた赤明を、慌てて解放する。

俺の上に乗っていた赤明が立ち上がり、俺も体を起こした。

腕に残っている温もりと感触に、さっきとは別の意味で鼓動が早くなった。

【赤明】

「え、えっと、大丈夫？」

【陽】

「ん、多分」

全身が微妙に痛いけど、そんな大した怪我にはなっていないだろう。

【陽】

「取り合えず、石段に出よう」

【赤明】

「ええ、そうね」

足元に注意しながら、石段に出る。

足の裏に触れた固い感触に、妙に安心した。

【陽】

「はぁー、びっくりしたぁー」

【赤明】

「わ、私もよ……」

石段にへたり込むと、赤明も隣に腰を下ろした。

【赤明】

「本当に、ありがとう。」

城崎君がいなかったらどうなってたか」

【陽】

「いや、助けられて良かったよ」

【赤明】

「……………」

【陽】

「……………」

不自然な沈黙が落ちる。

俺は、何かを聞きたくて、聞けなくて。

多分、赤明は何かを言いたくて、言えなくて。

そんな、どうしようもない沈黙だった。

【陽】

「寮に帰るか」

結局、沈黙に耐えかねて、俺の口から出たのは、そんな言葉だった。

石段から立ち上がる。

【赤明】

「……待って」

赤明が、石段から立ち上がる。

石段を降りかけていた俺と、同じ高さの視線で、

あの、諦めたような悲しい笑みで、

それでも、どこか期待を込めた声で、赤明は言った。

【赤明】

「前世とか、生まれ変わりって、信じる？」

これは、2度目の、そして、多分最後のチャンスだ。

正直、こんなに早く巡ってくるなんて予想していなかった。

俺は、信じるって、言うべきなんだろうか。

それが、正しいはずだ。

多分、その前提でしか、赤明の話は聞けないんだろう。

でも、俺は、それを信じているのか？

信じるって言うのは簡単だけど、

それは、昨日の答えられなかった俺と、何も変わってないんじゃない

ないのか？

【陽】

「赤明」

呼びかける。

赤明は、辛抱強く、俺の言葉を待っていてくれた。

【陽】

「俺は、そんな事を考えた事なんて無かったし、全然、信じてなかった」

【陽】

「でも、昨日、沢山考えたんだ」

【赤明】

「そう、それで？」

【陽】

「俺は」

赤明の望む言葉じゃないかもしれない。

けれど、赤明の事が好きだってわかったから、

大切だって気づいたから。

【陽】

「やっぱり、信じられない」

俺は、赤明の真摯な想いに、そんな口先だけの言葉を返すなんて、出来ない。

【赤明】

「……そう」

赤明はそう呟いて、目を伏せた。

【陽】

「でも」

【赤明】

「え？」

赤明が顔を上げる。

【陽】

「最近、お前の様子が何か変なのは、そのせいなんだろう？」

【赤明】

「……そうね、城崎君は、気づいていたものね」

【陽】

「気づくよ。決まってるだろ。ずっと、赤明を見てたんだ」

ああもう、言ってしまったっ。

【陽】

「好きな女の子の力になりたいんだ。」

俺が、赤明の力になりたいんだよ」

【赤明】

「え……？」

赤明が目を見開いた。

【陽】

「だから、話して欲しいんだ。

前世を信じるとか、そんな大きな枠なんてどうでもいいから、

今、お前に何が起こってて、何に悩んでるのかを教えて欲しいんだ」

【赤明】

「で、でも……私の話は、もっと、信じられない話かもしれないのよ？」

【陽】

「そんなの、関係ない」

「そつだ、前世を信じるとか、生まれ変わりがああるかないかなんて、関係ないんだ。」

【陽】

「俺は、赤明を信じる」

どんな話だって構わない。

ただ、赤明を信じるだけだ。

【赤明】

「城崎君」

震える声。

赤明の頬を、涙の雫が滑り落ちて行く。

【陽】

「あ、赤明？」

俺、何か泣かすような事言ったか？

【赤明】

「信じないって言われて、やっぱり駄目だったって思ったのに、笑われてもいい話なのに、凄く真剣に向き合ってくれて、私を信じるって、言ってくれて……」

【赤明】

「最初に信じるって言われるよりも、もっと、嬉しかった。私、本当はきくと、そう言って欲しかったの」

【陽】

「赤明……」

今更に、思い知らされた。

前世を信じる？ って聞く、ただそれだけの事を、赤明はどれほどの覚悟で言ったんだろうって。

昨日、俺が返してしまった答えが、どれだけ赤明を傷つけてしま

ったんだろつ。

【陽】

「赤明」

両腕を伸ばして、赤明の肩を抱く。

赤明の抵抗は無かった。

腕の中に降りて来た体を、抱きしめる。

【陽】

「ありがとう」

しゃくりあげる彼女に、囁いた。

【陽】

「俺に、チャンスを入れて、ありがとう」

一度は信じられなかったのに、

きつと傷ついて、ますます怖くなったはずなのに、

もう一度、俺に聞いてくれた。

【陽】

「俺を信じてくれて、ありがとう」

信じてくれたから、俺は、赤明を信じる事で、やっと彼女の信頼に応えられたんだ。

【赤明】
「城崎君っ」

赤明が涙に濡れた顔を上げる。

【赤明】
「私、あなたに話して良かったっ」

【陽】
「ああ」

【赤明】
「あなたを、信じて良かったっ」

詰まりそうな声で、必死に言葉を紡いでいた。

【陽】
「ああっ」

俺は、そんな彼女が愛おしくて、抱きしめる腕に力を込めた。

【赤明】
「あなたを　好きになって良かった」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

それがわかった訳でもないだろうけど、赤明は、もう1度言ってくれた。

【赤明】

「あなたが、すき」

その後はもう、言葉にならなかった。

赤明は、今まで一人で胸の内に溜め込んだ物を吐き出すように、子供みたいに声を上げて泣いた。

.....

.....

.....

俺は、石段に座って、赤明が泣いている間ずっと、その肩を抱いていた。

泣き声が小さくなって、そして途絶える。

【陽】

「赤明、落ち着いたか？」

【赤明】

「.....ん、すう.....」

返事は、規則正しい寝息だった。

【陽】

「泣き疲れたのか」

【那美】

「きつと安心したんじゃないかな。」

「最近、特に大変だったはずだから」

【陽】

「うおっ、うわっ」

独り言に返事が返って来たのに驚き、

びっくりした拍子に赤明を放り出しそうになって、2度慌てた。

何とか赤明を抱え直して振り返ると、そこには那美が立っていた。

【陽】

「那美……」

【那美】

「久しぶりだね、陽君」

【陽】

「ん、そうだな」

今まで何してたのかとか、いつから見てたのかとか、聞きたい事は沢山あるけど、

とりあえず、それは置いておこう。

【陽】

「聞きたい事があるんだけど」

【那美】

「何かな？」

【陽】

「前世とか生まれ変わりって、存在するの？」

今になって思えば、何で那美に相談しなかったんだろう。

こいつには、超常現象を見せられてるじゃないか。

言っなれば、非常識にどっぷり浸かってる人間（？）だ。

【那美】

「んー、陽君は何て言って欲しいのかな？」

【陽】

「は？」

【那美】

「だから、私に何って言って欲しいの？」

【陽】

「いや、あるのか無いのか、本当の事を教えてくれればいいんだけど」

【那美】

「それじゃあ、陽君は私が『無いよ』って言ったら信じるのかな？」

【陽】

「あ……」

何て馬鹿な事を聞いたんだ、俺は。

【那美】

「陽君は、何って言って欲しいの？」

【陽】

「『あるよ』って言って欲しかったんだな」

那美が非常識サイドの人間だから、肯定されるのを望んでいた。

それで、前世や生まれ変わりを信じようとしていたんだ。

さっき、そんな事は関係ないって言ったばかりなのに、情けない。

【陽】

「ごめん。無かった事にしてくれ」

【那美】

「うん」

那美はにっこり笑って頷いてくれた。

【那美】

「私があるって言うっても、無いって言うっても、それを陽君は証明なんて出来ない」

【那美】

「結局、信じるか信じないか、それしか無いんだよ」

【陽】

「ああ。そして、俺は赤明を信じるって決めたんだ」

証拠も無く、証明も出来ない。

信じると信じないと、その2つしかないのなら、信じるんだ。

俺の、信じたいものを、信じるって決めたんだ。

【那美】

「他に聞きたい事はある？」

【陽】

「ん……お前は、赤明に起きてる事を知ってるのか？」

【那美】

「うん、知ってるよ」

あっさり言い切る。

やっぱり、こいつが非常識サイドなのは間違ってるんだよな。

【陽】

「何とかできないのか？」

【那美】

「んーと、できると言えばできるけど、それは陽君と赤明が何とかしないとイケない事だから」

【陽】
「俺たちが？」

【那美】
「うん。私が直接手を出すのは、「法度なんだよ」

誰が決めたルールだよ？

ま、多分非常識サイドの何かだろうな。

もう、気にしない事にするか。

【陽】
「俺たちで、本当に何とかできるのか？」

【那美】
「自信がないのかな？」

「……………」
だって、俺は、自分の力じゃ何とかならない事がある事を知っているから。

これが非常識サイドの話なら、なおさらじゃないか。

俺みたいなただの人間に、何ができるって言うんだ？

【那美】
「大丈夫。手は出さないけど、無責任に放ったらかしにもしないよ」

【那美】
「助言くらいならしてあげられるし、それに、切り札は持っているよね？」

【陽】
「あの『奇跡』か」

【那美】
「うん。でも、気をつけてね。
あれはもう欠片で、全部綺麗に解決する程の力は持っていないから」

つまり、使い所を考えないといけないって事が。

それにしたって、どれ位の力があるのかくらいは聞いておきたいな。

【陽】
「なあ、那美」

【赤明】
「ん……」

赤明が小さな声を出す。

【那美】
「あ、そろそろ起きそつだね。じゃあ、私はもう行くね」

【陽】

「あ、おい」

まだ聞きたい事は一杯あるのに……

【那美】

「バイバイ。」

それと、カップル成立、おめでとう」

那美は、手を振りながら石段を上がって行った。

今から上がってどうするんだ……

【赤明】

「……ん、あれ」

【陽】

「あ、起きたか？」

【赤明】

「城崎君……？」

ぼーっとした瞳が俺を捉える。

そして、その瞳が焦点を結ぶと同時に、赤明が面白いくらい真っ赤になった。

【赤明】

「じ、じ、じ、じ、じ、じ、めんなさいっ、私ったらっ」

大慌てで立ち上がる。

【陽】

「気にするなよ。」

俺はさっそく力になれて嬉しかったよ」

【赤明】

「あ、ありがとう………」

まだ恥ずかしいのか、消え入りそうな声でお礼を言われた。

【陽】

「それじゃ、急いで帰ろう。正直、門限が危つい」

【赤明】

「え？」

あら、もうこんな時間だったの？」

【陽】

「実はな」

【赤明】

「大変、早く帰らないと」

状況がやばいせいで、大分いつもの調子を取り戻したらしい。

良かった。

あんまり照れられると、こっちも釣られるからな。

【陽】

「じゃ、帰るか」

【赤明】

「ええ」

俺と赤明は、肩を並べて、石段を下り始めた。

六月二十一日

< 6月21日(日) >
< 学生寮 213号室 >

目が覚めた。

【陽】

「朝か」

朝だった。

まだ、かなり早い。

日曜日だし、2度寝するか。

.....

【陽】

「眠れない……」

完璧に目が冴えていた。

仕方なく、ベッドから起き上がった。

着替えて、意味もなく部屋の中を歩き回る。

落ち着かない。

<学生寮 食堂>

部屋を出てきたのはいいが、食堂は、まだ営業していなかった。

カウンターにシャッターが下りている。

自動販売機で缶コーヒーを買って、テーブルについた。

俺のほかにも、こんな時間なのに何人かは人がいた。

何の用事があるのかは知らないが、ご苦労な事だ。

.....

空き缶が数本溜まった頃、

【赤明】

「城崎君？」

やっと、彼女の声が聞こえた。

【陽】

「赤明」

落ち着かなかった理由がわかった。

俺は、不安だったんだ。

俺たちの距離が、近づいたから、

大切な子を手に入れられたから、

それが、失われてしまいうんじゃないかって。

【赤明】

「驚いたわ。随分早いよね」

【陽】

「ん、赤明に早く会いたかったんだ」

ストレートに言うと、赤明の顔が赤くなる。

【赤明】

「馬鹿、何を言うのよ」

隣の席に、赤明が座る。

俺と赤明の椅子の距離は、いつもより少し近くなった気がした。

【赤明】

「……私も、会いたかったわ」

【陽】

「そ、そっか」

今度は、俺が赤面する番だった。

【赤明】

「後で、部屋に行ってもいいかしら？」

【赤明】

「話があるの」

不安そうに、赤明が聞く。

【陽】

「ああ」

俺は、力強く頷いた。

赤明の話は、絶対に聞かなくちゃならない。

そして、それを信じるって、俺はもう決めたんだ。

< 学生寮 213号室 >

朝食を食べた後、俺は部屋に戻った。

しばらくすると、お茶会の道具を持って、赤明が部屋に来た。

手際良く、お茶の準備が整えられる。

【赤明】

「新しいお茶を持ってきたのよ。どれを飲む？」

前に買いに行ったやつか。

ええと、イチゴミルクとフルーツティーだったな。

【陽】

「ん、じゃあそっちで」

フルーツティーの方を指差す。

【赤明】

「アップル、レモン、ピーチ、ローズヒップがあるわよ」

【陽】

「ピーチかな。飲んだこと無いし」

【赤明】

「わかったわ」

赤明がカップに粉を入れて、ポットのお湯を注ぐ。

【陽】

「それにしても、ローズヒップって何なんだろうな」

バラの尻？

いや、HIPは腰回りって意味もあったっけ。

どっちにしても意味不明だ。

【赤明】

「くすつ。橙歌も同じ事言ってたわ」

【陽】

「え、マジか」

【赤明】

「ええ」

赤明は、面白そうに笑っている。

【陽】

「で、何なんだ？」

【赤明】

「実の事よ」

【陽】

「へえ、そうだったのか」

「1つ勉強になったな。」

【赤明】

「はい、どうぞ」

【陽】

「ん、サンキユ」

赤明からお茶を受け取る。

赤明は、続けて自分の分のお茶も淹れた

カップを手元に置いて、赤明と見詰め合う。

【陽】

「それじゃあ、話してくれるか？」

【赤明】

「……ええ」

赤明は頷いて、お茶を1口飲む。

そして、ゆっくりと口を開いた。

【赤明】

「何から話せばいいのかしら。」

こういう話をするのが異常だっただけだから、人に話した事なんて無かったから……」

それはそうだろう。

いきなり前世って言われた俺は面食らったし、

黄牙だって、どちらかと言えば信じられないってよつな事を言った。

ふと、以前見た映画を思い出す。

その映画では、宇宙人に攫われた事があると主張する男が町の笑いものにされていた。

それは、何も映画の中だけの話じゃない。

普通の人間なら、そんな話を吹聴するような人間と関わろうとなんて思わないはずだ。

それが、本人にとっての事実だったとしても、普通に生活する為には、それを隠す他に方法は無い。

まして、赤明は分別のあるタイプの人間だ。

多分、随分昔から、全てを自分の胸の内だけに隠していたんだろう。

想像しかできないけれど、それはきっと、辛くて苦しかったはずだ。

【陽】

「言いたい事を、全部言ってくれればいいんだ」

俺は、その全てを信じるから。

【赤明】

「そうね……」。

それじゃあ、最初から話しましょうか」

【陽】

「ああ」

【赤明】

「私が最初にそれを意識したのは、多分保育園に通っていた頃だったわ」

【赤明】

「あの神社、昔は子供の遊び場だったでしょう？ 私も、あそこで遊んでいたの」

【赤明】

「そうしたら、ある日唐突に、いつもとは全然違う風景が見えたの。ごく普通の風景に、別の風景が重なってる様な感じだったわ」

【赤明】

「それで、その風景の中には男の人と女の人がいて、私に話しかけてくるの」

【赤明】

「朝緋、って」

【陽】

「それが、前世の？」

【赤明】

「ええ。前世の私の名前だったわ。」

「多分、その2人は両親だったんでしょうね」

【陽】

「それで？」

【赤明】

「最初はそれだけ。」

すぐに見えなくなっただわ」

【赤明】

「私、てつきり幽霊が見えたんだと思って、家とか保育園で『お化けが見えた！』なんて話したのよ」

【陽】

「まあ、そのくらいの年齢なら話すだろうなあ」

【赤明】

「それから、時々不思議な風景を見るようになったの。場所は、神社だけじゃなくって、公園でも見えたし、商店街でも見えたわ」

【赤明】

「両親が見える時もあつたし、時代劇に出てくるような村人に会う時もあつたわ。」

そして、みんな私に話しかけてくるの」

【赤明】

「確証は無いけれど、私と昔の私が同じ場所にいる時に、昔の光景が見えるんじゃないかしら」

なるほどな。

朝緋も、何年前だかわからないけど、昔のこの町に住んでいて、

赤明と朝緋が重なった時に、その記憶が蘇るって感じか。

【赤明】

「幽霊じゃなくて、前世って思い始めたのは、小学生の4年生くらいだったわ。」

その頃にはもう、誰かに話すなんて事はしなくなっていたけれど」

赤明が苦笑いする。

その頃までに、誰かに話さない方がいいって思うような体験をしたんだろう。

【赤明】

「昔の私は、何か不思議な力を持っていたみたいなの。神社に住んでいたし、巫女、みたいな感じだったわ」

【陽】

「霊能力者みたいなものか」

【赤明】

「ええ」

特殊な力か……

赤明に記憶を見せているのも、その力の一端なのかもしれないな。

【陽】

「何でそんな事まで知ってるんだ？」

【赤明】

「話しかけられる内容を聞いていたら、想像がつくわよ。その頃には、朝緋様って呼ばれるようになっていたわね」

【陽】
「その頃？」

【赤明】
「あ、これは言ってなかったわね。
私と昔の私は、多分、同じように成長していたの。
私の成長と昔の私の記憶がリンクしてるの」

【陽】
「それじゃ、今赤明が見てる朝緋は」

【赤明】
「多分、私と同一年ね」

【陽】
「そうなのか……」

ちよつと、想像してたのと違うな。

朝緋って人物の一生の記憶を、丸ごと持つてるのかと思ってたけど、そうじゃない。

赤明が偶然見た場所以外の朝緋の記憶はわからない、虫食いだらけなんじゃないか。

【赤明】
「みんながちやほやするから、あたしは随分と我が儘な性格だったわ」

あたし、か。

朝緋の事だろうな。

当たり前だけど、前世とは言っても、赤明とは全く違うんだな。

【赤明】

「そうね……私より、橙歌に似てるわ」

【陽】

「橙歌っぽい赤明か……」

……

【陽】

「……こわ」

【赤明】

「何を想像したのよ……」

【陽】

「ん、気にしないでくれ」

【赤明】

「そうするわ」

お茶を飲んで一息入れる。

【赤明】

「あら、どこまで話したかしら？」

【陽】

「朝緋が我が儘な話だな」

【赤明】

「あ、そうだったわね」

【赤明】

「あたしは確かに我が儘だったけど、でも、みんなに好かれてたわ。そして、多分、あたしも村の人の事が好きだった」

【陽】

「朝緋の考えてる事までわかるのか？」

【赤明】

「それはわからないわ。

でも、記憶が見えている時は、あたしの話した事はわかるのよ。

私は口を動かしてないのに、あたしは人と喋ってて、その言葉が聞こえるから」

【陽】

「なるほど」

何となく人となりはわかるって事か。

ま、朝緋が言ってる事と考えてる事が全然別の酷い奴って可能性もあるけど。

【赤明】

「私の話はこんな所ね」

赤明が話を終える。

多分、細かい事を言えば、まだいくらでもあるのだろうが、概略は大体掴む事ができた。

赤明が前世と言った意味、赤明が隠していた事。

それは、聞く事ができた。

【赤明】

「何か聞きたい事は？」

【陽】

「ん、聞きたい事が……」

赤明の話してくれた内容について、質問する必要なんて全く無い。

俺は赤明の話を信じると決めたのだから、疑う必要なんて無いんだ。

でも、俺の聞きたかった1番大事な話はまだ聞けてない。

【陽】

「結局、今赤明を悩ませているのは何なんだ？」

俺が赤明の話を聞きたいと思ったのは、最近の赤明を心配したからだ。

でも、話を聞いた限りだと、赤明は昔から朝緋の記憶を見ていて、

しかも、それなりに折り合いをつけて生活していたはずだ。

現に、最近まで赤明は俺たちにそんな素振りを全く見せなかったんだから。

いくら、俺が赤明に惚れて気にするようになってたって言っても、俺が赤明の様子が変わったと思ったのは、それだけが原因ってのはありえない。

最近になって、何が変わったのか。

それがわからないと、聞いた意味が無い。

【陽】

「俺が赤明の様子がおかしいって思い始めたのは最近になってからだ。何かが変わったんだろう？」

【赤明】

「……ええ」

【赤明】

「最近、少し変わったの。」

以前より、見える頻度が増えているのよ」

【陽】

「それって、偶然じゃないのか？」

赤明と朝緋が同じ場所にいる時に記憶が見えるんだろ？」

だったら、偶々2人の行動が重なったって事もありえる。」

【赤明】

「いいえ、違うと思うわ」

赤明は首を横に振る。

何か、確証があるみたいだ。

【赤明】

「昔、ここには櫓があつたの」

【陽】

「そうなのか？」

まさに、歴史の生き証人だな。

【赤明】

「ええ。」

そして、あたしはこの場所が好きで、よく訪れていたのよ」

【赤明】

「それなのに、入学してから今年の初めまでは、特に頻度が増えたわけではなかったわ」

【陽】

「場所が重なっても、100%見える訳じゃなかった？」

【赤明】

「多分だけれど」

【陽】

「で、それが頻繁に見えるようになった」

それで、授業中とかも外を気にしていたのか。

【赤明】

「それに」

【陽】

「まだ何かあるのか？」

思わず口を挟む。

【赤明】

「ええ。」

そして、これが1番の原因なのよ」

赤明は苦しそうな表情で言った。

【赤明】

「今、あたしの時代は、飢饉なのよ」

【陽】

「なっ……」

飢饉。

農作物なんかの不作のせいで、食べ物が無くなる事だ。

江戸時代とかには、それこそ何十万人規模の死者が出たって記録

もあつたはずだ。

朝緋の生きていた時代が正確にいつかはわからないけれど、

巫女が信仰されてるって話からすると、現代からはかなり離れて
いるはずだ。

そんな時代の飢饉は、間違いなく死活問題だろう。

【陽】

「でも、赤明の腹が減るってわけでもないだろ？」

【赤明】

「確かに、私の体には何の影響も無いわ。でも……」

【赤明】

「見える人たちが、あたしとずっと過ごしていた人たちが、あたし
を頼るの」

【赤明】

「あたしなら何とかしてくれるって思って、

『朝緋様、助けてください』って、言うのよ……」

赤明の声は半分涙声だった。

それで、どれだけ赤明が辛い思いをしているのかが、伝わる。

【赤明】

「私にはどうしようもないのに、誰もがあたしに縋るの。

でも、あたしにだって、何もできないのよ！」

【陽】

「赤明……。それは……」

赤明にかけてやれる言葉が見つからない。

それは、どれだけ齒がゆく思っても、もつとつしよつもない事だ。

既に終わってしまった、遠い過去の出来事。

朝緋にも、赤明にも、

そして、もちろん俺にだってどうする事もできない。

赤明の力になるって言ったくせに、どうする事も。

俺は、どうしてこんなに無力なんだ……。

【赤明】

「城崎君、そんな顔をしないで」

赤明が優しく微笑む。

【陽】

「でも、俺には何もできないんだ」

【赤明】

「いいえ、そんな事はないわ」

赤明は首を横に振り、立ち上がる。

【赤明】

「そっちに行っても、いい？」

【陽】

「ん、ああ」

赤明は俺のすぐ隣に腰を下ろした。

何日か前に一緒に勉強した時に似た位置。

でも、俺たちの距離はあの日よりもずっと近い。

俺の手の上に赤明がそつと手を重ねた。

【赤明】

「私、今よりもずっと辛い時期があったの」

【陽】

「え？」

【赤明】

「中学生の時の話よ」

【赤明】

「何もわからない子供の頃はまだよかったの。

話したら笑われるから、見える物を話しちゃダメって、
そう思っているだけでよかったから」

【赤明】

「でも、もう少し大人になって知識が増えてきたら、
そんなに単純じゃいられなくなった」

【赤明】

「自分はどこがおかしいんじゃないかとか、
心の病気なんじゃないかとか、色んな事が怖くなって」

【赤明】

「目が覚めたら病院のベッドの上にいるんじゃないかって思ったたら、
怖くて夜も眠れなかった」

【赤明】

「多分、学校でも普通ではいられなかったんでしょね。
ある日、その頃仲の良かった子に聞かれたの。
『どうしたの？』って」

【赤明】

「私は、私の気持ちをわかって欲しくて、彼女に全部話したわ」

【陽】

「……それで、どうなったんだ？」

もう、話の帰結に想像はついていたけれど、聞かずにはいられな
かった。

【赤明】

「……彼女は、優しくていい子だったのよ」

【陽】

「それじゃ……」

その頃にも、いたのか。

赤明の支えになってくれる人が。

【赤明】

「次の日学校に行っても、私は噂話のネタにはなっていなかったわ」
重ねられた手に、ぎゅっと力が入った。

【赤明】

「その子はもう2度と話しかけてこなかったけれど、ね」

【陽】

「……そんな」

【赤明】

「それで、私は普通の人が嫌になったの」

【赤明】

「異常って言われたって、理解しあえる人がいるなら、そっちの方がいいって思ったわ」

【赤明】

「本屋でオカルト系の雑誌を買い漁って、私みたいな人を探して」

【赤明】

「その途中で、ある記事を見つけたのよ」

【陽】

「その、記事って？」

赤明の話し方は、余計な口を挟ませるような余裕なんて無くて、俺は、馬鹿みたいに相槌を打つしかなかった。

【赤明】

「読者の人で集まって、前世について話しましょうって言う、会合の案内よ」

要するに、オフ会みたいなものか。

しかしまあ、何て怪しい……

【赤明】

「偶然、その場所が近くで。私は、そこに行ってみたの」

【陽】

「行ったのか!？」

【赤明】

「それだけ余裕が無かったのよ」

赤明は自嘲気味に笑った。

【赤明】

「集まっていたのは、10人くらいだったわ。スーツを着たサラリーマンみたいな人とか主婦みたいな人まで、色んな人がいた」

【赤明】

「私は、嬉しかったわ。」

この人たちは、私の悩みをわかってくれる仲間なんだって思ったわ。

でも……」

【赤明】

「始まってすぐ、それが間違いだって気が付いたの」

【陽】

「……何でだ？」

そこに集まった人は、みんな前世の記憶がある人ばかりだったのなら、

大多数の一般人よりは理解できると思うけど。

【赤明】

「もうちょっと話が進んだら、わかるわよ」

【陽】

「そうか」

じゃあ、黙って聞いていよう。

【赤明】

「会の最初は自己紹介だったわ。」

それで、最初にサラリーマン風の人が自己紹介したのよ。何って言ったと思う？」

【陽】

「実名は出したくないから、言わないとかか？」

そんな態度じゃ、打ち解けにくいし、本当に仲間とは言いにくい気がする。

【赤明】

「違うわよ」

そう言って、赤明は笑みを浮かべた。

背筋が震えるような、凄絶な表情だった。

これは、その時の赤明の絶望なんだろうか。

【赤明】

「その人はこう言ったわ。」

『始めまして皆さん。私は、ナポレオン・ボナパルトです』って

【陽】

「は？」

それが自己紹介だったのか？

前世がそうだったって言いたいんだろうけど……

さすがになあ……

【赤明】

「ちなみに、ナポレオンは3人いたわね。クレオパトラも2人。」

他の人も、みんな世界史の教科書に出て来るような人だったわ」

【赤明】

「そして、言う事はみんな同じよ。」

『前世があれだけ偉大なのに、今の自分の扱われ方がおかしい』
「って」

【赤明】

「わかるかしら？」

前世を怖がっていたのは、私だけだったのよ」

【赤明】

「同じだと思った人たちの中でさえ、私は理解されなかった」

それは、どれほどの絶望だっただろう。

普通の人からの理解を諦めて、

それを捨ててまで得ようとした仲間は、理解者足りえなかった。

一般に異端とされる中でさえ、孤独。

【陽】

「それで、よく……」

【赤明】

「逆に良かったのかもしれないわ。ショック療法になったもの」

【赤明】

「誰にも理解されずに、1人で抱えるしかないって覚悟を決められ

たから。

半年もする間には、何となく割り切れるようになっていたわ」

【陽】

「赤明……」

赤明は簡単に言うけれど、

その半年は、どれだけ苦しかっただろう。

その半年で赤明が潰れてしまわなかったのは、ほとんど奇跡だ。

【赤明】

「今見えている景色は、あの頃よりずっと辛いものだけど、でも、今はあなたがいてくれる」

赤明の体もたれかかって来て、俺の方に頭の重さがかかる。

【赤明】

「いてくれるだけでいいの。
私の話を聞いてくれるだけでいいのよ」

【赤明】

「そのあなたの態度だけで、私は救われるわ」

【陽】

「ん……そっか……」

力になれているのなら、よかった。

それにしても……

【陽】

「それだけのことがあったのに、よく俺に前世を信じてるかって聞く気になつたな」

俺だつたら、絶対無理だと思う。

【赤明】

「そうね……私もよくわかってなかったけど、今ならわかる様な気がするわ」

【陽】

「ん？」

【赤明】

「友達にも、同類の人にもわかってもらえないって絶望したけど、好きな人にはまだ希望を持ってたんだわ」

【陽】

「それは、光栄だな」

【赤明】

「ええ。」

だから、離れないで」

ぎゅっと、強く手を握られる。

【陽】

「ああ」

赤明の手を指を絡ませて、握りなおす。

俺がいるだけで、力になれるなら、

赤明が望む限り、ずっと、こうしていよう。

もう、彼女が孤独に苛まれないように。

でも、いつか。

きっと、今以上に力になってみせる。

【陽】

「約束する、絶対にだ」

好きな人に希望を感じたって言うてくれた。

その彼女への、この想いに誓おう。

頬にかかる、赤明の髪の毛の1房に口付ける。

【陽】

「赤明、愛してる」

【赤明】

「ええ、私もよ。愛しているわ」

俺たちは、長い時間、身を寄せ合っていた。

この温もりが、力になるんだと、そう信じて。

<学生寮 食堂>

【陽】
「んじゃ、いただきます」

【赤明】
「いただきます」

俺と赤明は、夕食を食べに、食堂に来ていた。

今日は、結局1日中赤明と話してた気がするな。
大事な話も色々聞けたし、有意義な1日だった。

【黄牙】
「何だ、もう食ってたのか」

トレイを片手に、黄牙が姿を見せた。

【陽】
「ん、まあな」

【黄牙】
「誘ってくれりゃいいのに……」

不満げに呟きながら、俺の向かいの席に座った。

【黄牙】

「……んん？」

黄牙が首を傾げる。

【赤明】

「どうしたの？」

【黄牙】

「いや、何か違和感があんだけど……気のせいかな」

【陽】

「何か踏んでるんじゃないのか？」

【黄牙】

「そんなのは違うんだ。ま、気にすんな」

【陽】

「それならいいけど」

【黄牙】

「そんじゃま、いただきますっつと」

【橙歌】

「あー、いたいた！」

今度は、橙歌が現れた。

【橙歌】

「むー、3人だけで食べてるなんて、酷いじゃんか」

【陽】
「偶然会っただけだ」

【赤明】
「そうよ。仲間外れにしたわけじゃないわ」

【橙歌】
「それはわかってるけどさあ」

口を尖らせて、席につこうとする。

【橙歌】
「あれ？」

と、黄牙みたいに首を傾げた。

【陽】
「お前もか」

【橙歌】
「え？」

【陽】
「ん、何でもない」

【赤明】
「どうしたの？」

【橙歌】

「何か、変な感じ……」

【橙歌】

「あ！ 席だ！」

【陽】

「席？」

【橙歌】

「陽の隣が黄牙じゃないなんて珍しいじゃん。喧嘩でもした？」

橙歌がそう言うと、黄牙がはっとした顔になった。

【黄牙】

「ああ、それだ。

何かいつもと違うと思ってたんだよな」

【橙歌】

「で、何で？」

【黄牙】

「喧嘩はしてねえぞ。

最初っから赤明が座ってたんだ」

【橙歌】

「ふーん。珍しいじゃん」

【赤明】

「そ、そうかしら？」

【橙歌】

「だって、4つ椅子がある時は、
陽と黄牙、僕と赤明だったじゃん」

【黄牙】

「そつ言やそつだな」

ん、言われてみると確かにその通りだった気がする。

これも、この4人の暗黙の了解みたいなものだな。

【陽】

「普通に座ってたからスルーしてたな。何でそこなんだ？」

【赤明】

「き、城崎君がそれを聞くの!？」

【陽】

「へ?」

え、まさか、俺と付き合い始めたからとか、そんな理由なのか?

【陽】

「え、でも、対面も隣も、距離的に大して変わらないだろ?」

【赤明】

「でも、こっちの方が少し近づけるじゃない」

頬を染めて、拗ねたみたいに呟く。

【赤明】

「少しでも、側にいたいだよ」

やばい、可愛い。

【陽】

「赤明っ」

と、思わず抱きしめたくなくて、

【黄牙・橙歌】

「……………」

2人がいた事を思い出して、なんとか踏み止まった。

2人は、全く同じ表情で固まっている。

擬音で言っなら、ポカーンという感じか。

【赤明】

「もう、何を言わせるのよ……馬鹿」

赤明は、なにやら可愛らしい事を呟き、

かなりのスピードでトレイの上を片付けにかかる。

いた堪れないくらい恥ずかしいらしい。

【赤明】

「「ごちそうさまでした」

【赤明】

「それじゃ、また明日。お休みなさい」

おーい、俺を1人置いていかないでくれー。

前を見ると、2人がやっと驚愕から戻ってくる所だった。

目が、驚きと興味に輝いている。

……俺にどうしろと？

【陽】

「えーと、まあ、そう言う事になったから。それじゃっ！」

赤明に倣って、逃げ出す事にした。

次に顔を合わせる時が憂鬱だ……

六月二十二日

< 6月22日(月) >

< 学生寮 214号室 >

【陽】

「ほら、さっさと起きろ！」

黄牙をベッドから叩き落す。

【黄牙】

「どわぁっ」

床に転がった黄牙が、のっそりと起き上がる。

【黄牙】

「あ、あれ。陽？」

【陽】

「何で不思議そうなんだよ？」

【黄牙】

「赤明と付き合い始めたから、来ねえんじゃないかと思ってたんだ」

【陽】

「いや、関係ないから」

どうせ朝は食堂で会うしかないんだし。

あんな人が多いところじゃ、どうせ2人だけになんてなれないからな。

黄牙を遅刻させるわけにはいかないし。

【陽】

「そんな変な事考えてる暇があったら、さっさと行くぞ。ちゃんと起こしたのに、遅刻なんてごめんだからな」

【黄牙】

「へいへい、わかったよ」

<学生寮 食堂>

食堂に行くと、入り口でいつものように赤明と橙歌が待っていた。

今日は、緑璃先輩の姿もある。

【陽】

「おはよう、みんな」

【黄牙】

「はよ」

【橙歌】

「おっはよー」

【緑璃】

「おはよう、2人共。

やっぱり、朝は挨拶からだね」

よくできました、って撫でられる。

【赤明】

「おはよう、城崎君」

【陽】

「ああ。おはよ、赤明」

【赤明】

「先輩、撫でるのはそのくらいで。

ここで立ち止まったら迷惑になるわ。行きましょう。」

【緑璃】

「あ、そうだね。

「ごめんね、赤明ちゃん」

【赤明】

「あ、いえ……」

ぞろぞろと移動を始める。

【橙歌】

「それっぽい事言ってたけど、あれ絶対やきもちだよね」

【黄牙】

「だろうな」

【赤明】

「橙歌、変な事言わないで」

【橙歌】

「はい」

ひそひそと話している橙歌たちを赤明が注意する。

よく聞こえなかったけど、何を話してたんだろ。

【陽】

「赤明、あいつら何を言ってたんだ？」

【赤明】

「えっと、その、大した事じゃないわよ？」

【陽】

「ん、そっか」

ま、いいか。

どうせ大して重要な話でもないだろ。

【緑璃】

「やきもち？」

【赤明】

「な、なんでもないですから！」

朝食を受け取って、空いている席を探す。

【黄牙】

「お、あそこが空いてるぜ」

ちょうどよく、まとまった空席があった。

【陽】

「そうだな。あそこにするか」

テーブルにトレイを置いて、椅子に座る。

【橙歌】

「陽の隣は、赤明だよね？」

にやにやと笑いながら、橙歌が俺の向かいに座る。

【赤明】

「と、橙歌！」

【黄牙】

「お、そうだったな。忘れるところだったぜ」

似たような表情で、黄牙が橙歌の隣に座る。

【陽】

「お前らなあ……」

気を使ってるというか、絶対、からかってるだけだ。

【橙歌】

「あ、先輩はこっちね」

【緑璃】

「うん、いいよ？」

先輩が橙歌の隣に座る。

【赤明】

「……………」

赤明が困った顔で立ち尽くしている。

普通に座れば良かったのに、変に根回しされたせいで座りにくいんだろっ。

助け舟を出してやるか。

【陽】

「1:4じゃ話もしにくいし、2:3ぐらいがちょうどいいよな」

【赤明】

「あ、ええ。そうね」

ほっとした顔で、赤明が隣に座る。

【橙歌】

「うー、うまくかわされたなー」

【赤明】

「何の事かしら？」

「さ、食べましよう」

【陽】

「そつだな。頂きまーす。」

橙歌は微妙に不満そつだったけど、仕方なく朝食を食べ始めた。

「やれやれ、これで一安心でき」

【緑璃】

「あ、もしかして、陽君と赤明ちゃん付き合い始めたの？」

【陽】

「ぶっ」

不意打ちかよ！

【陽】

「げほっ、ごっほ」

【赤明】

「だ、大丈夫？」

「はい、お茶飲んで」

【陽】

「あ、ありがとう」

お茶を飲んで、何とか人心地ついた。

【緑璃】

「ご、ごめんね、陽君。大丈夫だった？」

【陽】

「はい、まあ、何とか」

【緑璃】

「よかった」

先輩がにっこりと笑う。

【緑璃】

「それで、付き合ってるの？」

やっぱり聞くんですね……

仕方ないなあ。

【陽】

「はい。付き合うことになりました」

【緑璃】

「そっかあ。

うん、よかったね。おめでとう」

満面の笑みで先輩が言う。

心から祝福してくれてるのが、せめてもの慰めだ。

【赤明】

「あ、ありがとうございます」

【緑璃】

「それならそうって、話してくれたら良かったのに」

【陽】

「別に隠してたわけじゃないんですけどね。」

黄牙たちのせいで、タイミングを逃したと言いますか」

【赤明】

「そうね。確かに橙歌たちが余計な事をしてたからだわ」

【橙歌】

「そんな息ぴったり合わせて怒らなくてもいいじゃんか」

【黄牙】

「そうそう。俺たちはどっちかってと気を使ってたんだぜ」

【赤明】

「それをありがた迷惑って言うのよ……」

ため息混じりに赤明が言う。

その意見には全く同感だった。

昼休み。

俺と赤明は、中庭で買ってきたパンを齧っていた。

普段は食堂か学食を使うのだが、

今日はどっちに行っても、アルカンシエルメンバーにからかわれるだけの気がしたからだ。

【赤明】

「ごちそうさま」

パンの空き袋をきちんとたたんで、ビニール袋に片付ける。

【赤明】

「いつもは食堂とか学食だけど、たまにはこんなのもいいわね」

【陽】

「ん、割と穴場だったよな」

通路の様に中庭を通る生徒は結構いたが、中庭で食事をする生徒は割と少なかった。

後者から少し離れた場所のベンチを選べば、思った以上に静かに昼食を食べられた。

【赤明】

「これからどうするつもりなの？」

【陽】

「うーん、教室に帰ったらそれはそれでからかわれそうだしなあ」

何せ、アルカンシエルの半分以上は同じクラスだ。

【陽】

「ここでゆっくりしてるか」

【赤明】

「そうしましょうか」

ベンチの背もたれにもたれかかる。

風が吹き抜けて、中庭の木々を揺らして行った。

【赤明】

「いい風」

【陽】

「そうだな」

最近は気温が上がって、じっとしていても暑さを感じる。

見上げた太陽の位置は随分と高かった。

【陽】

「もうすっかり夏だよな」

【赤明】

「ええ。そうね」

【陽】

「夏休みは何しようかなあ」

アルカンシエルのメンバーでも何かするだろうし、

赤明とも恋人らしくデートとかしてみたい。

どっちにしたって、楽しみだ。

【赤明】

「気が早いわよ。」

その前に、期末試験があるでしょう？」

【陽】

「あー、そうだった」

できれば思い出しなくなかった。

【赤明】

「また、橙歌の勉強を見てあげないと」

【陽】

「俺も、黄牙に勉強させないと」

成績が悪いと、夏休みに補習だからな。

遊ぶ時間を削られるのは勘弁だ。

【赤明】

「今回も、勉強会かしらね」

【陽】

「そうだな。」

どうせなら、アルカンシエルでやっても楽しそうだけど」

【赤明】

「……ちつともはかどる気がしないわね」

【陽】

「ん……そうだな」

ただのお茶会で終わってしまいそうだ。

【赤明】

「でも あ……」

突然、赤明が言葉を切った。

目の前の空間を見つめている。

一見すると、何も無い、普通の中庭だけど。

【陽】

「見えてる、のか？」

話を聞いた今ならわかる。

赤明が見ているのは、朝緋の記憶だ。

【赤明】

「ええ……」

【陽】

「どうすればいい？」

話は聞いたけれど、実際に対処する方法なんてわからない。

どうすれば、助けになれるんだ？

【赤明】

「移動するわ。」

私が動いて、あたしのいた場所とずれたら、勝手に消えるから」

【陽】

「なるほどね」

赤明と朝緋の位置が重なった時、記憶が見える。

なら、赤明の方が動いて、位置をずらせばいいって事か。

【陽】

「どこに行く？」

【赤明】

「3階に」

【陽】

「3階？」

【赤明】

「過去には、3階の高さの建物が無いのよ。そこなら、絶対に重ならないわ」

【陽】

「ん、わかった」

過去に無い場所なら、朝緋は絶対に行った事は無いって事か。

確かに、高さの軸の移動はどうしようも無いな。

ベンチから立ち上がる。

【陽】

「急いじう」

【赤明】

「あ、待って」

走り出そうとしたところを、赤明に引き止められた。

【陽】

「どうした？」

「さっさと移動した方がいいんだろ？」

【赤明】

「今、よく見えないのよ」

【陽】

「え？」

【赤明】

「今と過去の景色が重なってしまっ

て。どう見ても今の物とかはわかるのだけど、地面とか木は……」

【陽】

「マジかよ……」

告白した日に、階段でもない所を上ってたのはそのせいか。

とすると、

【陽】

「その過去の景色にある物って、触れたり、ぶつかったりするの
か？」

【赤明】

「いいえ、見えるだけよ」

【陽】

「そうなのか？」

【陽】

「でも、一昨日は過去の石段を上がったんだろ？」

【赤明】

「あ、あれは、あそこが階段だと思い込んでただけなのよ。
本当は上りにくいって思ってたわ」

【陽】
「ん、そうか」

そこまで思い込むってのも凄い話だな。

でも、ぶつからないとわかれば、問題は無い。

【陽】
「掴まれよ」

赤明に手を差し出す。

【陽】
「ぶつからないんなら、俺が今の道を引っ張ればいいんだろ」

【赤明】
「あ……」

【陽】
「ほら、早く」

【赤明】
「わかったわ」

赤明が俺の手を握る。

俺は、その手を握り返した。

【陽】
「走るぞ！」

【赤明】
「ええ」

赤明の手を引いて、走り出す。

途中ですれ違った学生が何事だろうみたいなの顔をするけど、それは無視だ。

<学園 廊下>

校舎に駆け込む。

【陽】
「まだ見えてるか？」

【赤明】
「見えてるわ」

【陽】
「わかった」

手を繋いだまま、さらに走る。

赤明の手には、時々力が入った。

多分、その時は目の前に何かがあったり、誰かがいたりするんだろっつ。

でも、俺を信じて引っ張られていてくれる。

その信頼が嬉しかった。

【陽】

「上にかかるぞ」

【赤明】

「ええ」

階段を駆け上がり、2階、3階まで上る。

【陽】

「ど、どうだ？」

【赤明】

「ちょ、ちょっと待って」

荒い息を整えながら、赤明が窓から外を見る。

【赤明】

「……いないわ」

【陽】

「そっかぁー」

ずるずるとその場に座り込む。

引っ張られて、赤明も床に座った。

あ、まだ手を繋いだままだったか。

手を離そうとする。

【赤明】

「待って……もう少しだけ、このまま……」

【陽】

「ん……」

頷いて、手を握りなおす。

【赤明】

「ありがとう」

【陽】

「ああ……」

このくらいで、へばってなんかいられない。

俺だけが、赤明の力になれるんだから。

赤明の手を握りながら、もっと頑張ろうと、そう思った。

< 学生寮 213号室 >

正直、甘く見ていた。

何をつて、アルカンシエルの無意味な団結力と行動力をだ。
でなければ、こんな事になりはしなかっただろう。

【緑璃】

「陽君、赤明ちゃん。おめでとー！」

パンッパンッと連続でクラッカーが鳴る。

夕食時の食堂にメンバーが誰もいなかったから、もうからかつのは気が済んだのかと思ったのに……

赤明と一緒に部屋に帰ってきたら、これだよ。

【黄牙】

「ま、突っ立ってないで、部屋に入れよ」

【陽】

「俺の部屋だよ！」

何でアルカンシエルメンバーが勝手に勢ぞろいしてるんだ。

【赤明】

「何の騒ぎなのよ、これは……」

【湖珠】

「何つて、2人のお祝いなんだよ」

【藍叉】

『おめでたい事はみんな分けて合っ』

【陽】

「いやそんな、ちょっといい事言った、みたいな顔されても……」

戸口で固まっけていても仕方ない。

取りあえず、入るか。

部屋に入ると、紫苑が机の上にお菓子を広げていた。

【陽】

「紫苑、お前もか」

【紫苑】

「あ、すみません。勝手に部屋に入ってしまった」

【陽】

「……いや、もういいよ」

いつもの場所に座る。

他のメンバーもテーブルの周りに集まった。

【橙歌】

「しまった。お茶が無いじゃん」

【黄牙】

「お、そう言やそうだな」

赤明が準備に参加してないんだから、当たり前だ。

【橙歌】

「赤明、持って来てよ」

【赤明】

「一応お祝いされるのだと思ったのだけど、そうでも無いのかしら
……」

【緑璃】

「あ、私が行くよ」

【赤明】

「いえ、私が行きます。」

先輩は置いてある場所しりませんよね？」

【緑璃】

「あ、そっか」

【赤明】

「じゃあ、取ってくるわ」

【陽】

「ん、わかった」

……

赤明がお茶会の道具を持って来て、お茶会なにかとつかわからないがが始まった。

【陽】

「で、何なんだ、この集まりは」

【緑璃】

「ええっとね、最初に私が橙歌ちゃんにお祝いしてあげたいねって言ったの」

【橙歌】

「それで、僕が黄牙に声かけて」

【黄牙】

「食堂で相談してたら、風見と夏原が来て」

【湖珠】

「面白そうだったから仲間に入れて貰ったんだよ」

こくりと藍叉が頷く。

【赤明】

「あら、それだと南雲さんがいないわよ」

【紫苑】

「私はメールで呼び出されました。」

「宴会をするって」

【黄牙】

「で、俺が鍵あけて待ち構えてたってわけだ」

【陽】

「なるほどね」

経緯はよくわかった。

それと、最初は善意だったのが、徐々に面白そうだからになったのも。

俺と赤明がいなくて、先輩が発案じゃ、後は広がるだけだったんだろうな。

紫苑は後輩だからって遠慮してるのか、決まった事にはあんまり意見を言わないし。

ストッパー不在って恐ろしい……

【橙歌】

「それじゃ、質問タイム行ってみよっか」

質問タイム？

また、嫌な予感しかしないようなものを……

【赤明】

「何を決定事項みたいに進めてるのよ」

【橙歌】

「決定事項だもん」

【赤明】

「そんなの、いつ決めたのよ……」

【橙歌】

「いつでもいいじゃんか。」

赤明には拒否権ないよ」

【湖珠】

「もちろん、城崎君もね」

【陽】

「えー……」

全力で拒否したい。

【緑璃】

「藍又ちゃん、準備はできてる？」

【藍又】

『ヤー』

藍又がスケッチブックを掲げる。

準備がいいなあ、おい。

【緑璃】

「じゃあ、最初の質問、行っちゃおう」

【橙歌】

「オープン！」

藍又がスケッチブックをめくる。

【風見】

『告白されたのは、いつごろで？』

【湖珠】

「ちなみに、質問者はプライバシー保護の為に伏せてるんだよ」

【赤明】

「質問される方のプライバシーも守ってくれないかしら？」

【藍叉】

『や』

【湖珠】

「それは出来ない相談なんだよ」

【赤明】

「そうだと思ったわ」

【黄牙】

「もったいぶらねえで、さっさと答えるよ」

【赤明】

「城崎君、どうするの？」

赤明が小声で聞いてくる。

【陽】

「ん……」

もちろん答えたくなんか無いけど、みんなには相談に乗って貰ったりしたんだよな。

結局的外れだったけど、当てようの無い正解だったし。

それに、あれがあったから、赤明の事が好きだって気づけたわけ
で。

【陽】

「仕方ないか」

【赤明】

「え、本気なの？」

【陽】

「色々と借りがあるんだ」

【赤明】

「……仕方ないわね」

【陽】

「悪いな」

【紫苑】

「相談は終わりましたか？」

【陽】

「ああ。一応答えるよ」

【橙歌】

「やった！」

【陽】

「一応だからな。
答えたくないのはパスだ」

【橙歌】

「えー、ケチー」

【緑璃】

「2人のお祝いなんだから、嫌なこと聞くのはダメ、だよ」

【橙歌】

「ちえー」

先輩に諭されて、しづしづ橙歌が引き下がった。

【橙歌】

「ま、いつか。」

それじゃ、最初の質問に答えてよ」

【紫苑】

「この質問は、新嶋先輩宛ですね」

【赤明】

「私に？ わかったわ」

【赤明】

「告白されたのは一昨日。」

場所は神社の前よ」

【紫苑】

「先輩、随分と変わった所を選んだんですね」

【陽】

「別に呼び出したんじゃないんで、ほとんど成り行きだったからな……」

告白する10分前まで、そんな事は欠片も思っただけなかったし。

【湖珠】

「それじゃ、次に行くんだよ」

【藍叉】

『告白のセリフは？』

【湖珠】

「これは城崎君に答えて欲しいんだよ」

【陽】

「わかったよ」

とは言っても、よく覚えてないんだよな。

夢中だったし。

と言うか、正直に言って、色々説明しないといけなくなるのも困る。

【陽】

「何というか、ストレートに『好きな女の子は赤明だ』って」

うん、嘘は言っていない。

【橙歌】

「なんでもっと面白い告白にしなかったのさ？」

【陽】

「俺にはなんでそんな駄目出しされてるのがわからないよ」

もっとロマンチックにとかならまだわかるけど、

面白くって何だ、面白くって。

【湖珠】

「はいはい。次に行くんだよ」

【藍叉】

『告白されて、どう思った？』

【緑璃】

「これは赤明ちゃんだね」

【赤明】

「そうですね……」

【赤明】

「最初はびっくりしたわ。

でも、すぐにとっても嬉しい気持ちに満たされて」

【赤明】

「理由とかそんなの全部関係なくなっ
て、この人の事が好きなんだって思ったの」

【陽】

「赤明……」

あの時、そんな風に思ってたのか。

何だろう、かなり嬉しい。

【緑璃】

「うわぁ……惚気られちゃったよ」

【赤明】

「の、惚気てませんっ」

【藍叉】

『のろけてた』

【藍叉】

『自覚が無いなら 相当』

【黄牙】

「そうだな」

【赤明】

「聞かれた事に答えただけなのに、何でそんな扱いになるのよ!」

【紫苑】

「新嶋先輩、落ち着いて下さい」

【赤明】

「……そ、そうね。
少し冷静さを失ってたわ」

【紫苑】

「でも、さっきのは惚気以外の何物でも無かったと思います」

【赤明】

「南雲さん!？」

【湖珠】

「きれいにオチた所で、次の質問行くんだよ」

【赤明】

「ちょっと待ってくれるかしら」

藍又が新しいページをめくろうとした所で、赤明が口を挟んだ。

【赤明】

「さっきから気になっていたんだけれど、
どうしてみんな、城崎君が私に告白したって知ってるのよ?」

【赤明】

「その逆の可能性もあったんじゃないかしら」

【緑璃】

「その答えは簡単だよ」

【橙歌】

「だって、僕達は陽が赤明の好きなの知ってたもん」

【黄牙】

「だからまあ、陽が告ったんだろうつてな」

【赤明】

「どうしてそんな事をみんなが知っているのよ」

【陽】

「ん……赤明の様子が变だっと思って相談してた時に、うっかりな」

【緑璃】

「あの時の陽君はすっごくかっこよかったよ」

【紫苑】

「そうですね」

【藍叉】

『赤明は 愛されてる』

【陽】

「止めてくれ、恥ずかしいから」

口々にばらされるのを止めながら赤明を伺う。

赤明は、喜んでいるような怒っているような微妙な表情を浮かべた。

【赤明】

「もう、馬鹿ね……恥ずかしいわ」

【陽】

「悪い……」

【赤明】

「でも、不思議ね。」

それが少し嬉しいのよ」

【赤明】

「これが、好きって事なのかしら」

【陽】

「赤明……」

だから、そんな可愛い事を言うなつての。

【橙歌】

「うわー、今のは間違いなく惚気られたよね」

【緑璃】

「そつだねえ」

【湖珠】

「今のと比べたら、さっきのなんて惚気に入らないかもだよ」

【陽】

「お前ら、うるさいっ」

この日のお茶会は、こんな感じでたつぷりといじられてしまった。

六月二十三日

< 6月23日(火) >

< 学生寮 食堂 >

黄牙を起こして食堂に行くと、朝からアルカンシエルフルメンバ
ーだった。

【黄牙】

「おー、すげえ集まってんなあ」

【陽】

「……………」

もう、言葉も出ない。

昨日あれだけ騒いだのに、まだ足りないのか？

【紫苑】

「あの、信じてもらえないかもしれませんが、今日は偶然なんで
す」

おずおずと、紫苑が申し出てくる。

【緑璃】

「ほんとだよ。」

偶々、みんなの起きて来た時間が噛み合っちゃったみたいで」

【緑璃】

「最初は、揃ったら面白いねって笑ってたんだけど……」

【藍叉】

『本当に揃うとは思わなかった』

マジかよ……

【赤明】

「もういいから、ともかく座りましょう。
ここに溜まってても迷惑なだけだわ」

気がつくと、人の流れを塞ぎ止めた上に、注目を浴びてしまっていた。

【陽】

「ん、仕方ないな」

……

食堂に入って、席を探す。

運がいいのか悪いのか、丸々1つ空いたテーブルがあって、全員が座ることができた。

【緑璃】

「じゃあみんな、手を合わせてね。いただきます」

【みんな】

「いただきます」

そんな小学生みたいな挨拶をして、朝食を食べ始めた。

【黄牙】

「なあ、陽。数学の宿題やったか？」

【陽】

「やったけど」

【黄牙】

「マジかよ……。今日はやってないかと思ってたぜ」

【陽】

「何でだよ？」

【黄牙】

「あれだけ騒いだら、宿題の事なんか飛んじまうだろ」

【陽】

「飛ぶかよ……」

【紫苑】

「私もやりましたけど」

【緑璃】

「私はお茶会に行く前にやっちゃったよ？」

【藍叉】

『湖珠とした』

【湖珠】

「ねー」

【橙歌】

「僕はやってない。赤明、後で見せてよ」

【赤明】

「もう、そんなのじゃ力がつかないわよ」

さすがに気を使っているのか、それとも単純にもうネタが無いだけなのか。

俺と赤明の関係について何か言われることも無く、「ごく普通の会話が飛び交う。」

【湖珠】

「あ、そう言えば、アイちゃんは城崎君達に聞きたい事があったんだよね？」

……それもここまでか。

【陽】

「俺達ってのは、俺と赤明か？」

【藍叉】

『ヤー 忘れてた』

【陽】

「そのまま忘れてくれたら良かったのに……」

夏原め、余計な事を言ってくれたな。

【陽】

「で、何が聞きたいんだ？」

藍又がスケッチブックに書き込み、俺の方に向けた。

【藍又】

『キスってどんな感じだった？』

【陽】

「はあっ!？」

【赤明】

「き、キス!？」

素っ頓狂な声を上げて、赤明と顔を見合わせる。

キスカ……。

思わず、赤明の唇に視線が向いてしまう。

【赤明】

「あ……」

それに気づいた赤明が、頬を染めて俯く。

【紫苑】

「まだみたいですわね」

【湖珠】

「反応が初々しいんだよ」

くそう、さらし者の気分だ。

【陽】

「何でそんな事聞いたんだよ!」

【藍叉】

『告白した時にしたと思った』

【陽】

「告白した時って……」

あの時は、赤明が好きって言うてくれた直後から大泣きしてしま
ったからな。

【陽】

「キスどころじゃ無かったんだよ」

【緑璃】

「えええええっ!」

がたん、と椅子を蹴っ飛ばす勢いで先輩が驚く。

【陽】

「ど、どうしました?」

【緑璃】

「キスどころじゃないって、そんな進んだ関係になっちゃったの！？」

【陽】

「はい？」

【緑璃】

「大人の階段上っちゃったんだね……」

あれ、何か物凄い勘違いされてないか？

【紫苑】

「キスもまだなのに、その先だなんて……信じられません……」

やっぱり、されてるよ！

【陽】

「いや、先輩のそれはもう、とんでもなく間違ってますから！」

【緑璃】

「え？」

【陽】

「キスしてる状況じゃなかったって意味ですから！
ほら、赤明も固まってないで何か言えよ！」

【赤明】

「え、でも……恥ずかしくて……」

【橙歌】

「恥ずかしい!？」

【藍叉】
『やっぱり 大人の階段?』

【陽】
「だから違う！」

赤明、このまま勘違いさせとく方が恥ずかしいって、わかるだろ
!？」

【赤明】
「そ、そうね」

【赤明】
「あの、キスどころじゃないって言うのは、
その……私が、嬉しくて泣いてしまったので……」

【緑璃】
「あ、そ、そうだったんだ……」

【緑璃】
「ごめんね、変に勘違いしちゃって」

【赤明】
「いえ、わかっていたただければ」

何とか誤解は解けたか。

あー、焦った……。

【紫苑】

「新嶋先輩、嬉し泣きしてしまうほど、城崎先輩の事が好きだったんですか」

【湖珠】

「可愛らしいんだよ」

【橙歌】

「でもさあ……そんな風には見えないよね」

【陽】

「散々からかつといて、今更それかよ」

【橙歌】

「だってさ、よく考えたら、2人の恋人っぽいところなんて見てないもん」

【陽】

「恋人っぽいところが何かは知らんが、人に見せるものじゃないと思っぞ」

人前でいちゃつけてのか？

どこのバカップルだよ。

【赤明】

「そうよ。私と城崎君は」

【橙歌】

「はいそー」

赤明の言葉を遮って、びしっと赤明を指差す。

【赤明】

「え？」

【橙歌】

「いつまで『城崎君』って呼んでるのさ。
恋人なら、名前で呼ぶものじゃん」

【赤明】

「え、ええ!？」

【黄牙】

「そんなに盛大に驚く所か？」

【赤明】

「お、驚くわよ。」

大体、付き合ってるから名前でなんて、そんな短絡的な」

【陽】

「あー、でも、橙歌は名前なんだよな……」

どうせなら、俺も名前で呼んでもらいたいかもしれない。

【赤明】

「城崎君……その、呼んで欲しいの？」

【陽】

「ん、まあ、呼ばれたら嬉しいな」

【赤明】

「そ、そう」

【湖珠】

「城崎君もこう言ってるんだし、呼んでみるべきなんだよ」

【藍叉】

『Call him 陽』

【赤明】

「わ、わかったわ。」

「呼べばいいんでしょう」

【陽】

「いや、そんな無理して呼ぶ事はないんだけど」

【赤明】

「む、むむ無理なんかしていないわ」

「どう見てもいっばいっばいなんだけど……」

【赤明】

「だって、私たちは……恋人、でしょう？」

【陽】

「ん、まあな」

【赤明】

「それなら、名前で呼んだっておかしくない。いいえ、むしろ普通

なのよ！」

【陽】

「そ、そうだな」

赤明のやつ、なんか変なテンションになってるなあ……

【赤明】

「すー、はー」

赤明が大きく深呼吸する。

【赤明】

「い、行くわよ」

【陽】

「あ、ああ」

な、何か俺まで緊張してきた。

【赤明】

「……………」

【陽】

「……………」

【赤明】

「……………」

【赤明】

「呼べないわよ、こんなにギャラリーがいるのに！」

赤明は、アルカンシエルメンバーを指差して叫び。

【陽】

「あ」

っと言う間に、逃げていつてしまった。

【陽】

「赤明ー？」

俺一人残して、どうしろって言うんだよー。

結局呼んでもらえなかったし……

【黄牙】

「その、何だ、残念だったな」

黄牙にぼん、と肩を叩かれた。

【陽】

「はあー……」

慰めるくらいなら、俺たち2人をそつとしいてくれよ……

<学園 中庭>

【陽】
「で、今日も二二か」

昨日に続き、今日も昼食は中庭だった。

橙歌達の目をかいくぐってここに来るのにも苦労したなあ。

【赤明】
「ほとぼりが冷めるまでは、こうした方がいいわよ」

【陽】
「ん、そうだな」

からかわれるのも嬉し恥ずかしだけど、そろそろ飽きたし。

それに、赤明のためにはこの方がいいかもしれない。

俺だけしか事情を知らない以上、こっちの方がフォローをしやす
い。

もしも、朝緋の記憶が見えた時、

俺が事情を知っていても、みんながいたんじゃ急に逃げ出すのは
不自然だ。

もちろん、見えた時は無理やり引っ張ってでも記憶とずらしてや
るつもりだけど、

みんなの前だと、赤明が俺にも隠しかねないからな。

当分は2人きりでいるべきだろう。

こうして考えてみると、このタイミングで赤明と恋人になったのは僥倖だったな。

【陽】

「ま、のんびりしてるとするか」

【赤明】

「……………」

【陽】

「赤明？」

【赤明】

「それが……………そうもいかないみたい」

硬い声。

中空に焦点を結ぶ瞳。

【陽】

「朝鮮の記憶か？」

過去を、見ているのか。

【赤明】

「……………ええ。2日続けて、同じ場所で見えるなんて」

【陽】

「今まで無かったのか？
最近増えてたって言ってただろ？」

【赤明】
「増えたって言っても、こんな事は……」

赤明の声が震えている。

また見えたって事が、かなりの衝撃になったみたいだ。

だから、俺が支えてやらないといけないんだろ。

そうでないなら、話を聞いた意味が無い。

【陽】
「行こう」

ベンチから立ち上がり、赤明に手を差し出す。

【赤明】
「城崎君……ええ、そうね」

赤明が俺の手を握る。

【陽】
「よっ、と」

その手を引っ張って、ベンチから引き起こす。

【陽】

「3階に行ったのでいいか？」

確認すると、赤明が頷く。

【陽】

「よし。行くぞ」

赤明の手を引いて、中庭を走り出した。

<学園 廊下>

一気に3階まで駆け上がる。

【陽】

「ここまで来れば、大丈夫か……？」

赤明が窓に近づいて、外を見下ろす。

【赤明】

「消えてる……」

【陽】

「ふう、何とかだったか」

【赤明】

「ええ……でも、どうして……」

【陽】

「同じ場所で見えたのか、か？ 単なる偶然じゃないのか？」

【赤明】

「そうかもしれないけれど……」

赤明は浮かない顔だ。

確かに、朝緋も赤明も自由に動いている以上、同じ場所で連続で遭遇するのは珍しい。

朝緋が習慣的に中庭の位置に来ていたとも考えられるけど、

それなら、学食に移動する時なんかに今まででも重なっていた可能性は高いわけで、

つまり、見える頻度が上がってる事の証明になるって事だ。

それに、そうじゃないのなら、それが何を表すのかはわからないし……

でも

【陽】

「そんなに心配するなよ」

なるべく、明るく聞こえるように言う。

わからない事を悪い方にはかり考えても、仕方が無い。

今は、赤明を元気付けてやらないと。

【陽】

「俺がいるだろ？」

場所を変えるのなんて、簡単だ」

消し去るには、たったそれだけでいい。

【陽】

「俺が手を引いて行くから。

だから、心配するな」

ずっと一人で抱えていた赤明。

俺一人だけだとしても、やっと話す事ができたんだから、もっと頼ってくれればいいんだ。

【赤明】

「そうね。城崎君が、いてくれるもの。

それなら、大丈夫よね」

【陽】

「ああ、大丈夫に決まってる」

俺は、力強く頷いた。

まだ、完全に何とかする方法はわからないけど、対処療法的に手を打つことはできる。

相手は、所詮過ぎ去った過去の幻影だ。

だから、俺が赤明の心を支えてやればいい。

俺は、この時まで、そんな風に思っていた。

<学園 2年教室>

放課後になった。

教室が一気に騒がしくなる。

俺は荷物をまとめて、赤明の席へ向かう。

【陽】

「赤明、帰ろう」

【赤明】

「そうね」

赤明が立ち上がる。

【赤明】

「あ、そうだったわ」

【陽】

「ん？」

【赤明】

「ちょっと商店街に行きたいのだけど、付き合ってくれる？」

【陽】
「ん、もちろん」

できるだけ赤明の側にいるって決めたからな。

商店街の辺りは、朝緋の行動範囲だろうし、1人にはさせられない。
い。

ま、もう今日は見えないだろうけど。

【陽】
「じゃ、行くか」

【赤明】
「ええ」

<商店街>

【陽】
「それで、何を買った？」

【赤明】
「お茶よ。昨日のお茶会で使い切ってしまったのよ」

【陽】
「ああ、あれで。最近お茶会も多かったしな」

回数も人数も大幅に増えてるんだ。

そりゃお茶もなくなるか。

そんな話をしながら、前にお茶を買った店までやって来た。

【赤明】

「今日も、選ぶの手伝ってもらってもいいかしら？」

【陽】

「ああ」

店内に入って、お茶のコーナーに向かう。

【陽】

「今日はどんなのにするんだ？」

【赤明】

「どれでも構わないわよ。城崎君の飲みたいのを選んで」

【陽】

「そっちなぁ……」

前は橙歌向けで面白さ優先だったけど、今回は普通のも必要だろ
うな。

【陽】

「1つは普通のティーバッグにするか」

【赤明】

「それがいいわね」

【陽】

「と言っても、色々あるんだけどな」

【赤明】

「だから、好きに選べばいいのよ」

【陽】

「ん、そう言われてもな」

味がわかってる訳でもないし、適当に選ぶか。

【陽】

「これにしよう。アッサム」

【赤明】

「アッサムね。」

確か、ミルクティーにするといいのだったかしら

【陽】

「へえ。詳しいな」

【赤明】

「にわか仕込みよ。あまりあてにしないで」

【陽】

「ん、了解」

【赤明】

「もう1つ選びましょう。また、すぐに無くなりそうだな」

【陽】

「そうだな。じゃあ……」

正直、普通の紅茶が2つあっても違いなんてイマイチわからない気がするんだよな。

もう1個は、橙歌に選んだ時の感覚で行こう。

【陽】

「それじゃこれだ。キャラメルミルクティー」

【赤明】

「ミルクティーが被ってるわよ」

【陽】

「アッサムはストレートで飲む事にしよう。素材の味を知らないとな」

【赤明】

「そついうものかしら？」

【陽】

「そついう事にしてお」

多分、言わないとミルクティー向けだなんて誰も気づかないだろうし。

【赤明】

「それじゃあ、そうしましょうか」

レジを通して、会計を済ませる。

【陽】

「持つよ」

【赤明】

「それじゃあ、お願いするわ」

買い物袋を手に店を出る。

そこで突然、赤明が立ち止まった。

【赤明】

「……………うそ」

呆然と、赤明が呟く。

それで、俺も自体を把握した。

【陽】

「また、なのか？」

何でだ？

今日はもう2回目だぞ？

一体、何が起きてるって言うんだ……………。

【赤明】

「城崎君……」

「すぐるような目で、赤明が俺を見ていた。」

「そっか、俺がいるから大丈夫って言ったんじゃないか。」

「しっかりしろ。」

「何が起こっているにしても、考えるのは後だ。」

「今は、この状況を何とかする！」

【陽】

「赤明、過去の風景で、道が無いのはどっちだ？」

「商店街の地面はタイル張りだ。」

「過去の地面とは、混ざらないはず。」

【赤明】

「あ、あっちよ」

【陽】

「ん、なら行くぞっ」

「赤明の手を取って走り出す。」

「朝緋が道の無い所をわざわざ選んで歩く奇特な人間じゃないのな」

道が無い方向に行けば、過去に朝緋が通った可能性は低い。
これで、1番手っ取り早く、位置をずらす事ができる筈だ。

【赤明】

「城崎君、そっちに道が！」

【陽】

「無いのは!?!」

【赤明】

「えっと、あっちよ！」

あっちって言われても、

【陽】

「現代でも道じゃないっての!」

そこは八百屋だ。

あ、待てよ。

【陽】

「その路地を抜けるぞ」

【赤明】

「わかったわ」

八百屋の側の細い路地へ突っ込む。

そして、そこを一気に走り抜けた。

<大通り>

路地を抜けると、

商店街のアーケードを突き抜けて、駅前的大通りに出た。

結構距離は離れたと思うけど。

【陽】

「どうだ!？」

【赤明】

「そんな……どうして……」

【陽】

「赤明、どうした？」

まさか、消えてないのか？

これだけの距離を移動したのに？

【赤明】

「消えて、無い……いいえ、ついて来てる……」

【陽】

「何だつて？」

【赤明】

「ついて来てるのよ！ 私に！」

真っ青な顔で、赤明が叫ぶ。

ついて来てる？

何でだ？

もつずらすのに十分な距離は稼いだはずだ。

高さほどの絶対性は無いけど、未だ重なってるなんて思えない。

どつする……？

学園の3階まで走るか？

【赤明】

「嫌……来ないで……っ」

赤明が俺の手を振りほどいて走り出す。

【陽】

「あ、馬鹿っ」

そっちは川だ。

学園と反対なんだつてのに。

【陽】

「くそっ」

慌てて赤明を追いかける。

<橋>

川にかかる橋の手前で、赤明に追いついた。

【陽】

「赤明っ。どこに行くつもりだ!？」

【赤明】

「わからないわよっ、そんな事!」

赤明はどんと走って行って、橋を渡ってしまっ。

<大通り2>

このまま走られたんじゃ、埒が明かないか!

【陽】

「赤明っ」

肩に手をかけて、強引に止める。

【陽】

「ちよっと落ち着けて！」

【赤明】

「落ち着ける訳が無いでしょう!？」

赤明が勢いよく振り返る。

【赤明】

「え……」

赤明が信じられないと言わんばかりに目を瞬かせる。

【陽】

「どうした？」

【赤明】

「わからないわ……。でも、橋の向こう側で止まってるの」

【陽】

「え？」

思わず振り返る。

が、当然俺には何も見えない。

【陽】

「止まってるのか？」

消えたんじゃないか？

【赤明】

「ええ……確かに、止まってるわ」

どうしてだ？

そいつらは赤明を追いかけていたんじゃないのか？

まさか、橋の向こう側までしか行けない行動制限みたいな物があるのか？

くそ、わからない事だらけだ。

【陽】

「ここは、一応安全地帯って事なのか？」

【赤明】

「わからない……あ……」

【陽】

「ん、どうした？」

【赤明】

「今、消えたわ」

【陽】

「消えた……」

消えてくれるのはありがたいけど、ここの不測の事態が続くと、かえって不気味だ。

【赤明】

「は……あ……」

赤明がその場に崩れ落ちる。

【陽】

「赤明！？ 大丈夫か？」

【赤明】

「大丈夫よ……」。

安心したら、気が抜けてしまったみたい……」

【陽】

「そうか……」

【陽】

「少し休んで、それから寮に戻ろう」

【赤明】

「ええ」

赤明の側に立って、周りを見回す。

夕焼けの空、行きかう人々。

いつもと変わらない、普通の風景だった。

それでも、そのどこかに見えないだけで、実際には得体の知れない何かがある。

そう思つと、その風景にさえ、ぞつとするものを感じずにはいられなかった。

<学生寮 213号室>

ベッドの上に、体を投げ出す。

やたらと周囲を警戒しながら帰って来たせいで、やけに疲れた……

【陽】

「はぁ……」

何がどうなってるんだろう。

今までは、赤明に見えていたのは、朝緋の記憶でしかなかった。

だから、過去の朝緋と現在の赤明の、位置が大きく離れると、記憶は見えなくなった。

でも、今日は、それが違った。

赤明の話から判断するしかないから、わからない部分は多いけど、

今日見えた過去の人は、赤明を追いかけて来たらしい。

何かが変わっている。

それも、多分悪い方向に。

ただ見えているのと、追いかけるのとでは、赤明の精神的な負担もずいぶん違うはずだ。

それに、よく考えると、追いかけて来る事自体がありえない話だ。相手は過去の記憶のはずなのに、どうして追いかけて来る事ができるんだ？

【陽】

「……俺に何ができる？」

いてくれるだけで良いと、赤明は言った。

手を引いて、走ることもできる。

でも、それだけじゃ、駄目なんだ。

赤明が何を見て怯えているのかもわからず、

時間と記憶の壁に隔てられて、俺は、結局大して力になんてなれて無い。

もっと他に、俺にできる事は……

……
……

……

【赤明】

「……君、城崎君」

誰かに揺すられている。

【陽】

「あれ……」

目が覚めた。

考えてる間に、寝てしまったのか。

【赤明】

「目が覚めた？」

赤明が俺の顔を覗き込んでいる。

よかった、割と元気そうだ。

【陽】

「赤明？」

「何でここに？」

「ここ、俺の部屋だよな？」

【赤明】

「無用心よ。寝るのなら鍵を閉めない」と

鍵が開きっぱなしだったのか。

【陽】

「ん、寝るつもりはなかったんだ」

【赤明】

「でも、寝てたわよ」

【陽】

「確かに、そうだな」

ベッドから体を起こして、ベッドの縁に腰掛ける。

【陽】

「ま、座れよ」

【赤明】

「ええ」

赤明が俺の隣に腰を下ろす。

2人分の体重を受けて、ベッドが小さく軋んだ音を立てた。

【陽】

「赤明……その、大丈夫か？」

【赤明】

「え？」

【陽】

「放課後の、あれ」

【赤明】

「あ……」

【赤明】

「ええ、大丈夫よ。心配しないで」

【陽】

「でも……」

【赤明】

「いいのよ」

そう言って、赤明は笑った。

あの、諦観に似た笑みを浮かべる。

赤明にとっては、同じなんだろうか。

今日の出来事も、いつも見えている風景も、

すっかり諦めて、受け入れてしまっているから。

【赤明】

「その話はしないで。せつかく、考えなくてもいい時間なのよ」

【陽】

「……ん、そうだな」

この寮のあった場所は、過去に2階以上の高さの建物は無かった。だから、この部屋にいれば、あの記憶を見る事は無い。

外に出れば遭遇してしまう記憶に、俺はどうする事もできないから、

側にと望む赤明の隣にしよう。

少なくとも、今こつやっている事が赤明の支えになっているのは間違いないはずだから。

赤明の手に、手を重ねてぎゅっと握る。

【陽】

「側にいるよ」

【赤明】

「ありがとう……陽」

聞きなれた言葉が、違和感を伴って俺を呼んだ。

【陽】

「あ……今」

【赤明】

「嬉しかった？」

そっか。

朝、俺が、呼んでくれたら嬉しいって言ったから。

確かに嬉しかったけど、でも、せっかくだから、

【陽】

「不意打ちだったから、よくわからなかったな」

【赤明】

「……仕方ないわね」

【赤明】

「陽」

【陽】

「ああ」

やっぱり、多少の違和感があるな。

【陽】

「呼ばれなれない感じだよ」

【赤明】

「それじゃあ……もっと、呼ぶ？」

【陽】

「え……」

赤明を見る。

何となく、期待に満ちた表情をしているように見えた。

もしかして、かなり呼びたがってるのか？

【陽】

「そうだな。慣れないといけないからな」

【赤明】

「ええ」

赤明が頷く。

そして

【赤明】

「陽、陽、陽、陽、陽」

呼びかける声で、

悪戯っぽい声で、

嬉しそうな声で、

不機嫌そうな声で、

甘えるみみたいな声で、

赤明が俺を呼ぶ。

声と同じように色を変える瞳、俺を見つめている事だけは変わらない。

まっすぐに見つめ合う。

その瞳から、目を離せなくなった。

【赤明】

「陽、陽、陽」

【陽】

「赤明」

さえぎって、呼んだ声。

多分、隠し切れない熱に掠れていた。

【赤明】

「陽」

初めて聞く声だった。

艶を帯びた、女の声。

【赤明】

「よ……んっ」

2度目の声を、熱い吐息と一緒に塞いだ。

柔らかくて、温かい。

初めて触れた唇の感触に、そんな事を思った。

【陽】

「ん……」

名残惜しい感触から、唇を離す。

【赤明】

「陽……」

すぐに、どちらからともなく、再びキスを交わす。

胸の奥に、赤明への想いが溢れるのがわかる。

こんなの、言葉を交わすだけじゃ得られない。

だから、恋人はキスをするのかもしれない。

赤明を抱きしめたくなくて、手を動かす。

【赤明】

「あっ」

いつの間にか、その手をしっかり赤明が握っていた。

手を引かれて体勢を崩した赤明がベッドに倒れる。

シーツの上に横たわる赤明は、驚いた表情で。

それでも、握り締めた手は離れなかった。

【陽】

「赤明」

覆いかぶさるように、赤明にキスをする。

【赤明】

「ん……ちゅ、ちゅ……」

唇を離して、頬へと滑らせる。

そして、頬から赤明の首筋へとキスを落とす。

【赤明】

「ひゃあんっ」

びくん、と赤明が身を竦ませる。

【陽】

「赤明……」

首筋から顔を上げる。

今の俺は、凄い顔をしてるんじゃないだろうか。

【陽】

「赤明……いい、か？」

【赤明】

「あ……」

主語のない言葉だったけど、赤明はその意味を察した。

上気した顔をさらに赤く染めて、赤明が目を伏せる。

【赤明】

「……1人だと、ちっとも大丈夫じゃないのよ」

一瞬、何の話だろうと思って、すぐについさっきの話だと理解する。

【赤明】

「陽がいるせいで、弱くなってしまったわ」

赤明が、腕を伸ばす。

差し出された手が、俺の頬に触れた。

【赤明】

「きつと、部屋に帰ったら怖くて眠れないから」

【赤明】

「今日はずっと、あなたから離れないわ」

【陽】

「ああ、離さないよ」

俺は、怖がりな少女の小さく震える体を、優しく抱きしめた。

.....

.....

行為の熱も抜けきらないまま、俺たちは気だるさに身をゆだねていた。

赤明は、シーツを身に纏って、俺の胸に頭を乗せている。

【赤明】

「ねえ.....」

【陽】

「ん？」

視線を向けると、恥ずかしいそうに目を伏せる。

【赤明】

「今日は、ここに泊まってもいい？」

【陽】

「ずっと離れないんだろ？」

【赤明】

「そうだったわね.....」

赤明は、そう言つと目を閉じる。

【陽】

「眠いのか？」

【赤明】

「少しだけ。」

「疲れてしまったわ」

【陽】

「まあなあ……」

肉体的にも結構な運動だったし、

精神的にも余裕なんて無かったからな……

【陽】

「このまま寝るか？」

【赤明】

「シャワー浴びたいわ」

【陽】

「明日でいいだろ」

今は、赤明の体を手放したくなかった。

【赤明】

「早起きする自信がないわ」

【陽】

「ん、俺もだ……」

【赤明】

「困ったわね」

【陽】

「俺たちが寝過ごしたら4人遅刻するからな」

1回起きて、色々とやった方がいい気がするけど……

とてもそんな気がしない。

【陽】

「明日考える事にしよう」

正直、自分が何を言っているのかも怪しい。

【赤明】

「……そうね」

赤明の声も、何だかぼんやりとしている。

【陽】

「そうそう」

何がそうなのかも良くわからないまま、赤明の体を抱きしめて、

俺の意識は眠りに引き込まれて行った。

六月二十四日

< 6月24日(水) >
< 学生寮 213号室 >

何かの音で、ゆっくりと意識が覚醒する。

これは、足音？

誰かいるのか……？

足音が近づいて来て、誰かが俺の顔を覗き込む。

【赤明】

「陽……まだ寝てるのね。」

えっと、目覚まし時計は……これでいいわね」

赤明の気配が離れて行く。

と、思うと、再び戻って来た。

【赤明】

「まだ、寝てるわよね……？」

【赤明】

「……ん、ちゅ」

唇に柔らかな感触が触れる。

【赤明】

「っ、もう、なにやってるのかしら」

早足に、足音が去って行き、扉が開閉する音がした。

【陽】

「……………っあ」

今ので完璧に目が覚めた。

時計を見ると、目覚ましが鳴るまで10分くらいある。

それまでに、このにやけた顔を戻さないと……

<学園 2年教室>

【赤明】

「……………」

授業中、赤明の方を見てみると、浮かない顔で外を眺めていた。

何か見えているのか、警戒しているだけなのか、俺には判断がつかない。

でも、そんなに外ばかり見ていると、また怒られる

【教師】

「「らあ！」

やっぱり！

【教師】

「城崎！ちゃんと前を見ないか！」

【陽】

「はいつ、すみません！」

俺だったよ……。

まあ、赤明が怒られなかっただけよしとするか。

……

……

……

授業が終わる。

さて、昼休みになったわけだけど、どうしようかな。

【陽】

「赤明」

窓の外を見ている赤明に声をかける。

【赤明】

「どうしたの？」

【陽】

「どうしたって言うか、飯の時間だけど。見えてるのか？」

【赤明】

「いいえ。今は見えていないわ」

【陽】

「ん、そうか」

取り合えず一安心だな。

【陽】

「で、どうする？」

中庭は止めておくか？」

2日も続けて中庭で見たんだし、3日目もあるかもしれない。

【赤明】

「そうね……できるなら、1階には下りたくないわ」

1階に下りるって事は、朝緋と重なる可能性が高くなるって事だからな。

【陽】

「それじゃ、教室で食べるか。俺が適当に買ってくるよ」

【赤明】

「ここも、そんなに安心はできないのだけれどね」

【陽】

「何で？」

あ、そっか、ここには櫓があっただけ」

2階の高さだと、重なる時もあるのか。

赤明の話だと、朝緋は頻繁に櫓に上って来てたらしいし。

【陽】

「そうすると、もっと上か」

【赤明】

「でも、それじゃあ食べる所がないわ」

【陽】

「そうなんだよな」

緑璃先輩の所にも押しかけるか。

でも、普通は食堂か学食に行ってるだろうし……

どこか、いい場所は……

【陽】

「あ、そっだ」

あそこがあったな。

【陽】

「心当たりがある。そこに行こう」

【赤明】

「どこなの？」

【陽】

「それは行ってからの楽しみだ」

<学園 階段>

2階から3階に上がり、そこからさらに階段を上がる。

そこにある扉の取っ手を握り、回してみる。

よし、やっぱり鍵はかかってないな。

軋む扉を開け、屋上に出る。

<学園 屋上>

【陽】

「ここならいいだろ」

【赤明】

「屋上って出られたのね……。知らなかったわ」

【陽】

「俺も前に偶然知っただけだな。」

じつは、ここの扉の鍵って壊れてるんだよ」

しかも、一応立ち入り禁止って事になっているから、屋上に出ようって人は滅多にいない。

知っている人は知ってるが、知らない人は知らない、穴場スポットだ。

【赤明】

「そうだったの。全然知らなかったわ」

【陽】

「屋上に出る事を想定してないから、居心地はイマイチだろうけどな」

ベンチがあったりして、環境の整っている中庭とは大違いだ。

【赤明】

「今は、居心地よりも安心していられるって事が重要だわ」

【陽】

「そっちな」

とりあえず、安心第一か。

さてと、昼飯を調達しないとな。

【陽】

「それじゃ、パンを買って来るよ。リクエストは？」

【赤明】

「お任せするわ」

【陽】

「了解。じゃ、ちょっと待っていてくれ」

【赤明】

「ええ。お願いね」

赤明に見送られて屋上を後にする。

<学園 階段>

【陽】

「これで、何事も無いといいんだけどな」

屋上は、学園の中の行ける場所で1番高い所だ。

その高さを考えると、その場所で朝緋と重なる事は、まず考えられない。

今までなら、それで安心だったけど、

この数日は、赤明でさえ予想し得ない事が続いている。

もし、屋上からでも、記憶が見えるようなら、それは一体、何が起こってるって事を意味するんだろ。

<学園 2年教室>

放課後になった。

【陽】

「赤明、帰れるか？」

【赤明】

「ちよっと待って、確認するわ」

窓からグラウンドを見下ろす。

【赤明】

「大丈夫みたい」

【陽】

「ん、なら、さっさと帰ろう」

昼休みには記憶は見えなかった。

つまり、見える条件は前と変わらない可能性が高いつて事だ。

それなら、寮の2階より上は安全地帯のはずだ。

見えてないなら、今のうちに早く寮に帰ってしまおう。

【赤明】
「そうね。急ぎましよう」

俺たちは、足早に教室を出て、靴箱へと向かった。

<通学路>

【赤明】

「陽？」

何をきよろきよろしてるの？」

【陽】

「いや、何となく……」

どうせ俺には見えないんだってわかかっていても、つい見回してしまっ。

いかな、かなり拳動不審だ。

朝緋の記憶は、俺には何ら影響しないし、俺が認識することすらできない。

俺個人にとっては、存在しないも同然のものを警戒するなんて、滑稽な話に思われるんだろうか。

でも、赤明がそれを見ているなら、俺が赤明を肯定する限りそれは実在する存在なんだ。

【赤明】
「あ……」

赤明が俺の手を握る。

【赤明】
「来たわ」

【陽】
「ん……」

やっぱり俺には何も見えない。

【陽】
「どっちだ？」

【赤明】
「前から来てるわ」

寮の方向からか……

寮までは後100メートルも無いけど、そっちから来られたんじやな。

【陽】
「どっつする？」

「一旦学園に戻って、上上がるか？」

そこで消えるのを待って、改めて、寮に帰るって作戦だ。

【赤明】

「そうね……………いいえ」

【陽】

「え？」

【赤明】

「……………突っ切りましょう」

固い表情で赤明が決断する。

【陽】

「本気か？」

【赤明】

「ここからなら、学園より寮の方が近いわ」

【陽】

「でも、突っ切るって……………大丈夫なのか？」

【赤明】

「初めてじゃないのよ。」

人を突き抜けるのは気持ち悪いけれど、

この際贅沢は言ってられないわ」

そうだったな。

記憶は見えても触れられない、立体映像みたいな物だ。

相手が人だろうと、突っ込めば、その体を貫通して行ける。

【陽】

「わかった」

赤明の手を俺から強く握る。

俺が、この手を引いて行くんだ。

【陽】

「行くぞ」

赤明が頷き返す。

俺は、赤明の手を引いて走り出した。

赤明の前に立って、学生の間道を見つけて走る。

この先に、見えない何かがあると思うと、何となく不気味だけど、
一気に抜けてやる！

寮まで、大体50メートル。

帰宅中の学生の固まりを抜けて、視界が広がる。

自然に足も速まった。

残り40……30……20……

【赤明】

「きゃあっ！」

突然の悲鳴と共に、繋いだ手が離れた。

【陽】

「赤明っ!？」

スピード上げすぎたか？

振り返る。

【赤明】

「あ……」

赤明は、呆然と目を見開いて、地面に尻餅をついていた。

尻餅だって？

【陽】

「そんな、まさか……」

手を引かれて走っていた人間が転んだ時、普通は尻餅なんかつかない。

何かに躓いたりしたのなら、前につんのめって、自然に手や膝をつくはずだ。

手を引かれて走ってる人間が尻餅をつくのは、前にある何かにぶつかった時だ。

でも、赤明は俺にぶつかってはいいない。

俺の真後ろを走っていた赤明が、俺以外にぶつかるものがあるとするれば、

それは、朝鮮の記憶だけだ。

また、何かが変わった？

どうなってるんだよ！

【陽】

「赤明、立てるか？」

赤明に手を差し出す。

何にしても、今は逃げないと。

【赤明】

「あ……いや……来ないで」

いやいやと首を振って、赤明が後ずさる。

【陽】

「赤明！　しっかりしろ」

【赤明】

「言わないで……あたしには……私にはっ」

【陽】

「赤明っ」

わからない。

何が起きてるのかさえも、わからない。

こんなに近くにいるのに、俺達の世界は違ってる。

そこにあるものを、俺は知っていて、信じてるのに、どうして!?

赤明と俺と、現実には共有できないって、そういう事なのか!?

嫌だ。

赤明の痛みを、苦しみを、知る事すらできないなんて、そんなのは嫌だ。

赤明に、1人だけで抱えさせるのは嫌だ。

何もできない、無力なのは嫌なんだ。

そこにあるものを信じてるから。

俺は、赤明の見ている世界を、理解したい。

赤明の現実を、見たいんだ!

【那美】

『そのお願い、確かに受け取ったよ』

【陽】

「え？」

今の声は……那美？

【陽】

「っ、何だ!？」

目も眩むほどの閃光が奔る。

俺のポケットから、空に向けて、赤い光が駆け抜ける。

そして、その光は、天空に弾けて消えた。

【陽】

「今のは、一体……」

空から、視線を戻す。

そこには

【陽】

「これは……」

舗装された道路に、不自然に土が混ざり、道沿いの塀を貫通して草木が生えている。

そして、時代劇に出てくる村人のような格好をした何人もの人間

が、座り込んだ赤明の周りに集まってきていた。

見えてる？

【陽】

「見える……」

今の光のおかげなのか？

【村人】

「朝緋様、どうか助けてください……」

【赤明】

「うあ、ごめん、なさい……あたしは……」

【村人】

「朝緋様あ……」

泣き出しそうな顔をした赤明に、その1人が手を伸ばす。

こいつっ！

これを考えるのも、後回しだ。

【陽】

「赤明に、触るな！」

俺の言葉に、村人は何の反応も示さなかった。

だが、振り抜いた拳には、確かな手ごたえが伝わり、村人が地面

にひっくり返る。

お、もしかして、一方的にやりたい放題か？

【陽】

「そうとわかれば……そこどけよ！」

赤明の周りに群がっていく村人達を引き剥がし、押し退け、突き飛ばす。

【陽】

「無事か！？ 赤……り？」

村人を押し退けた先、

そこに、1人の少女が座り込んでいた。

大胆にアレンジされた小袖と緋袴、いわゆる巫女装束に身を包んでいる。

櫛でポニーテールのようにまとめてある髪は、立ち上がれば腰まで届きそうだ。

そして、その2点を除いた年恰好や顔立ちは、驚くほどに赤明に似ていた。

こんな状況でなければ、赤明が妙なコスプレしてると思っただろう。

でも、違う。

彼女がこそが……朝緋。

【朝緋？】

「陽……？」

一体どうして……見えているの？」

【陽】

「え、あ、赤明か？」

【朝緋？】

「え、ええ、そうよ？」

そ、そうか。

見た目は朝緋だけど、中身は赤明……

いや、この景色みたいに、赤明の上に朝緋の外見が重なってるのか。

【赤明】

「どうしたの？」

【陽】

「自分の格好、見てみるよ」

【赤明】

「格好……え、何なの、これ？」

【陽】

「多分だけど、朝緋だ」

【赤明】

「え、ええ!？」

赤明が目を回す。

混乱してるみたいだな。

つて事は、赤明が朝緋の格好になったのも初めてって事なのかな。

ん？ 赤明が朝緋の姿に？

何か引つかかるな……

【赤明】

「ねえ、陽。一体、何がどうなってるの？

あなたも、見えているんでしょう?」

つと、今はそれどころじゃなかったか。

【村人】

「朝緋様」

【村人】

「朝緋様」

【村人】

「朝緋様」

【村人】

「朝緋様」

【赤明】

「よ、陽……」

【陽】

「ああ、見えてる……」

さっき殴り倒した村人達のがっそりと起き上がり、迫って来ていた。

まるで、ゾンビ映画だ。

【陽】

「説明は後だ。今は逃げよう」

【赤明】

「わ、わかったわ」

寮の方は無理だな。

【陽】

「学園の方……も来てるか」

【赤明】

「どっつするの?」

この通学路の出口は両側の道路と、学園の向こうの大通りだけだ。

その両方が潰されてるとなると……こっちしかないか。

【陽】

「赤明、こっちを抜けよう」

通学路に隣接する住宅地を指差す。

【赤明】

「こ、ここを？」

【陽】

「他に無いだろ？」

住宅地は細い道が複雑に入り組んでいる。

俺自身、どこがどう繋がってるのか知らないけど、撒くには都合がいい。

【村人】

「朝緋様あ、何とかして下さいよあ」

【村人】

「腹が減って、仕方ないんです」

【赤明】

「……っ」

訴えかける声を聞いて、赤明が唇を噛む。

【陽】

「行くっ」

俺は、そんな赤明の手を引いて走り始めた。

【赤明】

「あ、やっぱりついて来たわ!」

【陽】

「ん、だろっな……って走るのか!」

【赤明】

「何言ってるのよ、当たり前じゃない!」

【陽】

「そ、そうか……」

ゾンビより厄介だ……

ん、そっぴゃ、ゾンビが走るゾンビ映画もあったなあ。

【赤明】

「陽! どうかしたの!?!」

【陽】

「何でもない! 急ごう!」

……

……

……

それから、どこをどう走ったかわからないけれど、いつの間にか村人の姿はなくなっていた。

【陽】

「ま、撒いたか？」

【赤明】

「た、多分……」

塀の影から首だけ出して様子を伺っていた赤明が言う。

【陽】

「どうにか逃げ切ったか……」

【赤明】

「あら、いつもみたいな時間切れで消えただけかもしれないわよ？」

軽い口調で赤明が言う。

少しは余裕が出てきたみたいだな。

【陽】

「どっちでもいいよ、逃げられたのなら」

【陽】

「さ、寮に帰る……うわぁっ！」

へ、塀から腕え！？

そこから、胴体と頭も出て来る。

こいつ、壁があってもお構いなしかよ！

【陽】

「赤明、まだいた！
逃げるぞ！」

【赤明】

「え、ええ！」

再び走り出す。

【赤明】

「陽！ 壁を抜けられたら、こっちが不利よ！」

向こうは直線で来るのに、こっちが塀に沿って移動してたんじゃ、向こうが有利だ。

【陽】

「わかってる！ 通りに出よう」

広ければいいってもものでもないけど、逃げ場所が多い方がましだ。

<大通り>

【陽】

「どっちに行く？」

正面に商店街のアーケード、左手には川、右手は学園前からの通路に通じている。

【赤明】

「橋はどうかしら」

【陽】

「橋か……」

確かに、昨日はそれで何とかなっただけ……

【陽】

「もう、前は大丈夫だった、は当てにならないぞ」

【赤明】

「でも、他に方法も無いでしょう？」

【陽】

「ん……そうだな」

橋なら、渡って来られても、向こう岸にいくらでも逃げ道はあるか。

【赤明】

「あ！ 来たわ！」

村人達が、道や塀から出て来る。

考えてる時間も惜しいか。

【陽】

「橋だ。行こう」

【赤明】

「ええ」

<大通り2>

一気に橋を駆け抜け、対岸で足を止めた。

【赤明】

「陽、見て」

【陽】

「ああ……」

村人達は、橋の向こう側で立ち止まっていた。

橋を渡れない、は、まだ通用したか。

でも、どうして渡れないんだろう？

それがわかれば、何か解決のヒントが掴めるかもしれないのに……

ま、呪術的な何か絡んでたりするとお手上げだけだな。

【陽】
「橋、か」

【赤明】
「え？ 何？」

【陽】
「ん、何であいつらは橋が渡れないんだろって思ったんだ」

【赤明】
「そうよね……壁は平気で抜けて来るのに」

【陽】
「壁抜けができるのと橋が渡れないのとは関係ないと思うけど……」

いや、待てよ？

壁抜けはできて、橋は渡れない。

これって、もしかして……

よし。明日にでも、確認しておくか。

< 学生寮 213号室 >

【赤明】
「はい、お茶が入ったわ」

【陽】
「ん、サンキュ」

その後、村人は30分程で消え、俺達は何とか寮に戻る事ができた。

赤明にお茶を淹れてもらって、ようやく一息つけた。

【赤明】

「それじゃあ、説明してもらえるかしら？」

どうして、陽にもあれが見えるようになったのか」

そう言えば、後で説明するって言ったっけ。

でも、まずは。

【陽】

「その前に、1ついいか？」

【赤明】

「いいわよ？」

【陽】

「確証はないけど、最近の事の原因がわかった気がするんだ」

【赤明】

「最近の事？」

【陽】

「過去が見える頻度が増えた事から、過去の記憶にぶつかったことまで、だ」

【赤明】

「本当に？ どうして？」

飛びついて来そうな勢いで、赤明が聞いて来る。

【陽】

「多分、赤明と朝緋が近くなってるんじゃないかって」

【赤明】

「どういう事？」

【陽】

「つまりさ、前はあの過去の村人にとっては、赤明と朝緋は別人だったんだ」

だから、赤明が朝緋との位置をずらせば、過去は消えた。

正確には、赤明に見えない所で、朝緋と村人のやりとりがあったんだろう。

【陽】

「でも、それがだんだんと重なって、今は彼らにとって、赤明と朝緋は同一人物なんだと思う」

重なっていった理由はわからない。

単なる時間の経過か、他に何かの理由があるのか。

でも、事実として、赤明と朝緋は同じ存在になった。

だから、赤明が朝緋の姿になって見えただ。

【陽】

「そう考えたら、位置をずらしても追いかけて来た事に説明がつく
だろ？」

多分、今は位置をずらす事には意味が無い。

過去の村人は、今までと変わらず、朝緋を見ているだけなんだ。

【赤明】

「でも、今日だって、結局あの人達は消えたわ」

【陽】

「それは多分、赤明と朝緋がまだ完全に一致してないからだと思う」

【赤明】

「待って、それじゃ……このままだと」

赤明の顔が青ざめる。

その最悪の可能性に気づいたんだろう。

俺も、できるなら気づきたくなかった。

【陽】

「いつか、あの風景は消えなくなるかもしれない」

【赤明】

「そんな……」

何年も、何十年も、消えない過去が現実と重なり続ける。

朝緋の周囲にいた人々が、赤明の側にい続ける。

赤明は、強制的に朝緋の人生と一緒に歩ませられる。

そんな状態で、まともな生活なんて送れるはずが無い。

そして、その日はもう、目の前まで来ているかもしれない。

【陽】

「でも、何とかする。大丈夫だ」

【赤明】

「どうして？」

「どうして大丈夫なんて言えるのよ!？」

赤明が叫ぶ。

そうだな。

普通はこの状況で大丈夫なんて言われても、信じられないよな。

でも、俺にはその確信がある。

【陽】

「それは、『奇跡』があつたからだ」

【赤明】

「『奇跡』……？」

【陽】

「ああ。俺に、赤明が見ているものを見えるようにしてくれた」

【赤明】

「え？」

【陽】

「その、『奇跡』をくれた人が言ったんだ」

【陽】

「これは、俺達が何とかすべき事、何とかできる事なんだって」

切り札の使い所は間違つてないと思う。

これで『奇跡』は打ち止めだから、後は俺が、

いや、俺達でどうにかするしかない。

【赤明】

「『奇跡』が本物だったから、その言葉も本当だってそう言つて？」

【陽】

「ん……それは違うな」

【陽】

「俺は、『奇跡』が起きる事も、その言葉も、両方信じてたんだ」
信じるか信じないか、そのどちらかしか無い。

そうだろ？ 那美。

【赤明】

「……わかったわ」

【陽】

「信じてくれるのか？」

自分で言っておいてあれだけど、結構胡散臭いぞ。

考えようによっちゃ、人の言う事を鵜呑みにしてるだけなんだか
ら。

【赤明】

「ええ、信じるわ」

赤明は迷い無く頷いた。

【赤明】

「その人って、那美でしょう？」

さらっと、とんでもない事を言われた。

【陽】

「何で……？」

個人を特定できるような発言はしてないはずだぞ。

【赤明】

「陽が見えるようになる直前に、赤い光を見たわ。」

あの日の虹と同じ、綺麗な赤い色を」

そう言って、赤明は小さく笑った。

【赤明】

「私達の間で、虹に関係する不思議な人って言ったら、
那美しか考えられないじゃない」

【陽】

「……なるほど」

【赤明】

「だからよ。私にとっても、那美は大切な仲間だから、
信じられるの」

【陽】

「そっか」

【赤明】

「ええ。でも……」

と、赤明は不満げな顔になる。

【赤明】

「少し、妬けるわね。」

陽にそんなに信じられてるなんて」

【陽】

「妬けるって……」

【赤明】

「いつの間にそんなに仲良くなったのかしら」

じーっと、俺を見つめる。

最近わかってきた事だけど、赤明は意外と素直に甘えてくる。

それが何とも言えずに可愛いから困るんだよなあ。

【陽】

「確かに那美は信頼してるけど、俺が好きなのは、赤明だけだよ」

【赤明】

「そ、そう？」

それなら、いいのよ」

ある意味自分で言わせたくせに、恥ずかしそうに赤くなって、体を寄せてくる。

俺は、好きだって想いを込めて、赤明にそっとキスをした。

六月二十五日

< 6月25日(木) >

< 学園 屋上 >

昼休み。

俺達は、昨日に続いて屋上で昼食を食べていた。

【赤明】

「橙歌達、変に思っただけかしら」

【陽】

「変に言うのか、確実に理由は勘違いしてるだろうな」

2人きりになりたいとか、そんな感じに。

まさか、前世の亡霊から逃げてるとは思ってもいないだろう。

【赤明】

「過去と重ならないようにする事に、まだ意味はあるのかしらね」

【陽】

「ん、それは微妙な所だよな……」

位置をずらしても消えない理由が、昨日の仮説通りだとすると、

その逆の、位置が重ならなくても見えるって事も考えられる。

【陽】
「でも、やれるべき事はやっておく方がいいだろ？」

【赤明】
「そうね」

それに、俺の考えが正しければ、

もし見えた時も屋上にいる事は身の安全に働くはずだ。

【陽】
「そうだ、それがあつたな」

確認しようと思つてたの、忘れてた。

【赤明】
「何があつたの？」

赤明が聞いてくるが、今はまだ話せない。

【陽】
「ん、ちよつとな。」

赤明、悪い。俺、図書室に行つて来るよ」

【赤明】
「どつして？」

【陽】
「確認しておきたい事があるんだ。」

昼休みが終わるまでに戻らなかつたら、先に教室に帰ってきてくれ」

【赤明】

「あ、それなら私も一緒に」

【陽】

「駄目だ。図書室は1階だからな」

【赤明】

「あ……そうだったわね」

【陽】

「だから、ここで待っていてくれ」

【赤明】

「わかったわ」

【陽】

「それじゃ、行って来る」

【赤明】

「ええ。行ってらっしゃい」

俺は、屋上を出て、図書室へと向かった。

赤明を1人にしておくのは心配だし、急がないと。

さてと、早速探すか。

貸し出しカウンターの側にある検索端末を操作する。

お、タッチパネルだ。なんか凄い。

この学園、設備は整ってるからなあ。

っと、そんな事は置いておいてと。

何て検索すればいいんだろ。

【陽】

「地図、でやってみるか」

ずらずらと、画面にタイトルが出て来る。

この町の地図みたいなのが見たいんだけど……

町と周辺地図、これでいいか。

えーと、ある場所はB - 11か。

……それ、どこだ？

……

【陽】

「お、あった」

案内板を頼りに、何とかBの棚に辿り着き、目的の本を見つけることができた。

棚から抜いて、ぺらぺらとめくってみる。

何々……隠れた名店、ご当地うどん……違うな。

ぺらぺら。

総合販売店、新規オープン……情報古いなー。

ぺらぺら。

心癒される高台の公園。最寄り駅まで電車で40分、さらに徒歩10分。

これが写真か……へえ綺麗だな……って違う違う！

【陽】

「観光マップが見たいんじゃないよ」

本を棚に戻して、適当に見繕う。

んー……

……

【陽】

「今昔か……今度こそ当たりか？」

手にとっては棚に戻しを繰り返す事数回。

やっとそれらしい本を見つけた。

中を見てみる。

この町の地形について、過去から今に至るまでの情報がまとめてある本だった。

【陽】

「よし、当たりだ」

俺は、内容に真剣に目を通し始めた。

.....

【陽】

「多分、間違ってる、か」

その本に書いてあった事は、俺の考えを裏付けてくれる物だった。

だからって、100%正しいとは限らないけど、多分、正しいはずだ。

これで、対策が1つ増えたな。

【陽】

「一応、借りておくか」

俺は、貸し出しの手続きをするために、図書館のカウンターへと向かった。

<学園 2年教室>

今日は何事も無く、放課後を迎える事ができた。

昨日、嫌な可能性について考えただけに、かなりほっとする。

後は、寮に帰ってしまえば、安全なはずだ。

窓に近づいて、グラウンドを見下ろす。

見えるのは、学生の姿だけだ。

【赤明】

「いないみたいね」

いつの間にか、赤明が隣に来ていた。

【陽】

「みたいだな。今のうちに帰ろう」

【赤明】

「ええ」

<通学路>

校舎を出て、校門を抜けようとした、その時、
視界が一瞬ぶれた。

瞬き1つの間に、世界が変わる。

【陽】

「来たか」

このタイミングでか。

【赤明】

「あ、また……」

【陽】

「ん？ って、うおっ」

赤明の姿が、朝緋の物に変わっていた。

目の前で変わられると、びっくりするな……

【赤明】

「やだ……恥ずかしい」

腕で体を隠そうとする。

まあ、気持ちはわかる。

俺だつて道の真ん中でコスプレもどきはごめんだ。

【陽】

「でも、俺にしか見えないだろ」

周りには生徒が沢山いるが、特に注目されてはいない。

他の人の目には、普通の制服姿に見えるはずだ。

【赤明】

「本当に、見えてないのよね？」

【陽】

「大丈夫だつて。

見えてたら、見世物になつてるだろ」

【赤明】

「そ、そうよね」

【陽】

「今心配するのは、それよりあつちだな」

【赤明】

「……そうね」

話している間に、校門や塀を抜けて記憶の住人達が姿を見せ始めていた。

【陽】

「校門を抜けるのは、無理そうだな」

無理に抜けようとしても、ぶつかってしまつのは実証済みだ。

【赤明】

「どうしましょう……」

【陽】

「校門を抜けられたら良かったんだけどな」

過去の出て来るタイミングが悪くて、学園に閉じ込められてしまつた。

【赤明】

「ええ……。私達も壁抜けできないかしら」

【陽】

「やってみるか？」

無理だと思っけど」

【赤明】

「わかってるわ。」

言ってみただけよ」

【陽】

「心配するなよ。」

俺に考えがある」

【赤明】

「そつなの？」

【陽】

「ああ。任せとけ」

その為に、わざわざ調べたんだからな。

【陽】

「校舎に入ろう」

【赤明】

「校舎に？」

逃げ場が無くなってしまっくんじゃないの？」

【陽】

「大丈夫だ、と思う」

【赤明】

「……わかったわ。行きましょう」

【陽】

「よし」

校舎に向かって、走り出す。

<学園 3階廊下>

校舎の3階まで上がり、そこで足を止めた。

【陽】

「ここまで来れば、大丈夫なはずだ」

【赤明】

「どうして？」

位置をずらしても、もう消えないのよ？」

赤明の姿は、まだ朝緋の格好だ。

それだけで、消えていない事はわかる。

【陽】

「消えはしないけど、逃げられはするんだ」

【赤明】

「どづいう事？」

【陽】

「もう少し待ってたらわかるよ」

【赤明】

「え、ええ。わかったわ」

釈然としない顔で赤明が頷いた。

.....

それから待つ事数分。

【赤明】

「.....来ないわね」

【陽】

「来なかったな。あー、良かった」

かなりほっとした。

【赤明】

「え、自信が無かったの!？」

【陽】

「ん、まあいいじゃないか」

自信はあったけど、あくまで仮説だったからな。

実際にやってみるまでは安心できなかった。

【赤明】

「でも、どうして来なかったの？」

【陽】

「説明するけど、その前に場所を変えよう」

さつきから、横を通る3年生にじろじろ見られてて、居心地が悪い。

【赤明】

「そうね。どこに行くの？」

【陽】

「屋上にしめし」

【赤明】

「わかったわ」

【陽】

「俺はちよつと下を見てくるから、先に行つててくれ」

【赤明】

「下に行つても大丈夫なの？」

【陽】

「どうも、俺は認識されないみたいだから。
危なそうならすぐ戻るよ」

【赤明】

「気をつけてね」

【陽】

「ん、わかつてる」

<学園 2年教室>

俺は、自分の教室に入った。

【陽】

「やっぱりな」

教室の一部に、木組みの足場と手すりが重なっていた。

これが、朝緋が良く上がっていたって言う櫓だろう。

そして、その櫓の上にだけ、数人の村人が立っていた。

これで、もう間違いない。

あいつらは、所詮過去の存在に過ぎないんだ。

<屋上>

教室を見た後、俺は屋上へと上がった。

【陽】

「お待たせ」

【赤明】

「良かった、無事だったのね」

【陽】

「大丈夫って言っただろ」

【陽】

「さて、それじゃ説明しようか」

【赤明】

「ええ」

【陽】

「まあ、そう大層な話じゃないんだ。理屈的には、赤明と朝緋を重ねないようにして、過去が見えないようにしようとしたのと、大して変わらない」

【赤明】

「どついつ事？」

【陽】

「俺達は、今と過去の両方の景色を見てるだろ？で、最近は触れるようになった」

【赤明】

「ええ」

【陽】

「だから、つい、過去の村人も同じだと思ってしまってたんだけど、実際はそうじゃないんだ」

【赤明】

「そうじゃない……」

【陽】

「あいつらには、現代にある物は見えてないし、触れないんだ」

【陽】

「だから、朝緋と赤明が重なるまでは触れられなかったし、俺を認識することもできない」

壁を抜けて来るように見えるのも、向こうからすれば、そこには

そもそも壁が存在しないんだ。

過去の壁にぶつかったら、それを抜ける事はできないだろう。

俺からは向こうが触れるのが例外と言えば例外だけど、

あの奇跡が、赤明の現実を俺に反映させていると思えば、一応頷ける。

【赤明】

「3階まで上がって来られないのは、あたしの時代にはそこに足場が無いから……？」

【陽】

「そういう事。今見てきたけど、2階の櫓の所だけには上がったたよ」

【赤明】

「なら、橋を渡って来なかったのはどうしてなの？」

【陽】

「あの橋ができたのは、結構最近なんだ。

2次大戦後まで、あの場所に橋は無かったらしい」

昼休みに、図書館で調べた成果がこれだ。

【陽】

「下流の方に大回りすると橋があったみたいだけど、なぜかそこには頭が回らないみたいだな」

【赤明】

「私について来るだけなのね」

【陽】

「妙に愚直なんだよ。その辺りが、限界なんだろうな」

過去の彼らは、その事実通りに朝緋に話しかけようとする。

でも、赤明が朝緋と重なってしまったが為に、そこにいるはずの朝緋がいなくなってしまった。

だから、彼らは事実通り再現するために、赤明を追いかける。

でも、その行動を達成するために、何かを考える事はできないんじゃないだろうか。

決められた行動をするだけのプログラムは、たとえ効率の上がる方法だろうと、

自分自身では定められた事以外の行動はできないのと同じ事だ。

【陽】

「ま、要するに安全地帯は結構あるって事だ」

【赤明】

「そうみたいね」

【陽】

「後は、ここでゆっくりして、あれが消えたら寮に帰ろう。」

寮の方は、2階以上が安全なはずだからな」

【赤明】
「ええ」

.....

.....

.....

しばらく時間が過ぎた。

だが、赤明はまだ朝緋の姿のままだ。

つまり、過去はまだ消えていない。

【赤明】

「こんなに長く見えるのは、初めてよ」

【陽】

「ん、そうか.....」

【赤明】

「陽.....もしかして、このまま消えなくなってしまうの.....?」

赤明が不安そうな声を出す。

さつき、安全な場所を見つけた事の喜びは、完全に消え去っていった。

【陽】

「まだ、そうと決まったわけじゃない。悪く考えるな」

赤明を励ますと言うよりは、自分に言い聞かせるような言葉だった。

【赤明】

「……そうね」

【陽】

「ああ」

その時、チャイムの音が学園に響いた。

携帯を取り出して時間を確認する。

【陽】

「まずいな……下校時間だ」

下校時間になれば、鍵をかけられてしまう。

さすがに、もう屋上に立て籠ってるわけにはいかない。

【赤明】

「どうすればいいの……？」

【陽】

「何とかして、寮に帰るしかないけど……」

屋上から下を見下ろすと、校舎の前を人影がうろつろしているの

が見えた。

暗くてよく見えないけれど、多分学生じゃないだろう。

1ヶ所に集まってるように見えるのは、あそこに櫓があるからだろうな。

1番赤明に近づける場所に群がってるんだ。

【赤明】

「ねえ、陽。私を追いかけているのって、あそこにいるので全員だと思っ？」

【陽】

「多分な」

【赤明】

「それなら、裏門から抜けられないかしら？」

【陽】

「ん、裏門か……」

裏門は校舎の裏側。正門の反対の位置にある門だ。

寮までの距離は、正門より少し遠いけど、あの村人の中を掻き分ける必要は無い。

【陽】

「それしかないか」

【赤明】
「じゃあ、行くのね？」

【陽】
「ああ。校舎の前からだと思えないはずだけど、見て追いかけてるのかどうかもわからないから、できるだけ走る
う」

【赤明】
「わかったわ」

赤明が頷いて、手を差し出してきた。

【赤明】
「手を、繋いでもいい？」

【陽】
「もちろん」

赤明の手を握る。

それだけで、何だか力が湧いてくるような気がした。

【陽】
「よし、行くう」

俺達は、しっかりと手を繋いで、無人の校舎の中を走り出した。

< 通学路 >

【赤明】
「あ、来たわ」

【陽】
「やっぱり見つかったか……」

裏門から出て、しばらくは誰もいなかった。

しかし、どこから嗅ぎつけたのか、壁を抜けて、村人達が姿を見せ始めた。

【村人】
「朝緋様……」

【村人】
「朝緋様……」

【陽】
「この、寄るなつての!!」

わらわらと寄って来た村人達を押し退ける。

こいつらが、俺の事を認識していなくて本当に助かる。
意識されてたら、こつ簡単には邪魔できなかったらろつ。

【陽】
「赤明、行け！」

って、お前らは寄って来るな！」

目の前に来た1人を突き飛ばす。

突き飛ばされた村人は、地面に尻餅をつく。

だが、何事も無かったかのように立ち上がり、また赤明を指して歩き出す。

俺が認識できない彼らからすれば、幽霊に襲われてるような物だろつに。

頭を使わないのはありがたいけど、ひるんだりしないのは厄介だな……

【陽】

「赤明は……」

村人達を押し止めながら振り返ると、赤明は寮の近くまで進んでいた。

うまく行きそうだな。

そう思ったその時、塀の中から1人の村人が出て来た。

しまった！ そつちにもいたのか！

【陽】

「くそつ、壁抜けは反則だろ！」

赤明に向かって走り出す。

【村人】

「朝緋様……」

【陽】

「無視だ！ 寮へ！」

【赤明】

「わ、わかつてる！」

あの位置なら赤明が寮に入る方が早いはずだ。

村人も1人しかいないようだし、これなら……

【村人】

「朝緋様……息子が、死にました」

【赤明】

「え……」

赤明が足を止める。

【村人】

「あの子は、まだ3つだったのに……」

【陽】

「赤明！ 聞くな！」

走りながら叫ぶ。

だが、赤明はそこに立ち尽くしている。

【村人】

「どうして、助けられなかったんです……いいえ、あなたの、あなたのせいで！」

【赤明】

「あ、あたしは……」

【村人】

「あなたが、連れて来たんですよ……あの、疫病神を！」

村人が手を振り上げる。

その手に握られた包丁が、鈍く輝いた。

【村人】

「あああああああつ……」

【陽】

「赤明っ！」

間に合えっ！

赤明に飛びついて、地面に押し倒す。

【陽】

「赤明！ 大丈夫か！？」

起き上がって、赤明を抱き起こす。

【赤明】

「陽！ 大丈夫なの！？ 怪我は!?!」

凄い剣幕で赤明が詰め寄ってくる。

【陽】

「俺は大丈夫だ。赤明は？」

【赤明】

「私も、いつ」

赤明が顔を歪める。

その右腕の袖が裂け、腕に1筋の赤い線が走っていた。

【陽】

「っ、あいつっ」

赤明に怪我させやがって、

効果が無いのはわかってるけど、1発殴ってやる！

【陽】

「っつて、おいおい……」

拳を固めて振り返った俺の目に、意外な風景が飛び込んで来た。

赤明に切りかかった村人を、他の村人達を取り押さえている。

【村人】

「朝緋様に何て事を！」

【村人】

「朝緋様！ お怪我はありませんか！」

この村人達は、朝緋の記憶だ。

赤明には迷惑なだけだから敵扱いしてたけど、朝緋の敵ってわけじゃないんだっただか。

……今だけは、感謝しておいてやる。

【陽】

「赤明、立てるか？」

【赤明】

「え、ええ」

赤明を助け起こす。

【陽】

「寮へ急ぐ」

赤明を支えながら、寮に向かう。

その俺達の背中を、あの村人の声が追いかけて来た。

【村人】

「朝緋の、あの女のせいだ！ あれは、疫病神だったんだ！」

疫病神？

一体、何の事だ？

<学生寮 213号室>

赤明を連れて、自室に戻る。

【陽】

「ちょっと待っててくれ」

【赤明】

「どこかに行くの？」

赤明が不安そうに俺の手を掴む。

【陽】

「すぐに戻るよ」

手を重ねて、そつと外す。

【赤明】

「本当よね？」

【陽】

「ああ。1分だけ」

【赤明】

「わかったわ……」

赤明を部屋に置いて、隣の部屋に向かう。

<学生寮 廊下>

【陽】

「黄牙、帰ってるか？」

扉を叩くが、返事は無い。

まだ帰ってないのか。

まあいい。勝手に入ろう。

カードキーを使って、黄牙の部屋に入る。

<学生寮 214号室>

【陽】

「お邪魔しますよ」

無人の部屋に断って、部屋に上がる。

【陽】

「えーと、確かこの辺りに……お、あった」

棚を探すとすぐに目的の物が見つかった。

それを抱えて、赤明の所に戻る。

< 学生寮 213号室 >

【陽】

「ただいま……っであれ？」

部屋に戻ると、赤明が出迎えてくれた。

格好も赤明に戻っている。

【陽】

「消えたのか」

【赤明】

「ええ。ついさっき」

赤明はさっきよりほんの少しだけ元気になったように見えた。

まだ消えるって事に安心したんだろう。

【赤明】

「どこに行っていたの？」

【陽】

「黄牙の部屋。これを取って来たんだ」

手にしたそれを掲げて見せる。

【赤明】

「救急箱？」

「そんな物を持ってたの？」

【陽】

「使う機会は無かったんだけどな」

こんな風にその機会が来るとは、思ってもみなかった。

【陽】

「腕、見せてくれ」

【赤明】

「わかったわ」

赤明が右の袖を捲り上げる。

肘の少し下に斜めに裂傷が走っていた。

でも、そんなに深くない。

良かった。

【陽】

「それにしても、傷は残るんだな」

【赤明】

「あ、そうね。これも、消えたら良かったのに」

【陽】

「ん、でも、これ位ならすぐ治るだろ」

救急箱を開けて、中身を取り出す。

包帯とガーゼ、消毒液と。

【陽】

「ちょっと染みるぞ」

【赤明】

「っ」

【陽】

「大丈夫か？」

【赤明】

「大丈夫よ。消毒くらいで」

【陽】

「そっか」

傷の上にガーゼをあてて、包帯を巻く。

【赤明】

「そういつの、慣れてるの？」

少し驚いたように、赤明が聞いて来る。

【陽】

「いや、我流、って言うか適当だ。

不安だったら、保健室とか病院とか行ってもいいけど」

【赤明】

「これでいいわ。

外に出る方が危なそうだし、せっかく、陽が手当てしてくれたんだもの」

【陽】

「そ、そうか」

そんな言い方されると照れるな……

【陽】

「これでいいだろ」

包帯の端をテープで止める。

【赤明】

「ありがとう」

【陽】

「いや、俺がちゃんと守ってやれなかったせいだしな……」

あの時、もっと早く駆けつけていたら、

赤明はこんな怪我をする事も無かったかもしれないのに。
後ろにしかいないと思って油断したせいで……

【赤明】

「そんな事言わないで。これは陽のせいじゃないのよ」

赤明が、包帯の上から傷を押さえる。

【陽】

「でも……俺が」

【赤明】

「そうじゃないのよ。」

私、あの時、切られていないの」

【陽】

「何だって？」

でも、現に傷はそこにあるのに。

【赤明】

「陽に押し倒されてる時に、」

あの人が包丁を振り下ろすのが見えたわ」

【赤明】

「どう見ても、私の右腕になんて当たるタイミングじゃなかった。
私は、陽が切られたんじゃないかって思ったのよ？」

【陽】

「そうだったのか……」

それで、あの時あんなに心配そうにしてたのか。

考えてみれば確かにそうだ。

あの時、俺は赤明を左側から押し倒した。

当然、右腕は最初に倒れる方向になる。

振り下ろした包丁がそこにだけ当たる事は、まず無いと思っ
てい
い。

【陽】

「だとすると、その傷は？」

あの傷は間違いなく刃物の傷だ。

転んであんな傷ができる事も、まずありえない。

【赤明】

「もしかしたら、あの時……」

【赤明】

「あたしは切られたのかもしれない」

【陽】

「あたし……朝緋が？」

【赤明】

「ええ。だって、あれはあたしの記憶なのよ？」

【赤明】

「私には陽がいて、助けてくれたけれど、でも……あたしには助けてくれる人はいなかった」

【陽】

「そんな……」

記憶の世界が消えても、傷が残った。

それどころか、赤明が受けなかった傷さえできている。

そして、これは朝緋が受けた傷で、それが赤明に反映されてるんだとしたら、

俺がどんなに赤明を庇っても、何の意味も無いって事じゃないか。

過去に無い場所が安全地帯になるって思ったばかりなのに、もう意味無しかよ。

赤明と朝緋の結びつきは、もうそんな状態まで来てるのか……

1日1日、悪い方向に進んでるじゃないか。

【赤明】

「陽……私、これからどうなるの？」

【陽】

「どっして……」

正直に言って、予想もつかない。

このまま進んだ先に、何が待ってるんだろう。

でも、何が待っているにしても、悪い事しか起こらない気がする。

【陽】

「どうなるかはわからないけど、どうにかする」

【赤明】

「どうにか……そうね、何とかなるのよね」

【陽】

「ああ。俺と那美を信じてくれ」

【赤明】

「ええ」

とは言うものの、どうすればいいんだか。

もう、かなり余裕は無くなって来てる。

何でもいいから、手がかりを見つけないと。

【陽】

「そう言えば、ちょっと気になる事を言ってたな」

【赤明】

「気になる事？」

【陽】
「ん、疫病神がどうか言ってたたる？」

【赤明】
「そう言えば言ってたわね。疫病神を連れて来たって」

【陽】
「何か、心当たりはあるか？」

【赤明】
「そうね……。
あ、もしかして、あの事かしら」

【陽】
「何かあるのか？」

【赤明】
「ええ。3年位前の事だけど、あたしは神社に新しい神様を招いたのよ」

【陽】
「新しい神様って……そんなのありなのか？」

今までの話からすると、朝緋は神社に住んでみたいだし、
そついつ事をする事もありなのか？

【赤明】

「私も知らないわ。でも、あたしは確かにそんな話をしていたわ」

【陽】

「で、それが疫病神だったって言うてるのか」

【赤明】

「多分、そうでしょうね」

【陽】

「本当だと思うか？」

【赤明】

「思わないわ」

【陽】

「だろうな。俺もだ」

招いてすぐにとかならともかく、3年も経ってからだからな。

多分、飢饉で子供を亡くした事への悲しみなんかを何かのせいにして耐えられなかったんだらうな。

それにしても、神を招くとは、朝緋はそんなに凄い力の持ち主だったのか。

というか、朝緋ってどれだけの事ができたんだらう。

村人に真面目に崇拜って言うか、尊敬されてたみたいだし。

やっぱり、超能力的なパワーを持ってたんだらうか。

【陽】

「なあ、朝緋の不思議な力ってどんな事ができたんだ？」

【赤明】

「あたしの？ そうね……」

【赤明】

「そんなに大した事はできなかったと思うわ。

私が知ってる限りでは、翌日の天気を当ててたくらいよ」

【陽】

「天気予報ねえ……いや、翌日の未来予知なのか？」

【赤明】

「どっちにしても、微妙よね」

確かに。

【陽】

「ん、でも、力があつたのは確かなわけだし」

神を招き、1日とは言え未来を読む。

あの感じの時代なら、頼られるのには十分な能力だろう。

むしろ、そのせいで、赤明が余計に大変な目にあつてるとも言える。

【陽】

「……おまぬしんたんごうまぬしんた」

六月二十六日

<6月26日(金)>

<学生寮 食堂>

朝。

黄牙と2人で朝食の列に並ぶ。

【陽】

「あれ……?」

今、一瞬過去の村人が見えたような……

【黄牙】

「どうした?」

【陽】

「ん、何でもない。見間違えかな」

食堂は、いつもと同じ、現在の風景だけだ。

やっぱり気のせいだったのか?。

<通学路>

赤明と橙歌を加えて朝食を取った後、その4人で学園へと向かう。

【橙歌】

「今日もいい天気だね」

【赤明】

「そうね。暑くなりそうだわ」

【黄牙】

「暑いと勉強する気がしねえよな」

【橙歌】

「だよー」

【陽】

「授業中はクーラー入ってるだろうが」

【赤明】

「暑さより、やる気の問題よね」

【陽】

「その通りだな」

【陽】

「っー」

「ただ、一瞬だけど、また見えた。」

【陽】

「赤明。今……」

小声で聞くと、赤明が小さく頷いた。

やっぱり見間違いないじゃなかったのか……

この調子だと、本当に見えつぱなしになってしまつかもしれない。

そろそろ、普通に生活するのも限界なんじゃないだろうか。

【陽】

「なあ、赤明。このままでいいのか？」

【赤明】

「いいも何も、どうしようも無いじゃない」

【陽】

「でも、昨日みたいな事があるかもしれないし。学校を休むとかした方がいいんじゃないか？」

【赤明】

「ここまで来ておいて？ 仮病もいいところね」

【陽】

「そんなのどうとでも誤魔化せるだろ」

【赤明】

「サボれって薦めるなんて、悪い人ね」

【陽】

「茶化すなよ。お前が心配なんだ」

【赤明】
「……ごめんなさい。でも、わかってるでしょう？」

【赤明】
「あたしが傷つく事があつたら、どこにいたって私も傷つく事」

【陽】
「それは、そうだけど……」

【赤明】
「それは、仕方の無い事なのよ。
それなら、普通にしていた方がいいわ」

【赤明】
「そうしていないと、不安に押しつぶされてしまいそうなのよ」

【陽】
「……わかった。赤明がそう言うなら、止めないよ」

【陽】
「でも、傷つけられてまで仕方無いなんて、物分りが良すぎるんじゃないか？」

赤明は、朝緋の記憶の住人が見える事を決して好んではない。
むしろ、それに恐怖しているのは間違いない。

それなのに、それを仕方ない事だと受け止めてしまっている。

【赤明】
「だって、本当に仕方の無い事だもの。私はあたしでもあるんだから」

どんなに嫌でも、自分が自分である事は変えられないって事が。

【陽】
「ん、そういうのもわかるけど……」

でも、俺はそれを何とかしたいんだ。

【橙歌】
「ちよっとちよっと、何2人の世界に浸ってるのさ。ひそひそ話なんてしちゃって」

橙歌が話に割り込んで来る。

こいつらがいたの、すっかり忘れてた……

【赤明】
「あ、ごめんなさい」

赤明が、橙歌の方へと歩いて行く。

話の途中だったのに、逃げられたか。

【陽】
「まいったなあ」

状況は悪くなってるのに、普通に過ごす意外にやる事が無い。

実際、この状況で俺に何ができるんだろう。

ぱっと思いつくのは、どうにかして朝緋を消すとかだけど、

赤明と朝緋が同一である以上そんな事はできないし……

【陽】

「どっすりゃいいんだろうなあ」

<学園 2年教室>

学園に着いてからも、赤明の姿は時々朝緋の姿に変わった。

だが、そのどれもが朝と同じように一瞬の事で、何とか無事に時間が過ぎて行った。

そして、4限目の授業中。

何気なく赤明に目を向けて、俺は息を呑んだ。

見間違いようが無いほど、はっきりと朝緋の姿が見えていた。

まずいな……このタイミングで重なったのか。

時計で時間を確認すると、授業の終わりまで30分は残っている。

この教室は2階で、高さ的には安全な場所だけど、

過去に存在した櫓がちょうど重なっていて、この教室には奴らが上がって来る事ができる。

来たからと言って、直接赤明に危害が加えられるわけでもないけど……

【赤明】
「……………」

赤明の方を見ると、赤明と目が合った。

不安そうな瞳。

どうしようと、その視線が訴えて来る。

それを見た瞬間、考えは決まった。

危害が加えられなくなつて、遭遇する事を赤明が嫌がつてるんだから、

このまま、ここに居るべきじゃない。

【陽】
「先生」

【教師】
「どうした、城崎。質問か？」

【陽】

「いえ、赤明……新嶋さんが体調が悪そうなので」

【教師】

「何？」

教師が赤明の方を向く。

【教師】

「確かに顔色が悪いな。新嶋、大丈夫か？」

【赤明】

「あ、えっと、その……」

急に話を振られた赤明が戸惑った声を出す。

悪い、そこは自分で乗り切ってくれ。

【赤明】

「少し気分が悪くて……」

【教師】

「そうか。保健室に行くか？」

【赤明】

「あ、はい。そうします」

【教師】

「よし。じゃあ、城崎。気づいたよしみでお前が付き添ってやれ」

え、マジか。ラッキー

【陽】
「わかりました」

席を立ち、赤明と教室の出口に向かう。

【教師】
「城崎、お前はサボらずにさっさと戻って来るんだぞ」

【陽】
「わかってます」

教師の声に返事を返して、教室を出た。

<学園 廊下>

授業中だけあって、廊下は無人だった。

静かな廊下に、俺達2人だけの足音が響く。

【陽】
「さて、取りあえず無事に抜け出せたな」

【赤明】
「『抜け出せたな』、じゃないわよ」

【赤明】
「急にあんな事言って、驚いたじゃない」

【陽】

「だって、他に教室出る方法無かっただろ」

【赤明】

「それは、そうでしょうけど」

【陽】

「だったら、今は結果オーライって事で」

【赤明】

「もう……わかったわよ」

【赤明】

「それで、これからどうするつもり？ 保健室に行くの？」

【陽】

「まさか」

保健室があるのは1階だ。

そんな所に自分から行くのなら、教室にいた方がまだマシだ。

【陽】

「ワンパターンだけど、屋上に行こう。やっぱり、あそこが1番都合がいい」

逃げるだけなら結構どこでもいいけれど、誰かに見つからない場所となると屋上くらいだ。

授業中だし、うつかり教師にでも見つかったら厄介だからな。

【赤明】

「そうね。わかったわ」

【陽】

「それじゃ、行こうか」

<学園 屋上>

【陽】

「うわ……やっぱりいるな」

屋上から見下ろしたグラウンドには、生徒に混ざって過去の村人がうろろろしていた。

赤明の姿が変わっていたから、わかってはいたけど、実際に見ると気が滅入る。

【赤明】

「陽、そんなにのんびりしていいの？」

【陽】

「ん、そうだったな」

ここでのんびりしてられないんだっけ。

屋上の柵から離れて、校舎の入り口に向かう。

【陽】

「じゃあ、俺は教室に戻るよ」

【赤明】

「ええ」

【陽】

「昼休みになったらまた来るけど、もし、それより先に消えたら、寮に戻っとけよ」

放課後まで待って、昨日みたいな強行突破で帰るのは遠慮したい。

体調不良って事になってる事だし、安全な間に帰れるに越した事は無いからな。

【赤明】

「そうね。そうするわ」

【陽】

「帰る時はメールでもしてくれ。荷物は持って帰るから」

【赤明】

「ええ、ありがとう」

【陽】

「それじゃ、また後で」

赤明に手を振って、屋上を後にした。

<学園 2年教室>

チャイムが鳴って、授業が終わる。

教室に戻ってからの、15分くらいが、相当に長く感じた。
携帯を出して、メールを確認する。

【陽】

「来てないか」

て事は、まだ見えてるんだな。

なら、俺も屋上に行くか。

おっと、その前に、昼飯を調達しないと。

【陽】

「メールするか」

『学食に寄ってから、屋上に行く』と。これでもいいだろ。

えっ、急いじつ。

<学園 中庭>

学食に行く途中、中庭を通りかかった。

【陽】

「あれ……？」

何か変な感じだな。

違和感を感じるが、その原因がよくわからない。

気のせいかな？

<学園 学食>

学食で、適当にパンと飲み物を見繕い、

<学園 中庭>

帰りにも、中庭を通る。

……やっぱり、何かおかしい気がする。

足を止めて、周囲をじっくり観察してみる。

【陽】

「普通、だよな」

行きかう学生。

何も変わった所は無い、普通の光景だ。

【陽】

「ん、待てよ？」

むしろ、普通だからおかしいんだ。

ここには、過去の住人が1人もいない。

と言うか、わかって見てみると、過去の風景も重なっていない。

【陽】

「あれ？もしかして、消えてるのか？」

赤明からは連絡は無かったけど……

もしかして、帰ったりしてる？

いや、別にそれなら構わないんだけど、

そうじゃないとしたら、かなり拙い事になったって事だ。

【陽】

「確認しないと」

俺は、急ぎ足で屋上へと向かった。

<学園 屋上>

扉を開けて、屋上に出る。

【陽】

「赤明、いるか？」

【赤明】

「陽？」

呼びかけると、扉の死角になっている辺りから、赤明が出て来た。

隠れていたらしい。

【陽】

「いたんだな」

【赤明】

「あら、私がいたらいけない？」

【陽】

「そういう意味じゃなくって」

改めて確認するまでも無く、赤明は制服姿だった。

【陽】

「今、消えてるよな？」

確認の為に聞いてみる。

【赤明】
「ええ」

赤明が頷く。

良かった。

いきなり俺の目に見えなくなってしまったんじゃないか。無いみたいだ。

【陽】
「取り越し苦労だったか」

【赤明】
「どうしたの？」

【陽】
「ん、大した事じゃないよ。
てか、何で消えてるのに屋上に残ってるんだ？」

もし消えたなら、安全な間に戻って言うておいたのに。

【赤明】
「あ、それは、消えたのが昼休みに入ってたのよ」

【赤明】
「もしも、3階から下りてるのをクラスの人に見られたら、困るで
しょう?」

【陽】

「ん、確かに」

保健室に行ったはずの赤明が、上から下りて来るのは不自然だからな。

ついでに言えば、3年生に屋上から下りるのを見られるのも都合が悪い。

【陽】

「って事は、今消えてても帰れないのか」

【赤明】

「そういう事になるわね」

【陽】

「やれやれ……」

まさかそんな落とし穴があるとは思わなかった。盲点だ。

【陽】

「それじゃ、とりあえず飯食うか？」

【赤明】

「そうしましょうか」

俺達は、適当な場所に腰を下ろし、パンの包みを開いた。

.....

.....

……

【赤明】

「ごちそうさまでした」

赤明は、食べ終わったパンの袋をきつちりとしまう。

それから、何か言いたそうな顔で、俺を見る。

【陽】

「どうした？」

【赤明】

「ねえ、もっとそっちに行ってもいい？」

また唐突だな。

でも、別に断る理由はない。

【陽】

「ん、いいよ」

【赤明】

「ありがとう」

赤明が、俺の真横に移動して来る。

肩と肩が、触れ合う。

感じるのは、赤明の温もり。

それと、かすかな震え。

震えてる？

【陽】

「赤明、怖いのか？」

【赤明】

「ん……」

返事になってない短い声をあげて、赤明が手を伸ばす。

俺の右手と赤明の左手が重なって、指を絡めあった。

【赤明】

「……嘘をついたわ」

【陽】

「嘘？」

【赤明】

「本当は、昼休みになる10分くらい前には消えていたの」

【陽】

「だったら、どうして寮に戻らなかったんだ？」

そのタイミングだったら、人目を気にしないで帰れたはずだ。

【赤明】
「あなたを、待っていたの」

【赤明】
「消えていたって、1人で帰るのが怖くて」

【陽】
「なら、そう言ってくれたら良かったのに」

帰るのが怖いって気持ちはわかる。

いつ見えるかわからないから、もしかしたら、帰る途中に急に見えるかもしれない。

そう考えると、不安になって当然だ。

でも、最初にそう言ってくれたら、屋上で時間を取らずに、寮に送って行ったのに。

【陽】
「何で、嘘なんてついたんだ」

【赤明】
「だって、正直に話したら、寮に帰らされてしまっただけでしょっ？」

【陽】
「それは、当たり前だろ」

【赤明】
「だからよ」

【赤明】
「ここであなたを待っている間も、怖かったわ。
でも、寮に一人でいるなんて、もっと怖いのよ」

【赤明】
「子供みたいって、呆れたかしら……？」

【陽】
「ん、呆れはしないけど、驚いた」

【赤明】
「どうして？」

【陽】
「何て言うか、もっと平気なんだって、思ってたから。
朝だって、普通にしていたって言うてただろ？」

寮は安全なはずだって、わかってて。

でも、そこに1人でいるのを嫌がるほど怖がってるなんて思っ
ていなかった。

【赤明】
「私が平気そうに見えたのなら、それは、陽がいてくれるからよ」

【陽】
「え？」

【赤明】

「あなたがいるから、私は普通にしていられるの」

【赤明】

「前にも言ったでしょう？」

あなたのせいで、弱くなってしまうたって」

そう言っつて、赤明はさらに身を寄せて来た。

これ以上は無いほど、体が密着する。

その体が、はっきりと震えているのが伝わって来た。

【陽】

「赤明……」

赤明は、こんなに怖がっていたのか。

そして、そんなにも、俺を必要としていてくれたのか。

【陽】

「ごめん、気づいてあげられなくて」

赤明の肩に手を回して、抱きしめる。

【赤明】

「謝らなくていいの。今は、側にいてくれるから」

【陽】

「ああ……」

俺は、赤明の体を抱きしめたまま、しばらくじっとしていた。

.....

.....

.....

チャイムの音が聞こえる。

午後の授業の始まりの鐘だ。

【陽】

「あ、授業が……」

反射的に腰を浮かせて、立ち上がる。

くい、と手を引かれた。

赤明の手が、俺の手を握ったままだった。

【赤明】

「あ、ごめんなさい」

【陽】

「赤明……」

その手を、振りほどく事なんて、できるはずが無い。

また、恐怖に震える事になる赤明を、放っておけない。

もう一度、元の場所に腰を下ろす。

【赤明】

「陽？ どうしたの？」

【陽】

「ん、急に行く気が無くなったんだ」

赤明の体を引き寄せて、抱きしめる。

【赤明】

「陽……」

【赤明】

「もう……馬鹿なんだから」

おずおずと、赤明が体を預けてくれる。

【陽】

「全くだな」

そう言っつて、腕の中の赤明を見下ろす。

うわ、顔が近い。

思わぬ形で、至近距離で見詰め合う事になった事に驚く。

【赤明】

「よ、陽……」

あつという間に、赤明の頬が赤く染まる。

【陽】

「赤明……」

なんて言うか、まずい。

さっきまでの抱擁が、赤明を支えるための行為だったとするなら、

これは、赤明を求めるためのそれだ。

腕の中の女の子を意識して、意識が過熱する。

赤明も同じものを感じているんだろう。

【赤明】

「授業に……行かないと」

ささやくように告げる、その吐息の熱さを感じた気がした。

【陽】

「もう、遅れてるよ」

【陽】

「そういう赤明こそ、寮には帰らないのか」

一人で帰るなんて言うはずが無い。

そう思って聞いた質問だった。

【赤明】

「……もう少し、一緒にいて」

顔を上げて、目を閉じる。

俺は、そんな赤明の唇に、そっと口付けた。

<学生寮 213号室>

【陽】

「ただいま」

【赤明】

「おかえりなさい。どうだった？」

部屋に帰ると、赤明が出迎えてくれた。

【陽】

「駄目だな。食堂にもうろつろしてた」

【赤明】

「そっ……」

肩を落とす赤明の衣装は、もうすっかり見慣れた感のある巫女服だ。

午後の授業をサボって、寮に戻ったまでは良かったけど、

その少し後から、ずっと過去が見えっぱなしになっている。

【陽】

「そういう訳で、夕食はこれだな」

売店で買って来た、おにぎりや惣菜を机の上に置く。

【陽】

「パンばかりじゃ飽きるからな。温かい物は無いけど、まあ、我慢してくれ」

【赤明】

「ごめんなさい。私のせいで、陽までつき合わせて」

【赤明】

「あなたは、食堂で食べてきてもいいのよ」

【陽】

「いいって。俺も好きでやってるんだし」

【陽】

「考えようによっては、もれなく2人きりなわけだしな」

役得もあるし、そう悪いもんじゃない。

それに、昼休みに、決めたんだ。

なるべく、赤明の側にいようって。

【陽】

「そういつわけだ。さっさと食べよう」

おにぎりの包装を破って、齧りつく。

【陽】

「お、うまい。割といけるな、新製品」

【陽】

「ほら、赤明も食べるよ」

【赤明】

「ええ。いただくわ」

ようやく赤明も笑みを見せて、おにぎりに手を伸ばした。

.....

.....

.....

夕食を終えて、かなりの時間が経った。

けれど、赤明の姿は相変わらず朝緋のままだ。

あんまり考えたくないけど、考えないわけにもいかないか。

【陽】

「赤明」

【赤明】

「え、何？」

【陽】

「今の状況、どう思う？」

そう言うと、赤明の表情が曇る。

【赤明】

「それは、このまま消えないかもしれないって事？」

【陽】

「ん、まあ、そういう事だな」

【赤明】

「……そうなって、しまうのかしら」

【陽】

「わからない。でも、その可能性自体は、あると思う」

【赤明】

「そうね……」

【陽】

「ああ……」

【赤明】

「でも、何とかできるのよね」

【陽】
「それは……」

即答はできなかった。

結局、状況は悪くなってる一方で、

それなのに、何か有効な打開策は思いつかない。

こんな状態で、『できる』なんて……

【赤明】

「陽……。できる、わよね」

すぎる様な赤明の声。

【陽】

「ああ、できる。何とかするよ」

俺は、そう答えた。

今は、何も手立てが無いからこそ、できるって信じるしかない。

何とかできるって思っていないと、希望なんて何も無い気さえして来るから。

……すがっているのは、俺も同じか。

でも、すがってるばかりじゃいられない。

言葉をより所にする事は悪いことじゃないけど、それだけで何も
しないのは駄目だ。

何とかできるはずだろうと、何だろうと、俺が動かないとどうし
ようも無いんだから。

ちょうど良く、明日から土日で休みだし、どうにかして、手が
かりを見つけてやる。

問題は、それだと赤明を1人で置いておかないといけないって事
だな。

はあ、なるべく一緒にいようって決めた側からこれか……

【陽】

「赤明。先に謝っておく事がある」

【赤明】

「何かしたの？」

【陽】

「明日、俺は赤明の側にいられないから」

【赤明】

「え？ ぞ、どうして？」

最初に驚き、次いで必死になって聞いてくる。

その顔を見るだけで、罪悪感が募る。

でも、これは赤明のために必要な事なんだ。

【陽】

「何か手がかりを探すために、あちこち行ってみようと思うんだ」

【陽】

「俺は、出歩いてても大丈夫だけど、赤明はそうはいかないだろ？」

【赤明】

「あ……そうね。私は、外を出歩けないものね……」

暗い顔で俯いてしまう。

【陽】

「赤明……」

少し外を出歩くだけでも、普通の人には見えないものを警戒しなければならぬ。

それが、今の赤明の状態。

でも、いつまでもそんな風になんてしておけない。

【陽】

「何か掴んで来るから、待っていてくれ」

【赤明】

「……ええ。陽に任せるわ」

【陽】

「ああ。任せてくれ」

絶対に、解決に繋がる何かを見つける。

頷いてくれた赤明を見ながら、そう心に誓った。

六月二十七日

<6月27日(土)>

<学生寮 玄関>

天気は快晴。

綺麗に晴れ渡った空を見上げると、何だかいい1日になりそうな気がする。

【陽】

「……こいつらがいなければ、だけどな」

寮の周りをうろついている記憶の住人を見ると、その気分も台無しだった。

こいつら、朝から見えてるけど、結局消えなかったのか……？

【陽】

「良くないなあ……」

見えつぱなしってのは、赤明の精神衛生上かなり良くない。

俺でさえ気が滅入るんだから、赤明への負担は推して知るべし、だ。

これは、ますます何か手がかりを見つけないといけないな。

【陽】

「さてと、行くとするか」

1人呟いて気合を入れなおし、俺は寮を出発した。

<商店街>

俺が最初に訪れたのは、商店街にある本屋だ。

ここに手がかりがあるわけじゃなくて、必要な物を買いに来ただけだ。

【陽】

「ん、これだな」

この町の地図を購入して、店を出る。

【陽】

「準備完了っつと」

今日の目的は、主に2つ。

1つは、もちろん解決のための手がかりを見つける事。

そして、もう1つは、地図を作る事だ。

過去が見えている状態だと、俺と赤明は、現在と過去の両方の障

害物に足止めされてしまう。

逆に、過去の住人は、現在にしか存在しない道を通る事はできない。

これを踏まえて、あらかじめ地図を作っておけば、

すっかり袋小路に追い詰められたりする事態を回避したり、逃走経路を見つけられる。

少々遠回りになるかもしれないが、安全に移動できる道もあるかもしれない。

地図を作りながら町を歩いていけば、手がかりの収集も収集できる。

まさに一挙両得の計画。

【陽】

「それじゃ、始めるか」

まずは、商店街からだ。

.....

【陽】

「ん、こんなものか」

結構な時間をかけて、商店街の端から端までをチェックした。

うわ、1時間以上経ってる……

今日中に終わるのか、これ。

【陽】

「それにしても、想像以上だったな」

手に持った地図には、かなりの書き込みが入っていた。

抜けられると思っていた路地に壁があって通れなかったり、

逆に、溝と地面が重なっていて、実は通れたりと、今までの感覚が当てにならないのがよくわかった。

【陽】

「でも、解決の手がかりの方はさっぱりか」

道を探しながら、結構細かく見ているつもりだけど、特に手がかりになりそうなものはない。

それでも、1つ気がついたのは、過去の住人の姿がさっぱり見えない事だ。

多分、赤明と言うか、朝緋の周りに集まっているんだろう。

まあ、それは何となく想像ついてたし、目新しい発見でもないんだけど。

【陽】

「次に行くか」

<大通り>

【陽】

「うーん、そう来たか……」

目の前には、何の変哲も無い道路。

しかし、何の変哲も無いのは現在の道路だけで、重なって見える過去の道が問題だった。

過去の道の方が、今の道よりも少しだけ高い。

ここを歩けば、多分普通の人には空中を歩いているように見えるはずだ。

非常時でもない限り、ここは通らない事にしよう。

.....

.....

.....

それから、いくつかの場所を回り、学園の横手に辿り着いた。

残りは、学園と寮の周り、それに神社への道だな。

ああ、住宅街もあったっけ。

【陽】

「少し休憩するか」

寮のすぐ近くまで帰って来たんだし、1度戻ろう。

とつくに昼も過ぎてるしな。

< 学生寮 1階廊下 >

食堂を覗いて見ると、もう昼食の時間は終わってしまった。

また売店で何か買うか。

そんな事を考えながら歩いていると、前から橙歌が歩いて来た。

【橙歌】

「あ

橙歌は、俺に気づくとぽかんと口を開け、

びしっと俺に指を突きつけた。

【橙歌】

「あ—————!!」

こんなところにいた—————!!」

廊下にどでかい声が響く。

【陽】

「な、何だよ、そんな大声出して」

【橙歌】

「何だはこっちの台詞だよ。こんな時にどこいったのさ？」

【陽】

「ちよっと出かけてたんだ。で、こんな時ってどんな時だ？」

【橙歌】

「それも知らないの？ 赤明が寝込んでるのに」

【陽】

「赤明が？」

【橙歌】

「うん。風邪引いたからって」

【橙歌】

「昨日から具合悪そうだったもんね」

風邪ねえ。

昨日早退したのは仮病なんだけど……

【陽】

「ちよっと行ってくる」

【橙歌】

「あ、こら、僕の話はまだ終わってないのに！」

【陽】

「悪い、取っといてくれ」

【橙歌】

「取っっておけるか！」

橙歌の声を置き去りに、俺は急いで赤明の部屋へと向かった。

<学生寮 4階廊下>

437号室。ここが赤明の部屋だ。

部屋の前に立って、扉をノックする。

【陽】

「赤明。俺、陽だけど」

……返事が無い。

【陽】

「赤明？ いないのか？」

取っ手を回してみる。

かちやりと音を立てて、扉が開いた。

鍵かけてないのかよ。

前に俺に無用心って言ったくせに。

【陽】

「入るぞ？」

一応断ってから、中に入る。

<学生寮 437号室>

赤明の部屋にはあまり入った事が無い。

久しぶりに訪れた赤明の部屋は、相変わらず綺麗に整頓されていた。

その部屋の一角に置かれたベッド。

そこに、赤明がいた。

正確に言うなら、ベッドにもたれて、床に座っていた。

膝を抱えて、身を守ろうとしているように、布団を頭から被って目を閉じている。

【陽】

「赤明……」

赤明は、今までこんな風に一人で耐えていたんだろうか。

過去に現在を侵される恐怖に、一人孤独に震えていたんだろうか。

【赤明】

「え……？」

俺の声に気がついたのか、赤明が薄く目を開いた。

そして、すぐに驚きに見開かれる。

【赤明】

「え、陽？ どうして？」

【陽】

「橙歌に風邪引いてるって聞いたんだ」

【赤明】

「……そう、橙歌が」

【赤明】

「でも、それは嘘よ。食堂に行けない理由が必要だったから、そう言ったの」

【陽】

「ん、そうだろうとは思ってたけど」

【赤明】

「それで、何かわかったの？」

【陽】

「いや、まだ何も」

【赤明】

「そう……。それじゃあ、また行くのね」

【陽】

「そのつもりだけど……。赤明、大丈夫か？」

【赤明】

「大丈夫よ。部屋にいたら、何も変わらないのだし」

【陽】

「でも、それ」

【赤明】

「あ、これは、その、橙歌に風邪って言ったから、大人しく寝てたのよ」

赤明の格好を指摘すると、慌てて取り繕う様に言葉を重ねる。

【赤明】

「そうしたら、いつの間にか落ちてしまったみたい」

【赤明】

「私、意外と寝相が悪かったのかしら？」

そう言って、赤明が笑う。

無理に作っているのがわかりやすすぎる笑顔で。

それは、いっそ、痛々しいと感じるほどだった。

【陽】

「はは、そうかもな」

【赤明】

「フオローは無いの？ 酷いわね」

【陽】

「ん、悪い悪い」

だから、俺もそれに合わせた。

本当は、怖いんだろって言って、側に行ってやりたい。

けど、赤明がそうやって無理に笑うのは、俺にやる事があるのを知っているから。

だから、俺は行かなきゃならない。

【陽】

「それじゃ、俺は続きに行くよ」

【赤明】

「ええ。頑張つて」

【陽】

「ああ。行ってくる」

【赤明】

「行ってらっしゃい」

側にいたいと思う未練を振り切って、部屋を出た。

< 学生寮 4階廊下 >

廊下には、橙歌が待っていた。

追いかけて来たけど、中には入り辛かったらしい。

【橙歌】

「どうだった？」

【陽】

「ん、また寝るって言った。邪魔するなよ」

【橙歌】

「そっか、寝てるんだ。うん、わかったよ」

橙歌が素直に頷く。

【陽】

「俺は、また出かけるから。赤明の事、頼むな」

【橙歌】

「また出かけるって、赤明が風邪なの？」

【陽】
「大切な用事があるんだ」

【橙歌】

「それ、病気の恋人より大事なの？」

怒った声で、橙歌が言う。

それも当然だろう。

でも、赤明より大事な用事なんじゃない。

【陽】

「赤明のために、大事なんだ」

【橙歌】

「何さ、それ」

【陽】

「悪い、説明はできない」

それを説明するには、沢山の事を話さないといけないから、

俺の一存で、勝手に話していい事じゃない。

だから、橙歌を納得させるような理由は言えない。

ほとんど睨みつける様な橙歌の視線を、真っ直ぐに見つめ返す。

俺が、真剣に赤明の事を想ってるんだって事は、わかって欲しい。

しばらく、俺達の睨み合いは続き、

やがて、橙歌が視線を和らげた。

【橙歌】

「はぁ……。訳わかんないけど、陽は凄いマジなのはわかったよ」

【橙歌】

「赤明のためなんだよね？ だったら、さっさと行けば」

【陽】

「橙歌……。ありがとな」

【橙歌】

「後でちゃんと説明してもらってからね」

【陽】

「ああ、取っといってくれ」

いつ説明するかはわからないけどな。

【橙歌】

「こっちはほんとに取っとくからね」

まだ微妙に不機嫌な橙歌に見送られて、俺はもう1度町へと出発した。

<道路>

寮と学園の周りを確認し、住宅街を確認してから、神社への道をチェックする。

今のところ、相変わらず解決への手がかりは皆無だった。

【陽】

「この道は、駄目だな……」

道路は、過去の道とちょうど重なってしまっていた。

現在にも過去にも、障害物となるような物は何も無い。

【陽】

「ん、そうでもないか？」

ひたすら走って逃げるのには使えるかもしれない。

逃走経路としては、ありか。

<石段>

石段の前に着いた。

上を見上げると、今石段のある位置の少し横に、もう一つの石段が見える。

これが、前に赤明が間違っ上ろうとしてたやつだな。

さて、ここはどつだろうな。

現在の方の石段は、俺達にしか上れない。

けど、石段が無くても、一応動く事はできるはずだ。

それに、結局神社で合流してしまう事になる。

【陽】

「上っても、追いつめられるだけか」

裏は崖になってるし、神社に上がった時点で逃げ場は無い気がする。

【陽】

「っと、そうやって、今の尺度で考えたら駄目なんだ」

もしかしたら、過去には思いも寄らない道があったって可能性もある。

それを確認するためにやってるんだった。

上まで行って、確認してみよう。

< 神社 境内 >

神社の様子は、今も昔もほとんど変わらなかった。

木の位置が違って見えたり、

神殿の建物が、少し綺麗に見えるくらいの差しかない。

長年変わってないんだな、ここは。

この分だと、あんまり新しい道には期待できないか。

.....

.....

.....

<神社 裏>

【陽】

「やっぱり無いか」

境内から裏手まで見て回ったが、新しい道は見つからなかった。

結局、ここは袋小路だったようだ。

【陽】

「戻るか」

<神社 境内>

んー、神社は使えないか。

大体見て回ったし、後は情報を整理しないと。

それと、赤明の事だよなあ……

かなり精神的に弱ってたし、何とかしてやらないと。

どうしようか……

【那美】

「何か見つかった？」

【陽】

「え？」

いつからいたのだろうか。

神社の縁側に、那美が座っていた。

【陽】

「那美」

【那美】

「こんにちは、陽君」

縁側から飛び降りて、俺の隣まで歩いてくる。

【那美】

「使ったんだね。奇跡を」

【陽】

「あ、ああ。わかるのか？」

【那美】

「それはわかるよ。だって、お願いを聞いたのは私だから」

【陽】

「那美が？」

そう言えば、奇跡を使った時に、那美の声が聞こえたような。

……こいつ、本当に何者なんだ？

【陽】

「お前、実は全知全能だったりしないか？」

割と真面目に聞くと、那美が苦笑を浮かべた。

【那美】

「しない、しない。私だって、普通は見たり聞いたりした事しかわからないよ」

【陽】

「だって、朝緋の事は知ってただろ？」

【那美】

「んーと、それはちょっとだけ特別だから」

【陽】

「そうか……」

【那美】

「そうだよ。私だって、何でもなんてできないよ」

【陽】

「そうだったら、助かったんだけどな」

【那美】

「私が直接手を貸すのは駄目だって言わなかったかな？」

確かに言われた。それは覚えてるけど。

【陽】

「それでも頼りたくなる時ってあるだろ」

【那美】

「困ってるのかな？」

【陽】

「ん、かなり。聞いてくれるか？」

【那美】

「うん。いいよ」

那美にざつと説明をする。

朝緋に関する事は知っているのに、俺と赤明が今どんな行動をしているかは知らないらしい。

【那美】

「そっか、そんな事になってたんだ」

【陽】

「ん、そうなんだ。あ、そう言えば、助言はしてくれろって言ったよな？」

【那美】

「うん、言ったね」

【陽】

「だったら、今その助言をくれよ」

【那美】

「んー、助言かぁ」

那美が悩むそぶりを見せる。

【陽】

「何だよ。今更助言もできないって言うのか？」

少し苛立った声が出た。

何もかもわかってて、俺をからかっているんじゃないだろうな。

いや、そんなはずはない。

那美は、俺たちの味方のはずだ。

【那美】

「んーと、別に助言する事なんて無いんだけどな。陽君は、必要な事はもう全部知ってるよ」

【陽】

「そうなのか？」

じゃあ、町を探し回っても、これ以上の手がかりは転がってないのかよ。

【那美】

「うん。後は、それをきちんと組み立てたら、答えは見えるはずだよ」

【陽】

「そう言われてもなあ。頼む、何かヒントをくれよ」

俺も随分考えたけど、何も思いついてないんだ。

それで、これ以上手がかりが無いって言うのは、かえって困るぞ。

【那美】

「わからないかな。結局は、他人事なんだよ」

【陽】

「な……」

今、何て言った？

他人事だった？

だから、これ以上の助言をする気は無いつて言うのか！？

【那美】

「もう、私が言う事は無いよ」

【陽】

「ああ、そうかよ」

俺も、これ以上お前とは話していたくない。

那美が、そんな事を言う奴だとは思わなかったよ。

【陽】

「なら、俺の力で解決してやる。じゃあな」

俺は、那美に背を向けて、神社を後にした。

<学生寮 213号室>

部屋に辿り着いた俺は、持っていた道具を乱暴に投げ出した。

地図や筆記道具がばらばらと散らばる。

【陽】

「何なんだよ、那美の奴！」

妙だけど、いい奴だと思ってたのに。

こんな大変な状況で、何が他人事だ！

もういい、どうせ、俺が何とかしないといけない事だ。

何とかしてやるさ。

【陽】

「何とかなる、か」

腹を立てていても、結局那美の言葉を信じている自分が、妙に笑えた。

でも、那美の言葉自体には嘘はないと思う。

個人的な苛立ちはこの際置いておいて、情報としては利用しよう。

【陽】

「結局、手がかりは無しか」

地図の方はそれなりのができたけど、主題の方は空振り。

しかも、実はこれ以上は情報が無いと来た。

なら、明日は手がかり探しをする必要は無いのか。

となると、1日空きができるわけだけだ。

【陽】

「やっぱり、赤明と過ごすのが1番か」

今日は1日いらなかったし、その埋め合わせでもするか。

俺がいることなんかで赤明が安心できるのなら、側にいてやろう。

どうせなら、気分転換にパーツと何かできたらいいんだけど……。

地図を拾って、机の上に広げる。

書いてある情報確かめて、どこかに行けそうな道を探す。

【陽】

「ん？ ここをこう行って、これで、橋まで行けるな」

かなり面倒な遠回りだけど、いつもと違う道路を経由すれば、割と安全に橋まで辿り着ける。

この場合の安全って言うのは、過去の壁で足止めしながらって事だ。

向こうも、それなりに大回りをしないと俺達に追いつきよの無い道がある。

赤明に真っ直ぐ向かってくる傾向を考えると、かなり時間を稼いで安全に移動できるはずだ。

【陽】

「これで、橋を渡ってしまえば……」

でも、遠くには一応過去の橋はあるんだよな。

最終的には、時間稼ぎしかできないか。

いや、待てよ。

だったら、思いつきり時間を稼ぐってのはどうだ？

少し危ないけど、橋から駅まではすぐだし、

何なら、橋を渡ってから1駅歩くのもありだ。

それで、電車で距離を離せば、追いつくのは至難の業だろう。

電車に30分も乗っていれば、20kmは進める。

歩く速度は大体時速4km。

真つ直ぐ歩いて来たとしても、単純計算で5時間は追いつけない事になる。

お、これは結構いい案じゃないか。

じゃあ、次は行く場所だな。

そつだな……やっぱり、追いつかれる可能性も考えると、

広くて、見通しのいい場所がいいか。

そうすると、街中とかはだめか。

高めのビルとかなら安全そうだけど、いつの間にか囲まれてましたじゃ困るし。

残るは、公園とかの自然系だな。

でも、そんな都合のいい場所が………あつたな、確か。

【陽】

「よし、明日は赤明と出かけよう」

計画は、これでいいと思うけど、

問題は、行く先の状況がわからないって事か。

……仕方ない。今から下見に行こう。

俺は、荷物を持って、三度、寮を出発した。

……

……

……

< 駅前 >

下見を終えて、駅まで帰って来た。

割と遠かったなあ。もう真っ暗だ。

【陽】

「まいったなあ……………」

寮の門限を過ぎてるよ……………。

門限を過ぎてても、特に罰があるわけじゃないけど、単純に寮に入れなくなってしまう。

さて、どうするか……………って、まあ方法なんて考えるまでも無いんだけどな。

<道路2>

駅から、学園とは反対の方向に進み、

以前に親睦会をした公園を少し越えた場所に、城崎家はある。

【陽】

「着いてしまったか」

あんまり帰りたくは無いんだけど、寮に入れないんだから仕方ないか……………。

<城崎家 玄関>

【陽】

「ただいまあ」

【??】

「え、嘘！ この声!?!」

玄関で挨拶すると、リビングの方から驚いたような声が聞こえた。

そして、凄いスピードで足音が近づいて来る。

【??】

「陽ちゃああああん！ お帰りなさー！ーい！」

【陽】

「むぐっ」

飛び出して来た人影に、力いっぱい抱きしめられた。

この人が城崎家母、名前は城崎香奈枝。

相変わらずテンション高いな。

【香奈枝】

「急にどうしたの？ お母さんに会いに来てくれた？」

【陽】
「んぐむむ……」

質問するなら、まずは離してくれ！

放っておくといつまでも離してもらえそうもないから、無理やり引っぺがす。

【陽】
「あー、鬱陶しいー！」

【香奈枝】
「ガーン！ 陽ちゃんに鬱陶しいって言われた……」
わざとらしく廊下に崩れ落ちる。

そのテンションが鬱陶しがられる原因なんだったの。

【陽】
「いい加減に陽ちゃん止めろってのに」

【香奈枝】
「えー、何で？」

【陽】
「いい歳して恥ずかしいだろ」

【香奈枝】
「お母さんは全然恥ずかしくないけど」

【陽】

「俺が恥ずかしいの!」

【香奈枝】

「そう?」

【陽】

「そう。だから、止めてくれ」

【香奈枝】

「はいはい」

【陽】

「はあ……頼むよ」

このやり取りも何回やった事か。

どうせ、また陽ちゃんって呼ばれる事になるんだろうな。

<城崎家 リビング>

【香奈枝】

「陽ちゃん、晩御飯食べたの?」

【陽】

「早いつて!」

一瞬で陽ちゃんに戻ってるし。

本当に直すつもりが無いんだな……。

【香奈枝】

「何が？」

【陽】

「ん、もういいよ……」

それにしても、晩御飯か。

【陽】

「晩飯はまだ食べてないけど」

【香奈枝】

「それじゃあ、食べるよね？」

【陽】

「あるの？」

俺が帰って来たのは突然だし、もう晩飯の時間としても結構遅いと思うけど。

【香奈枝】

「今日お父さんが仕事で遅いから、まだ残ってるの」

【陽】

「それ、食べていいのか……？」

俺の分じゃないだろ。

【香奈枝】

「いいのいいの。また作るから」

【陽】

「ん、じゃあ食べるよ」

【香奈枝】

「うん。すぐ用意するから、ちょっと待っててね」

【陽】

「了解」

んじゃ、テレビでも見て待ってるか。

リモコンを操作して、テレビをつける。

何か、面白そうな番組はあるかな。

『事件の初公判が行われ』

『明日のお天気は、全国的に晴れるで』

『にもかかわらず奇跡的に無傷だった。それは、あなたの前世の力なんで』

『1塁へ送球、アウト』

ん？

今何か、気になる単語が聞こえたような……

適当に変えていたチャンネルを戻す。

『守護霊とは少し違うんですね』

画面では、2人の男性が対談のような形で話をしていた。

1人は見た事がある。

よくテレビ番組とかにも出演している、ええと、誰だったかは忘れたけど、スピリチュアルカウンセラーとかいう人だ。

もう1人は、多分ゲストの一般人だろうな。

画面の隅には、『彼に訪れた幸運の真実が、今明かされる!』とテロップが出ていた。

『あなたは、残留思念、つまり、前世のあなたの残した意思に守られているんです』

【陽】

「前世、か」

この単語が引っかかったのか。

何と言つか、タイムリーな。

いつもなら、こんな番組は見ないけど、どこかに解決のヒントが

あるかもしれないし、一応見てみるか。

.....

途中からだけど、何となく理解はできた。

どうも、この相談者の人は、常人離れた強運の持ち主らしい。

で、その正体は前世のその人の残留思念だと、そういう事らしい。

前世とは言っても、赤明とは微妙に種類が違う感じだな。

『その意思はあなたの精神と非常に近い所にあるんです。それを、感じた事はありませんでしたか？』

『はい。実は、子供の頃に事故に遭ったとき、誰かに守られているような不思議な感覚を感じた事があります』

『そうでしょう。それは、あなたを守ってくれている存在なんです』

『あなたの前世にあたる方は、若くして死んでしまったんです。ですから、生きられなかった分も、あなたに幸せであって欲しいと願っているんですね』

『その、私の前世と言うのは……？』

『武士です。戦国の時代を生きていた、強い人です』

ふーん、あの人の前世は武士か。

それにしても、やっぱり赤明とは違うんだよな。

赤明は昔から、前世の記憶を自分の目で見てたわけだし。

でも、この人も一応は前世を感じた事はあるらしいのか。

それに、今、前世がどんな人だったのかもわかった。

でも、この人は、前世の記憶を、過去の光景を見たりはしていない。

確か、この番組は毎週あったはずだから、もしも相談した人が前世の記憶を見るようになっていたりしたら、大変な事になっていたはずだ。

けど、そんな話は噂にも聞いた事は無い。

前世がどんな物か知っているだけで、その記憶を見たりはできないのか？

赤明と違うのは、何だろう……

【香奈枝】

「陽ちゃん。できたよー」

呼ばれたか。

考えるのは後だな。

【陽】
「ん、わかった」

ダイニングに移動して、椅子に座る。

【香奈枝】

「お待ちどうさま」

テーブルの上に、どんどんと料理が運ばれて来る。

【陽】

「……多すぎる気がするんだけど」

【香奈枝】

「せっかく陽ちゃんが帰ってきたんだから、いっぱい食べさせてあげようと思って」

すぐって言ったのに、時間がかかったのは、追加で作ってたからか。

帰って来たぐらいでこの喜びよう。

……これだから、この家に帰るのは嫌なんだ。

【香奈枝】

「前世？ 陽ちゃん、こんなのに興味あるの？」

【陽】

「ん、いや、つけてただけだよ」

【香奈枝】

「そっか。じゃあ、運ぶの手伝ってくれる？」

【陽】

「まだあるのか!？」

【香奈枝】

「もちろん!」

.....

.....

.....

【陽】

「い、い、ごちそうさま……」

な、何とか食べきった。

わざわざ作ってくれた物を残せないからな。

【香奈枝】

「綺麗に食べたね。そんなに美味しかった？」

【陽】

「ん、まあ」

食べきったのは義務感からなんだけど、嬉しそうだし、黙ってお
じう。

【香奈枝】

「ところで陽ちゃん」

【陽】

「ん？」

【香奈枝】

「どうして急に帰って来たの？ ゴールデンウィークにも帰ってこなかったのに」

【陽】

「遠出してたら、門限過ぎたんだよ」

【香奈枝】

「そっか。遊びに行ったの？」

【陽】

「明日遊びに行くから、下見に行ってた」

【香奈枝】

「もしかして、デート？」

【陽】

「え……」

何でそんなに勘が鋭いんだよ！？

思わず言葉に詰まると、にんまりと目を細められる。

【香奈枝】

「あ、やっぱりデートなんだ！ きゃー、とつとつ陽ちゃんにも彼女ができたのね！」

【陽】

「いや、えーと」

【香奈枝】

「誰ちゃん？ どんな女の子？」

【香奈枝】

「いつからお付き合ってるの？ 明日連れて来てくれる？」

【香奈枝】

「ねえねえ、教えてよー」

言葉を挟む間もなく、矢継ぎ早に質問をされる。

駄目だ、こつちの話なんて聞く気なしだ。

こつちいう時は、逃げるに限る。

【陽】

「それじゃ、俺は部屋にいるから」

【香奈枝】

「あ、逃げた！」

<城崎家 自室>

追求から逃げて、自分の部屋に入る。

カーテンの色や置いてあるぬいぐるみなんかのせいで、相変わらず女の子っぽい部屋だ。

もちろん、俺の趣味じゃなくて、俺がこの部屋を貰う前からこうだった。

模様替えをするって話もあったけど、結局そのままにしてある。

【陽】

「やれやれ……」

あんなに食いつかれるとは思わなかった。

何ではれたんだろう。

【陽】

「あ、そうだ」

今日は帰れないって赤明に連絡しておかないと。

携帯を取り出して、メールを送る。

部屋の扉が叩かれる。

【香奈枝】

「陽ちゃん、ちょっといい？」

【陽】

「ん、何？」

扉を開ける。

【香奈枝】

「明日、お出かけでしょ？ 何時に出発するの？」

【陽】

「朝には出るつもりだけど」

【香奈枝】

「帰るのは？」

【陽】

「夕方かな」

【香奈枝】

「じゃあ、お弁当作ってあげようか？」

【陽】

「え、弁当？」

そう言えば、昼の事は考えてなかったな。

でも、わざわざ作って貰わなくても。

【陽】

「いや、いいよ」

【香奈枝】

「もしかして、彼女に用意してもらった？」

【陽】

「いや、そんな事は無いけど」

【香奈枝】

「だったら作ってあげる」

【陽】

「いいって。面倒だろ」

【香奈枝】

「そんな事無いよ。お母さんが作ってあげたいんだから、遠慮しないの」

これは断れない感じがする。

【陽】

「はぁ……じゃあお願い」

【香奈枝】

「はい。じゃあ作っておくからね」

嬉しそうに去って行った。

思わず押し切られたけど、

デートに家族の作った弁当持参ってどうなんだ？

……変な気がする。

とは言え、今更断れないし。

【陽】

「はあ……」

ため息が出る。

【陽】

「お

携帯に赤明から返信が来ていた。

【陽】

「ま、弁当の事はどうでもいいか」

今は赤明の事が優先だ。

一緒にはいられないけど、話をする事はできる。

赤明が少しでも安心できるように、

赤明とじっくり話をしよう。

俺は、携帯を操作して、赤明へと電話をかけた。

六月二十八日

< 6月28日(日) >

< 城崎家 玄関 >

【陽】

「これ、ありがとう」

お弁当の入った包みを手に、玄関で挨拶する。

【香奈枝】

「どういたしまして。今度はもうちょっと早く帰ってきてね」

【陽】

「ん、わかった」

【香奈枝】

「車に気をつけるのよ」

【陽】

「わかってるよ。子供じゃないんだから」

【香奈枝】

「それもそうね。それじゃあ、行ってらっしゃい」

【陽】

「行ってきます」

玄関を出る。

昨日に続いて、今日も快晴だ。

よし、行くか。

<学生寮 玄関>

寮の近くまで帰って来ると、記憶の住人がうろついているのが見えた。

やっぱり、消えてないのか。

昨日作った地図が早速役に立ちそうだな。

<学生寮 廊下>

【陽】

「赤明！。準備できてるかー？」

赤明の部屋の前で声をかける。

今日出かけるって話は、一応昨日の夜にしてある。

扉が開いて、赤明が出て来る。

赤明が朝緋の格好してるのにも、すっかり見慣れてしまった。

と言っても、見る度に問題を突きつけられた気分になるのは変わらない。

早く、何とかする方法を考えないとな。

【赤明】

「おはよう、陽。それと、おかえりなさい」

【陽】

「ただいま。昨日は帰れなくてごめんな」

【赤明】

「いいのよ。私のためだったんでしょ？」

【陽】

「まあ、そうなんだけど」

【赤明】

「だから、いいのよ。むしろ、感謝してるわ」

【赤明】

「それに、ちゃんと電話もしてくれたもの」

【陽】

「そうか」

ちゃんと赤明のためになっただんな。

【赤明】

「今日は、出かけるって言ってたけど」

【陽】

「ん、そのつもりだよ。寮に閉じこもってばかりだと、気が滅入るだろ？」

【赤明】

「でも、大丈夫なの？」

やっぱり不安なのか。

【陽】

「大丈夫、なはずだ」

言い切れないのが辛い所だけど、常識の通用しない状況を相手にしているんだから、仕方ない。

下見をした状況では問題なかったけど、赤明と一緒にだと、何かが変わるかもしれない。

この辺の事は、一応電話で説明しておいた。

【陽】

「昨日も言ったけど、不安なら寮にいてもいいんだ」

嫌なのに、無理に息抜きに連れ出すんじゃ、本末転倒だ。

寮の中が安全地帯だって事はまず間違いないんだし。

赤明が不安に思うのなら、無理強いするつもりは無い。

【陽】

「どっつする？」

【赤明】

「行くわよ。寮に閉じこもっていたって、何も変わらないもの」

きっぱりと言い切る。

【赤明】

「それに、その……これって、デートなんじゃない？」

【陽】

「あ、ああ。そのつもりだけど」

【赤明】

「だから、行きたいの」

【陽】

「そ、そうか」

妙に照れくさい。

赤明も赤くなってるけど、俺も多分同じくらい赤くなってる気がする。

【陽】

「あー、それじゃ、行くか」

【赤明】
「ええ」

<学生寮 廊下>

階段で、2階まで下りて来た。

【陽】
「さて、ここからスタートだ」

【赤明】
「スタート？」

【陽】
「ああ。昔の人に会わずに出かける経路がここからなんだ」

【赤明】
「陽が昨日作った地図ね」

【陽】
「そついつ事」

ここから駅までの行き方は、昨日の夜何度も確認した。
もう、地図を開かなくても、ばっちり頭に入っている。

【陽】

「それじゃ、ついて来てくれ」

【赤明】

「わかったわ」

【陽】

「まずは、非常階段だな」

<通学路>

【陽】

「ここから、あそこの塀に下りるぞ」

【赤明】

「え、本気で？」

【陽】

「そうすると、壁を挟んで学園の裏に抜けられるんだ」

【陽】

「それじゃ、行くぞ」

【赤明】

「ちょ、ちょっと待って」

.....

<大通り>

【陽】

「次は、大通り経由で、商店街だ」

【赤明】

「え、ええ」

.....

<商店街>

【陽】

「えーと、4、5、6。この路地だな」

【赤明】

「ここを通るの？」

【陽】

「他の所は壁なんだ。さ、行こう」

.....

<大通り2>

【陽】

「橋も渡ったし、これで一安心だな」

【赤明】
「電車に乗るんじゃないかったの？ 駅は橋の向こうよ」

【陽】
「駅は安全地帯じゃないんだよ。だから、隣の駅まで歩くつもりだけど」

【陽】
「まあ、危険を承知で駅に入るって手もあるにはあるけど」

【赤明】
「……歩きましょうか」

【陽】
「そうするか」

……

……

……

隣の駅まで歩き、そこから電車で約40分。

そして、電車を下りてから、10分程歩いて、目的地に到着する。

<自然公園>

一面に広がる草原。

申し訳程度にベンチが置いてあるだけの、自然そのままと言う感じの公園だ。

小高い丘になっていて、歩いて来た道と町を眼下に一望できる。

遊びに来たらしい親子連れや、犬を散歩させている人で賑わっているが、

元が広いだけあって、そんなに混んでいるようには感じない。

【赤明】

「こんな場所があったなんて、知らなかったわ」

【陽】

「地図を探してる時に、偶然見つけたんだ」

図書館で観光マップを見た時に、この公園の写真を見たのが頭の片隅に残っていた。

世の中、何が役に立つのかわからないものだ。

【陽】

「さて……」

周囲を見回して確認してみる。

過去の住人の姿は、影も形も無い。

うまく行ったみたいだ。

【陽】

「よし、遊ぶぞー」

【赤明】

「気合が入ってるわね」

【陽】

「まあな」

せっかくの機会だ。

赤明に羽を伸ばさせてやりたい。

けど、赤明はどっちかと言うと大人しいからな。

俺が率先して騒いだ方がいいだろ。

【赤明】

「それで、何をするの？」

【陽】

「何って……うーん」

ぱっと思いつかない。

ただっ広い草原でやる事と言ったら……

【陽】

「鬼ごっこ?」

【赤明】

「……2人で?」

【陽】

「んー……」

つまらなさそうだ。

【陽】

「みんながいたらなあ……」

アルカンシエルが揃ってたら、1日中騒いでいられそうだ。

【赤明】

「あら、私と2人では不満なの?」

【陽】

「いやいや、まさか」

【陽】

「2人で十分、って言うかそっちの方が嬉しいって」

【赤明】

「どっかしら?」

【陽】

「そんな事言うなって」

【赤明】

「ふふっ、冗談よ」

悪戯っぽく、赤明が笑う。

からかわれたか。

【陽】

「そんな事を言う奴には、お仕置きだな」

赤明に手を伸ばす。

【赤明】

「そうは行かないわよ」

ひらりと躲された。

朝緋の長い髪がふわっと舞う。

【陽】

「あ、こら待て」

【赤明】

「待たないわ」

赤明が走り出す。

俺は、荷物を押さえながら赤明を追いかけた。

.....

【陽】

「捕まえた！」

【赤明】

「きゃっ」

赤明の腕を掴んで、腕の中に引き込む。

【赤明】

「捕まってしまったわね」

腕の中から赤明が俺を見上げる。

走ったせいで、乱れた髪と上気した顔。

【赤明】

「お仕置き、するの？」

【陽】

「そつだな.....」

引き寄せられるように、唇が重なった。

【赤明】

「ん.....」

【赤明】

「……今の、お仕置きになるのかしら」

確かに。

今がお仕置きになるんじゃない、俺が嫌われてるって事だ。

【陽】

「じゃ、捕まえた俺にご褒美って事で」

【赤明】

「そうしましょうか」

……

……

……

【陽】

「そろそろ、お昼にするか」

【赤明】

「ええ、そうね」

はしゃいでいるうちに、いい時間になった。

適当な木陰に移動して、レジャーシートを広げる。

【赤明】

「準備がいいのね」

【陽】
「ん、まあ」

勝手に用意されていたのは内緒にしよう。

と言うか、実家に物を返しに来させる策略じゃないだろうな……

【赤明】
「どうしたの？ 妙な顔をして」

【陽】
「いや、何でもない」

【陽】
「それより、弁当にしよう」

シートが上がって、弁当箱を取り出す。

2段重ねの、弁当箱と言うより重箱だった。

前に見たのは去年の運動会の時だ。

【赤明】
「気合が入ってるのね……」

【陽】
「ああ、俺もびっくりだ」

蓋を開けてみる。

1 段目には、おにぎり。

2 段目はおかずだった。

卵焼き、唐揚げ、肉団子、ポテトサラダ、プチトマト等など、豪華な内容だ。

ぎっしり詰めていない辺り、一応2人前なのは覚えていてくれたようだ。

【赤明】

「美味しそうね」

【陽】

「そっだな」

荷物を探すと、割り箸が1膳出てきた。

あれ？

「っっっっそ……」

無いな。

【赤明】

「あら？ 何か、紙が入ってるわ」

【陽】

「え？」

【赤明】

「手紙みたい」

【陽】

「貸してくれ」

【赤明】

「ええ」

2つ折りにしてある紙に『陽ちゃんへ』の文字。

嫌な予感しかしない。

開いてみる。

『お箸が1膳しかなかったの。ごめんね』

【陽】

「絶対嘘だろ！」

【赤明】

「どうしたの？」

【陽】

「これ、見てくれよ」

赤明に手紙を渡す。

赤明は手紙に目を通し、くすくすと笑う。

【赤明】

「これ、お母さん？」

【陽】

「まあ……」

【赤明】

「面白い人ね」

【陽】

「面白がってる場合かよ」

【陽】

「どろちゃって食べるんだ」

【赤明】

「でも、1膳はあるんでしょう？ 交互に使えばいいじゃない」

交互につて、

【陽】

「それでいいのか？」

【赤明】

「い、今更間接キスくらいどろつて事無いわよ」

何でもなさそうに言い切るが、微妙に顔が赤い。

とは言え、他に方法も無いか。

【陽】
「じゃあ、そうするか」

【赤明】
「ええ」

【陽】
「いただきます」

【赤明】
「いただきます」

【赤明】
「先にどうぞ」

【陽】
「ん、ありがとう」

「じゃ、まずは卵焼きを。」

【陽】
「あむ」

「うん、卵焼きだ。」

「寮で食べるのとは違う、家の卵焼きの味がした。」

【陽】
「それじゃ、はい」

赤明に箸を渡す。

【赤明】

「ありがとう」

【赤明】

「私も、卵焼きを貰おうかしら」

箸で卵焼きを取って、口に運ぶ。

【陽】

「どうだ？」

別に俺が作ったわけでもないのに、なぜか緊張した。

【赤明】

「美味しいわ」

【陽】

「そっか」

.....

交互に箸を使いながら、お弁当を食べ進めていく。

毎回毎回持ち換えるの、割と面倒だな。

.....よし。

【陽】

「赤明、何が食べたい？」

【赤明】

「そうね、唐揚げかしら」

【陽】

「了解」

箸で唐揚げを摘む。

【陽】

「んじゃ、あーん」

【赤明】

「ええっ!？」

【陽】

「口開けて」

【赤明】

「あ、あーん」

おずおずと開いた赤明の口に、唐揚げを運ぶ。

【赤明】

「はむ」

【赤明】

「お、美味しいわ」

【陽】
「それは良かった」

【赤明】
「じゃあ、次は私ね」

箸を持っていかれる。

【赤明】
「さあ、何が食べたいの？」

【陽】
「それじゃ、そのトマト」

【赤明】
「わかったわ」

赤明がプチトマトを俺の口に運ぶ。

【赤明】
「はい、あーん」

【陽】
「ん、もぐもぐ」

【赤明】
「どっこ？」

【陽】

「トマトの味だな」

【赤明】

「何当たり前の事を言ってるのよ」

【陽】

「はは、そつだな」

【陽】

「それじゃ、次は俺の番か」

赤明から箸を受け取る。

結局、食べさせ合いになってしまった。

.....

.....

.....

【赤明】

「ご馳走様でした」

【陽】

「満腹だ」

シートの上に寝転がる。

【赤明】

「そうねえ」

だらしない、とか怒られるかと思ったら、同意されてしまった。

【赤明】

「ふあ〜」

大きなあくびをする。

【赤明】

「満腹になると、眠くなるわね」

【陽】

「眠いのか？」

【赤明】

「少しだけ。あまり眠れなかったのよ」

眠れなかったのは、怖かったからだろうか。

俺が、側にいられなかった夜を、怯えながら過ごしたのだろうか。

やっぱり、側にいればよかったかもしれない。

でも、それを今更言っても仕方ない。

そんな事より、今できる事をするべきだ。

【陽】

「じゃあ、少し寝るか？」

【赤明】

「え、でも……」

【陽】

「いいからいいから。眠いのなら寝とけて」

【赤明】

「……それじゃあ、少しだけ」

【陽】

「ん、それがいい」

【赤明】

「肩を貸してくれる？」

【陽】

「ああ」

赤明が俺にもたれかかる。

肩に頭を乗せて、目を閉じた。

【陽】

「お休み、赤明」

< ANOTHER VIEW >
< 神社 神殿 >

手を合わせて、神様に祈りを捧げる。

今、この神社に祭られているのは、銅で作った矛。

あたしがこの神社に招いた神様の依代よりしろたる神器。

長く続く飢饉で、村人達の生活は、もう限界になっている。

わずかに残っていた貯えもとうとう底を尽き、弱い者から命を落としてしまっている。

そして、彼らはわずかな希望にすがって、この神社にやって来る。

自分たちは木の皮や根っこを食べて、

そうやって、何とか浮かせたわずかな食べ物を、神様へと言って持ってくる。

それなのに、あたしはどうしてあげる事もできない。

最近では、神様が疫病神だと言われるようになってしまった。

神様は、疫病神なんかじゃなくて、とても辛い思いをされた方なのに。

良かれと思って招いたのに、また辛い思いをさせてしまっているのかもしれない。

【村人】

「朝緋様、朝緋様！」

境内から、村人の声がする。

沢山の声。随分大勢いるのね。

< 神社 境内 >

境内に出たあたしの目に飛び込んで来たのは、沢山の村人の姿だった。

そのみんなが、手に手に、鍬や鎌、包丁なんかを持っている。

【朝緋】

「そう……」

あたしは、全てを悟った。

その時が、来たのだ。

【村人】

「朝緋様。このままじゃ、この村はお仕舞いだ。だから、神様にお怒りを静めてもらわねえと」

【村人】

「あんたが疫病神を招いたんだ！
だから、責任を取ってもらうぞ！」

【朝緋】

「あたしを、神に捧げるのね」

疫病神はいない。

この飢饉は、言ってしまうばただの自然現象。

あたしを生贄にしても、きっと何も変わらない。

でも、今の暮らしが苦しすぎて、神にすぎる事でも、心を保てなくなつたのなら、

みんなが、その手に持った凶器を、互いに向け合う前に、

あたしが、その狂気を鎮めよう。

それが、あたしの責任だから。

そして、あたしは目を覚ました。

そして、わたしは目を覚ました。

【赤明】

「夢………?」

目を開くと、陽の優しい瞳が私を見下ろしていた。

今のは、ただの夢？

それとも

< ANOTHER VIEW END >

< 自然公園 >

【赤明】

「夢……？」

赤明が、ゆっくりと目を開く。

その顔が、くしゃりと歪んだ。

まるで、今にも泣き出しそうな表情だ。

【陽】

「どうした？」

【赤明】

「悲しい夢を見たの」

【陽】

「どんな夢だったんだ？」

【赤明】

「……忘れてしまったわ」

【陽】

「ん、そっか」

覚えていそうに見えるけど、話したくないのかもしれない。

【赤明】

「ええ……」

【赤明】

「陽」

【陽】

「ん？」

【赤明】

「手を、繋いでくれる？」

【陽】

「ああ」

おずおずと差し出された手を握る。

その手を、いつもよりずっと強い力で握り返された。

おぼれそうな人間がすがるような、そんな必死さを感じる。

そんなに辛い夢だったんだろうか。

【陽】

「大丈夫だ。俺が傍にいる」

こんな言葉じゃ、気休めにしかならないだろうけど、

それでも、少しでも気が楽になるように。

繋いだ手を、想いを込めて握り返した。

【赤明】

「そうね。陽がいてくれて、良かったわ」

赤明が微笑む。

安心してくれたんだろうか。

でも、不思議と俺には、その微笑がとても儂く見えた。

< 学生寮 213号室 >

夜。

無事に公園から帰って来る事ができた。

赤明は、部屋に帰らずに、俺の部屋にいる。

【赤明】

「陽」

【陽】

「ん？」

【赤明】

「お茶会をしない？」

【陽】

「また唐突だな」

【赤明】

「今思いついたのよ」

【赤明】

「最近、他のみんなと顔を合わせていなかったでしょう？」

【陽】

「言われてみれば、確かに」

赤明と言うか、朝緋の事で手一杯だったからな。

黄牙や橙歌とすらほとんど話した覚えが無い。

ここらで、一回お茶会をするのもいいな。

【陽】

「ん、ならお茶会するか」

【赤明】

「ええ。じゃあ、道具を取ってくるわ」

【陽】

「俺はみんなを誘ってみるよ」

.....

.....

.....

十数分後。

突然の誘いだっただのにもかかわらず、

俺の部屋には、アルカンシエルのメンバーが勢揃いしていた。

団結力があるのか、みんな暇人なのか微妙な所だ。

【赤明】

「お茶が入ったわ」

いつもの様に、お茶が配られる。

そして、お茶会が始まった。

【緑璃】

「何だか凄く久しぶりな気がするね」

【紫苑】

「そうですね。前回から、大体1週間ですから」

【藍叉】

『陽と赤明が付き合い悪いから』

【橙歌】

「ほんとだよ。2人は付き合ってるのにさ」

【湖珠】

「あ、上手いんだよ。座布団1枚」

【陽】

「どこがだ……」

始まった瞬間から非難の嵐だった。

【黄牙】

「ま、実際付き合い悪いぜ。昼休みもいつの間にかいなくなってるし」

【緑璃】

「そうなの？」

【橙歌】

「そうそう。それに、食堂でも見かけないよね」

【橙歌】

「一体、どうして何してるのね？」

【陽】

「ん……それは、秘密だ」

【赤明】

「そうね」

【橙歌】

「うわ聞いた？ 2人の秘密だって」

【緑璃】

「ラブラブだね」

本当にそんな甘い話だったら良いよな。

実際は隠れてるから言えないって、切実な話なんだけど。

【藍叉】

『そんなにラブラブなら』

【藍叉】

『もうキスした？』

【陽】

「またか」

前のお茶会、正確にはその翌日だけど、でも聞かれたな。

【湖珠】

「私も、気になるんだよ」

じっと見てくる視線は、全員分。

口に出さない面々も、興味津々ではあるらしい。

赤明に視線を送ると、小さく頷いた。

【陽】

「まあ、したけど」

『おおー』、とか『きゃー』なんて場が沸く。

【緑璃】

「じゃ、じゃあ、大人の階段、は？」

【陽】

「うえ!？」

この人も、またそれを聞くのか。

そこまで言わないといけないのか？

【紫苑】

「あの、そこまで聞くのは止めませんか？」

【緑璃】

「あ、そうだね。そうしょっか」

紫苑、ナイスだ。

助かった……。

にしても、また俺達の話に食いつかれるとは。

【陽】

「なあ、赤明。お茶会はちょっと早まったんじゃないか」

【赤明】

「そうかもしれないわね……」

……

……

……

久しぶりのお茶会も解散の時間になった。

出口までみんなを見送りに出る。

【黄牙】

「んじゃな」

【紫苑】

「失礼します」

【緑璃】

「お休みー、またね」

【藍叉】

『バイバイ』

【湖珠】

「お休みなんだよ」

ぞろぞろと部屋を出て行く。

【橙歌】

「んじゃねー。って言うか、赤明は？」

【赤明】

「私は陽ともうちよっと話してから帰るわ」

【橙歌】

「ふーん。じゃ、僕は先に帰るよ」

【赤明】

「ええ」

【赤明】

「みんな……さようなら」

【橙歌】

「うん。じゃあねー」

最後に残っていた橙歌も帰って行った。

扉を閉めて、部屋の中に戻る。

【陽】

「赤明はまだ帰らないのか？」

【赤明】

「それなんだけど、今日、泊めてくれる？」

【陽】

「え、泊まるのか？」

【赤明】

「陽といると安心できるの」

【赤明】

「だめ、かしら？」

じっと見つめられる。

赤明の為になるなら、迷う事は無い。

【陽】

「ん、いいよ」

【赤明】

「ありがとう」

それじゃ、赤明が泊まれる様に準備をしないとな。

.....

.....

.....

【陽】

「電気消すぞ」

【赤明】

「いいわよ」

電気を消して、ベッドに向かう。

先に入っている赤明が空けてくれたスペースに潜り込んだ。

【陽】

「それじゃ、お休み」

【赤明】

「お休みなさい」

布団の中で、赤明が体を寄せて来た。

柔らかな膨らみが押し当てられる。

赤明の体温を感じて、体が熱くなる。

平常心平常心……

【赤明】

「陽……」

ぎゅっと抱きしめられた。

【陽】

「あのさ、赤明？」

【赤明】

「何？」

【陽】

「ちょっと離れてくれないか？」

【赤明】

「どうして？」

【陽】

「どうしてって……」

ストレートには言い難い。

微妙に目を逸らした。

【陽】

「その、俺も男なわけで」

【陽】

「そんな事をされると、変な気分になるわけで」

【赤明】

「……いいわよ」

【陽】

「え……？」

【赤明】

「私も……変な気分だから……」

思わず、赤明に視線を向けた。

月の薄明かりに、赤明の姿が浮かび上がる。

潤んだ瞳。

熱っぽい吐息を、間近に感じる。

【陽】

「赤明……」

ここまで誘われて、我慢するつもりは無かった。

体を起こして、顔を近づける。

【赤明】

「ん……」

赤明の方から、唇を押し付けてきた。

【赤明】

「ちゅ……ちゅ……」

ついでに、何度も唇を合わせる。

【赤明】

「ちゅく……んっ」

唇が触れる瞬間を狙って、赤明の唇を舌でなぞる。

それに驚いたのは一瞬、

そつと口を開いて、応えてくれた。

【赤明】

「んちゅ……ん、くちゅ……」

差し込んだ舌に、舌が絡んでくる。

【赤明】

「ちゅう……あむ、んう……」

【赤明】

「ふぁ……」

息苦しくなってきた、ようやく唇を離した。

名残惜しそうに唾液が糸を引いた。

ベッドに横たわった赤明の体を見下ろす。

見慣れたとは言っても、馴染みの薄い衣装。

襟元に手を差し入れて、左右に開くと、丸みのある胸が露になった。

和服っぽいから下着は付けていないんだろうかとか、どうでもい

い事が頭の隅をよぎる。

誘われるように、胸に触れた。

【赤明】

「ふぁ……あ……あぁ」

赤明が甘い声を零す。

手で包み込むように、ゆっくりと撫で回す。

【赤明】

「あん……あ、はぁっ」

あれ？

手に感じる、小さな違和感。

【陽】

「赤明、胸が大きくなった？」

【赤明】

「あ……」

【赤明】

「やっぱり気づくのね……」

なぜか、拗ねた様な顔をする。

【赤明】

「私じゃないわ。その、今は、あたしの体なのよ」

【陽】

「ああ……」

朝緋の方が胸が大きいのか。

変わってたのは、服だけじゃ無かったんだな。

【赤明】

「もう……見ないで」

襟を正して、胸を隠してしまった。

【陽】

「おいおい……」

見るなど言われても……

見たいだろ。男なら。

【赤明】

「そんな顔しないで」

【赤明】

「かわりに、その……私が、してあげるわ」

……

……

……

こうして、夜は更けていった。

六月二十九日

< 6月29日(月) >

< 学生寮 213号室 >

眩しい光が、まぶた越しに差し込む。

【陽】

「んー……」

朝か。

起き上がろうとすると、腕が引っ張られた。

【赤明】

「うーん……」

赤明が俺の腕を枕にして眠っていた。

安らかな寝顔だ。

じっと見ていたくなる誘惑を振り切って、時計を見る。

今何時だろう。

……遅刻寸前だった。

【陽】

「やばっ！」

飛び起きる。

【赤明】

「んぎゅ…………なに…………？」

腕から落ちた赤明が、寝ぼけ眼で起き上がった。

何も着ていない裸身が露になる。

【陽】

「うわぁっ」

布団をかぶせる。

朝一には目の毒極まりなかった。

【陽】

「赤明！ さっさと起きてくれ！」

制服を身に着けながら怒鳴る。

【赤明】

「あ、もう朝なの？ おはよう」

【陽】

「おはようとか言ってる場合じゃないって。遅刻寸前だ」

【赤明】
「大変、急がないと」

とか言いながら、ベッドの上で布団に包まっている。

【陽】
「いや、お前が急げよ」

【赤明】
「あ、私、今日は休むわ」

事も無げに言われた。

【陽】
「え、マジで？」

【赤明】
「ええ……。もう、外には……」

【陽】
「ん、わかった」

消えていないのはわかっている。

赤明が休みと決めたのなら、それでいい。

でも、先週は普通にしていないと不安に押しつぶされそうって言うたのに。

気が変わったんだろうか。

【赤明】

「後5分しかないわよ」

【陽】

「うわ、やばい」

鞆に教科書を詰め込む。

扉に向かうと、布を1枚纏っただけの格好で赤明がついて来た。

【陽】

「じゃ、行って来るよ」

【赤明】

「あ、待って」

【陽】

「ん？」

引き止められて、振り返る。

【赤明】

「ん、ちゅ」

【陽】

「っ」

唇が重ねられた。

【赤明】

「ちゅう……あむ……ふぁ……」

背中に手を回して、一心不乱に唇を求める。

俺も、それに応えて、赤明とキスを交わした。

【赤明】

「は……ぁ」

長いキスを終えて、唇を離す。

【陽】

「あ、赤明？ どうしたんだ？」

【赤明】

「……でんしてたの」

消え入りそうな声で、赤明が答える。

【陽】

「え？」

【赤明】

「じゅ、充電してたのよ！」

【陽】

「充電て……」

【赤明】

「陽がいなくても、頑張れるようによ」

【陽】

「そ、そうか」

【赤明】

「でも、これで頑張れるわ。ありがとう」

【陽】

「ああ、どういたしまして?」

【赤明】

「ふふ、じゃあ、行ってらっしゃい」

【陽】

「ああ、行ってきます」

出かける時にキスとか、何か新婚夫婦みたいだ。

赤明と夫婦か……って何を考えてるんだ!

さっさと学校に行こう。

俺は、1人浮かれながら学校へと向かうのだった。

< ANOTHER VIEW >

< 学生寮 213号室 >

扉が閉まり、陽の足音が遠ざかって行く。

【赤明】

「よ、う……」

体を支えている事もできなくなって、その場に座り込む。

涙が溢れて、次々に床に落ちて行った。

私は、うまく笑えていただろうか。

きちんと、陽を送り出せただろうか。

最後に会った私は、幸せだったと伝えられただろうか。

私は、今日、死んでしまうから。

昨日の夢は、あたしの記憶。

次の日を予知する、あたしの力が朝緋に見せた夢。

私はあたし。

同じ様に傷ついてしまうこの体は、あたしと同じ様に命を神に捧げられる。

陽、ありがとう。

私を信じてくれて、私のためにいろいろな事をしてくれて。

あなたがいたから、私は今まで頑張れたのよ。

あなたがいなかったら、きっと、今日までだって持たなかった。

だから、ありがとう。

この唇と、体に残るあなたの思いが、

きっと、最期まで私を支えてくれるわ。

< ANOTHER VIEW END >

< 学園 教室 >

昼休みになった。

【黄牙】

「陽、昼飯はどうするんだ？」

【陽】

「寮に戻るよ。赤明の様子も見たいし」

【黄牙】

「そうか。んじゃ、俺も食堂にするか」

【陽】

「ん、なら行くか」

【黄牙】
「おう」

黄牙と連れ立って、教室を出た。

<学生寮 廊下>

【陽】
「俺は赤明を見てから食堂に行くから」

【黄牙】
「おう。席は取っておいてやる」

【陽】
「頼む」

黄牙と分かれて、階段へと向かった。

<学生寮 213号室>

【陽】
「ただいま」

部屋に入る。

【陽】

「あれ、赤明？」

部屋に赤明の姿が無い。

自分の部屋に戻ったのかな。

でも、昨日持っていた荷物は置きっぱなしだ。

【陽】

「ん……？」

机の上に、置いた覚えの無い紙がある。

赤明がメッセージでも残したのか？

紙を手にとってみる。

【赤明】

『ありがとう さようなら』

たったそれだけの、短い手紙だった。

それだけに、ろくでもない予感しかしない。

【陽】

「何だよ、それ」

【陽】

「何なんだよ!!」

赤明の身に、何かが起きたのか？

多分、過去絡みだ。それは間違い無い。

だとして、一体何が？

襲われたとかなら、こんなメッセージなんて残す暇は無いはずだ。

【陽】

「くそっ」

わからないなら、赤明を見つけるしかない。

俺は、部屋を飛び出した。

<学生寮 廊下>

4階まで駆け上がり、赤明の部屋へ。

ドアノブをひねる。

【陽】

「鍵がかかっているか」

【陽】

「赤明！ 赤明、いるか！？」

扉を叩くが、返事は無い。

やっぱりいないか。

あんな手紙を残しているから、いないとは思ってたけど。

次だ。

<学生寮 食堂>

食堂に入り、周りを見回す。

やはり、赤明の姿は見えない。

【黄牙】

「お、陽。こっちだ」

【陽】

「黄牙！」

暢気に手を上げる黄牙に駆け寄る。

【陽】

「黄牙、赤明を見なかったか？」

【黄牙】

「赤明？ 見てねえぞ」

【陽】

「そうか……」

【黄牙】

「赤明がどうかしたのか？」

【陽】

「ん、詳しく話してる暇は無いけど、今すぐ赤明を見つけないといけないんだ」

【黄牙】

「何かやばいのか」

【陽】

「ああ」

【陽】

「黄牙、手伝ってくれるか？」

【黄牙】

「任せろよ」

頼もしい笑みを浮かべて、黄牙が立ち上がる。

【黄牙】

「心当たりはあんのか？」

【陽】

「いや、わからない」

【陽】

「けど、2階より上の可能性が高いな」

逃げているのだとすれば、過去の住人が来られない場所にいるはずだ。

【黄牙】

「2階より上。それだけか？」

【黄牙】

「学園の中か外かもわかんねえのか？」

【陽】

「ああ」

【黄牙】

「よし。だったらお前は外に行け」

【黄牙】

「中はこっちに任せろ」

【陽】

「ん、わかった。頼む」

【黄牙】

「おう」

【陽】

「あ、そつだ。学園の中なら、とりあえず屋上を見てくれ」

【黄牙】

「屋上だな。わかった」

【陽】

「じゃあ、俺は行くから」

食堂を飛び出す。

<通学路>

【陽】

「赤明ーっ!」

大声で赤明の名前を呼ぶ。

歩いていた学生が何事かという目を向けて来るが、恥ずかしいなんて言っていない。

【陽】

「赤明ーっ」

もう一度呼んでみる。

やっぱり返事は無い。

【陽】

「くそっ」

この辺りにはいないか。

ここからだ大通りの方が神社の方だけど……

神社は逃げる場所として使えない。

なら、大通りの方だ。

<大通り>

大通りを走っている時、携帯が着信を知らせた。

【陽】

「黄牙か!？」

見つけたのか？

メールを開く。

From: 大陣 黄牙

Subject: 緊急

赤明を探してくれ。

見つけた奴は、陽に連絡入れろ。

【陽】

「あいつ……」

何も考えずにアルカンシエルメンバーに送ったな。

まあいい。

こうなったら、みんなにも協力してもらおう。

続けて黄牙からメールが来た。

From: 大陣 黄牙

Subject: 無題

屋上にはいねえぞ。

いなかったか。

【陽】

「どこに行ったんだ……」

<商店街>

.....

<公園>

.....

<駅前>

.....

<橋>

探し回っているうちに、橋まで辿り着いた。

最初に見つけた安全地帯。

ここにならと思ったけど.....

【陽】

「ここにもいないか」

いそうな場所は探し尽くした。

これ以上は、本当にしらみつぶしに探すしかない。

アルカンシエルのメンバーから次々にメールが入ってくるが、

それは、どれも赤明の不在を示す知らせばかりだ。

赤明……

お前は、どこにいるんだ……

その時、また新しいメールが届いた。

差出人は、

【陽】

「那美……」

他人事だと言った那美。

それなのに……どうして。

いや、今は忘れよう。

何か情報があるのなら、何だって構わない。

From: 那美

Subject: 神社へ

【陽】

「神社だって？」

過去と現在で変わらない地形の場所。

逃げ場の無い袋小路なのに、そんな所に赤明がいるのか？

【陽】

「……………」

信じるか、信じないか。

それだけしかないのなら、俺は

< ANOTHER VIEW >

< 神社 境内 >

神社を訪れてから、随分と時間が過ぎた。

いつも付きまとして来た村人が、不思議な事に今は1人もいない。

もう、終わりだという事を彼らも知っているのかしら。

追いかけている時はあんなに怖かったのに、

今は不思議と恐怖を感じない。

覚悟を決めたからなのだろうか。

きっと、1日前に死ぬ事を知ったあたしも、こんな気持ちでその時を迎えたのね。

大好きな陽にも。

大切な友人達アルカシエルにも。

一方的にだけど、きちんと別れを告げることもできた。

だから、もう、心の整理はついている。

きっと、みんなと会えば、陽の顔を見たら、

未練だらけになってしまつからと思って、寮から出た。

あたしが傷つけば、私が傷つく。

どこに逃げても、隠れても同じだから。

あたしと同じ、この場所を選んだ。

今なら思い残す事は無い。

それなのに

石段を上って、あなたが来た。

息を切らせながら、走って来た。

【赤明】

「陽……」

< ANOTHER VIEW END >

< 神社 境内 >

石段を駆け上がる。

境内に駆け込むと、そこに、赤明がいた。

【赤明】

「陽……」

呆然と、赤明が俺の名前を呼ぶ。

【陽】

「神社ってのは、盲点だったな」

【陽】

「おかげで、町中走り回らされたよ」

【赤明】

「どうして……?」

【陽】

「どうしてって、あんな手紙置いていなくなったら、探すに決まってるだろ」

【陽】

「状況はよくわからないけど、とりあえず帰ろう」

【陽】

「ここは危ないって、説明しただろ」

赤明に近づく。

【赤明】

「あ……来ないで」

俺が近づいた分、赤明が後ずさりした。

【陽】

「赤明？」

何で逃げるんだよ。

【赤明】

「どうして、来てしまうのよ……」

【赤明】

「陽に会ったら、だめになるのに……」

いやいやと首を振りながら、赤明が叫ぶ。

【赤明】

「生きていたって、思ってしまうじゃない！」

【陽】

「生きていたって、それ……どういう意味だよ」

それじゃまるで、赤明が死んでしまうみたいじゃないか。

【赤明】

「……あたしは、今日死んでしまうのよ。神様に捧げる、生贄にされて」

【陽】

「なっ……」

悲しげに、赤明が笑う。

何かを諦めてしまっている、そんな笑みだ。

【陽】

「どうして、そんな事がわかるんだよ」

【赤明】

「夢を、見たの。あたしを生贄にするって、村の人達が言うてくる夢」

【陽】

「そんなの、ただの夢かもしれない」

【赤明】

「あたしの持っていた力を忘れたの？」

【陽】

「あ……」

村人に崇拜される原因でもある、朝緋の力。

見えない物を見る力。

そして、

【陽】

「1日先の、未来予知……」

【陽】

「そんな……」

こんな形で、タイムリミットが来るなんて。

いくらなんでも、突然過ぎる。

【陽】

「何か、どうにか、しないと……」

【陽】

「そつだ、逃げよう。あいつらが、絶対に追いかけて来られないくらい、遠くに行こう」

【赤明】

「陽……」

赤明が首を振る。

【赤明】

「あたしが怪我をしたら、私にも同じ傷ができる。そつでしゅう？」

そうだよ。

そんな事はわかってる。

それでも

【陽】

「何もしないで、終わるなんて」

【陽】

「このまま諦めるなんて、できないだろ！」

【赤明】

「もう、無理なのよ」

【陽】

「無理だなんて言うなよ！」

【陽】

「生きていたって、言ったじゃないか！」

【赤明】

「でも、もうどうしようも無いじゃない！」

【陽】

「それは……」

その通りだ。

もう、何も、打つ手なんて残って無い。

【陽】
「何で、こんな……っ」

【陽】
「いまさら生贄なんか、意味無いだろっ！」

【赤明】
「そうね。きっと、意味なんて無いの。けれど、それで、みんなの気が済むのなら……」

【赤明】
「それが、神様を招いたあたしの責任だから」

「ここで殺される事が、責任の取り方だって、そう言っのか？
でも、そんなのは、認められない。」

「だって、それを認めたら、朝緋と同じように、赤明が死んでしま
うんだ。」

朝緋と同じように？

何だ？ 何かが引つかかる。

考える、この違和感の原因は何だ？

赤明が死ぬ……なぜなら、前世である朝緋が死んだから。

そうなのか？

いや、そうじゃない。

そう思う根拠を、俺はどこかで……

『あなたの前世にあたる方は、若くして死んでしまったんです。ですから、生きられなかった分も、あなたに幸せであって欲しいと願っているんですね』

これだ。

朝緋が死んだ事で、赤明が死ななければならぬのなら、

どうして、あの時テレビに出ていた人は、生きていられる？

どう見ても、ゲストは初老と言われる年代に入っていた。

間違っても、若くして死ぬなんて言葉が使われる年齢では無い。

それなら、前世の死が、今の死とは結びついていないって事じゃないか。

それなのに、赤明が朝緋と同じように傷ついているのはなぜだ？

多分、このままだと、赤明は朝緋と同じで死んでしまう。

そこには、何らかの差があるはずだ。

あのテレビがインチキ番組だったから？

赤明と朝緋の関係ほど、深く知らないから？

そんな理由で片付けていいのか？

もっと、何かがあるんじゃないや

【那美】

『結局は、他人事なんだよ』

【陽】

「っ！」

そうか　そういう事だったのか。

ごめん、那美。疑って悪かった。

あれは、ちゃんとしたヒントだったんだな。

【陽】

「違う……そうだ、違うんだ！」

【赤明】

「陽……」

困ったように赤明が笑う。

どうしてわかってくれないのとも言いたげに。

でも、赤明。

わかってないのは、お前の方だ。

【陽】

「神様を招いた責任って言うなら、それはあるかもしれない」

【陽】

「でも、それは、朝緋のやった事じゃないか！」

責任を取るために、村の人のために命を投げ出す。

それが正しいかどうかはわからないけど、そう決めたのならそれでもいい。

でも、それは朝緋の心が決めた事で、朝緋が作った原因に因るものだ。

【陽】

「赤明は朝緋じゃないだろ？ 何で、お前がそれに傷つかないといけないんだ!？」

朝緋が今の赤明と同じ年で死んだってわかって、やっと気が付いた。

赤明が、ずっと朝緋と一緒に生きて来て、

赤明自身が、自分が朝緋である事をあまりに普通に考えているから、今まで気づかなかったけど、

よく考えたら、その前提自体が不自然だったんだ。

もし、俺が占い師か何かに、『あなたの前世は です』とか言われたとしても、

『ああ、そうなんだ』って思うくらいのもんだ。

俺だけじゃない、多分、ほぼ全ての人がそうだろう。

前世とやらに日々共感したり、その生き様に左右されたりなんかするはずが無い。

そして、多分それが正しいはずなんだ。

赤明は、確かに朝緋の生まれ変わりだ。

赤明は、確かに朝緋の記憶を持っている。

それは疑う事じゃない。

それを疑う事は、赤明を信じないって事だから。

でも、その事実が赤明と朝緋をイコールで結びつけるものなんかじゃない。

前世が何だろうと、誰の記憶を持って生まれてこようと、

赤明の命は、他の誰の物でも無く、赤明の物だ。

例えば、親子や兄弟が、関係はあっても別々の個人であるように、

赤明と朝緋は、同一人物なんかじゃない。他人なんだ。

那美の言っていたのは、こう言う意味だったんだ。

【陽】

「朝緋の記憶に赤明が縛られてたんじゃ駄目なんだ。だって、朝緋はもう死んでるんだから」

【陽】

「お前は朝緋の人生を……もう終わってしまってる物語の中を生きるつもりなのか？」

いや、朝緋の人生を生きる、それならまだいい。

けれど、今の赤明は、朝緋としてその命を終えようとしてさえいる。

【陽】

「過去の亡霊と一緒に、心中するつもりか!!」

【赤明】

「そんな事、言われても……」

【陽】

「赤明。あの過去を、現実と切り離せるのは、お前だけなんだ」

過去の村人は、現在の物に触れられない。

過去は、所詮過ぎ去った幻だ。

それを、現実にしてしまってるのは、朝緋と一体であろうとする、赤明の心だ。

だから、赤明が朝緋と違うのだと、そう思いさえすれば、

たったそれだけで、赤明は自身を過去の呪縛から解放できるはずだ。

なぜなら、赤明は神社の娘でもなければ、神様を招いたりもしていない、

ごく普通に学園に通っているだけの、女の子でしかないんだから。

【赤明】

「でも……だって、わからないじゃない！」

首を振って、赤明が叫ぶ。

【赤明】

「ずっと、ずっとあたしは朝緋って呼ばれてて、だから、私だって朝緋って呼ばれてたのに！」

【赤明】

「赤明って、一体誰なの？」

朝緋って、一体誰なのよ？」

【赤明】

「どこまでが私で、どこからがあたしなの？」

【赤明】

「私たちは、一緒なのよ。ずっと、一緒だったのよ！」

そうだったな。

赤明は、本当に幼い頃から、朝緋と一緒に生きてたんだよな。

赤明にとって、朝緋はもう、自分自身って言えるほどの存在なんだ。

それを、切り離してしまう事は、自ら半身を捨て去るようなものなんだろう。

でも、赤明。

赤明という単体を確立することは、朝緋を消してしまうことじゃないんだ。

でも、それには、赤明が生きていないといけないから、

今は、俺は朝緋を否定する。

【赤明】

「私とあたしの、何が違うのよ!?!」

【陽】

「何もかもだ！」

赤明の手を引き寄せて、赤明の体を抱きしめる。

【陽】
「こうやって、赤明を抱いたのを覚えてる。今の朝緋の体は、赤明の物じゃないって、俺は証明できる」

昨日、朝緋の姿の赤明を抱いた時、俺は確かに違和感を感じた。

前世だって言っつて、見た目に似ていても、違う部分は沢山あった。

【陽】

「俺は、好きになったから。」

赤明の事を、好きになった。

そこには、朝緋はいないんだよ」

赤明と交わした言葉の一つ一つ、通わせた想い。

そこに、朝緋の入る余地は無い。

俺は、確かに赤明の心を知り、赤明を愛した。

【陽】

「何が違うのかわからないのなら、俺が全部証明するから」

身も心も、言語に無いようなその他の全ての物も、俺が証明してみせる。

だから

【陽】

「赤明を好きになった俺を、信じてくれ」

【赤明】

「陽……」

それきり、赤明は口をつぐんでしまった。

何を思っているのか、俺はそれを想像する事しかできない。

もう、時間に余裕は無いけれど、でも、俺は、赤明の言葉を待った。

【赤明】

「そう……なのね」

長い沈黙の後で、ようやく赤明が口を開いた。

【赤明】

「たった1つだけ、確かに違う物が……私にはあったのよ」

【陽】

「見つかったのか？」

【赤明】

「ええ……。それは、あなたよ」

【陽】

「え？」

【赤明】

「私には、陽がいる。でも、朝緋には、陽はいなかった」

【赤明】

「あなたを好きって叫ぶ心が、赤明の心。そして……」

赤明が、俺の背中に腕を回す。

その体に、ガラスを砕いた様なひびが入った。

【赤明】

「あなたに抱きしめられたって思う、あなたを感じたって思う
この体が、私のものなのね」

朝緋の姿が、砕け散った。

腕の中に、赤明の体を感じる。

【赤明】

「陽。私は」

言いかけた赤明の言葉を、そつとさえぎる。

【陽】

「言ってやれ、あいつらに」

石段を上って、村人達が姿を現す。

手に農具や包丁を持って、神社へと押し寄せる。

俺と赤明を素通りした彼らの前に、神殿の中から1人の少女が姿
を見せた。

【赤明】

「朝緋……」

凜とした立ち姿。

覚悟を決めた者の、凄烈な美しさを身にまといている。

赤明は、初めて、自分では無い朝緋の姿を見ていた。

村人達が、口々に何かを叫ぶ。

絶望に染まったものの、狂気の叫び。

朝緋は、穏やかにそれを受け入れていた。

過去と今、2人の少女がふっと視線を合わせたように見えた。

【陽】

「赤明」

赤明が小さく頷く。

朝緋と向かい合い、俺の手をぎゅっと握った。

しっかりと、握り締める。

俺の存在が、赤明を肯定するのだから。

そして、口にする。

【赤明】

「私は、赤明よ」

その、決別の言葉を。

【赤明】

「朝緋じゃないわ」

世界がひび割れる。

過去の景色が、砕け散る。

その最後の瞬間、朝緋の声が聞こえた。

【朝緋】

「ごめんなさい、み様」

そして、その時は終わった。

過去は等しく、時間の隔たりに消えて行った。

【陽】

「終わった……」

【赤明】

「陽……私……」

赤明の頬に涙が零れる。

【赤明】

「こつするしか、無かったの？ 朝緋の事を、消してしまっしょか…」

【陽】
「消えてなんてないよ、赤明」

【赤明】
「え？」

【陽】
「だって、赤明は覚えてるだろ？」

朝緋は、最初から過去の存在だった。

赤明がその記憶を継がなければ、おそらく、誰にも知られないまま消えていた。

【陽】
「俺にも教えてくれよ、朝緋の事。
そつすればきっと、朝緋は無かった事になんてならないから」

赤明はきつと、前世あきじの事を忘れる事なんてできないだろう。

でも、忘れない事は悪い事じゃないはずだ。

【陽】
「覚えていよう、朝緋の事」

【赤明】
「ええ……。私は、彼女が生きられなかった時間を、生きられるか

ら

【陽】

「ああ」

赤明は、朝緋が死んだ先の時間を生きる。

朝緋の記憶と、向き合いながら。

過去に存在した、心優しい少女を消し去らないために、語る事ができる。

きっとそれが、朝緋の記憶の正しい使い方なんだと、そう思った。

【陽】

「さて、帰ったらちょっと大変だぞ」

【赤明】

「どうして?」

【陽】

「何せ、赤明を探すのでアルカンシエルを総動員したからな」

【赤明】

「ええ!?! 授業は?」

【陽】

「一応昼休みだったけど……」

【陽】

「授業に食い込んでたら、サボってるかも」

【赤明】

「ど、どうするのよ？」

【陽】

「うーん……ま、どうにかなるって」

【赤明】

「なるのかしら……」

【陽】

「なるさ」

どうにかなるに決まってる。

俺たちは、こんなどうにもならなさそうな事だって乗り越えられ
たんだから。

生きていて、未来が続くから、どうにだってできるんだ。

【陽】

「さあ、帰ろうか」

【赤明】

「ええ」

数歩歩いて、赤明がくると振り返る。

【赤明】

「陽」

【陽】

「ん？」

【赤明】

「私がまた『私』を迷わないように、ずっと、傍にいて」

【陽】

「ああ、もちろんだ」

そうして、俺達は歩き始めた。

朝緋の知らない、赤明の物語を。

そして

その物語で、俺はずっと、赤明の傍にいる。

新嶋赤明編〈Fin〉

<『赤い虹』がかかりました>

六月二十九日（後書き）

とりあえず1ルート終了です。

次は、書き終わっている『黄』か色の順で『橙』のどちらかです。

『黄』ルートはメインキャラとしては黄牙ですが、ヒロインは唯鈴になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5144j/>

Arc-en-ciel ~ なないろのきざはし ~ （赤明ルート）

2011年10月9日19時14分発行